
Una fantasia del vongole ~ボンゴレの幻想 ?世の軌跡~

c o c o a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Una fantasia del vongole ↴ボン

ゴレの幻想
?世の軌跡

【Zコード】

Z4911Z

【作者名】

coco a

【あらすじ】

ボンゴレ?世の座を継ぎ、高校生になつた沢田綱吉はある日突然、発光したボンゴレリングにより、ナツツと共に幻想郷に幻想入りしてしまう。

そこで綱吉は、?世の軌跡を辿りどんな事を経験し学ぶのか?

なお、設定はもちろん作者のオリジナルです。

e p i t o d e ~世の夢跡~ (記書き)

九月といつ予定でしたが、少し早めて、ついに連載を始める事が出来ました。

これから、僕の真価が試される?
まあ、頑張ってつづけるので

よろしくお願ひしますっ！

幻想郷にある、とある平原。

そこには、髪は短く金髪で白いシャツを着た一人の少年と、一いちらも、髪の色は金色で腰まで届きそうなほどのロングヘア、紫色を基調とした肩口が開いた洋服を着ている少女が立っていた。

「こちらありがとうございます、紫。

君のお蔭で、僕は此処で色々な事を学ぶ事ができた。」

先に口を開いたのは少年の方だった。

「いいえ、こちらこそ。

私もあなたと居た時間は僅かながらも楽しかったわ。」

少年に紫と呼ばれた少女は手に持つて居る扇子で口元を隠し、少年へと語る。

「…………本当に彳亍てしまつの？」

ジョット？

少年の名はジョットといつらじご。

「…………ああ、僕は此処で経験した事を外の世界で生かしたいんだ。

町の民を守る為に。」

ジョットは真摯な眼差しで紫を見つめる。

「……………そうね。」

あなたが一度決めた事はどんな事があつても曲がら無いもの。
まあ、それがジョットの良い所だけれども…………

「……………」

紫はジョットを見て苦笑する。

それにつられ、ジョットも頬を緩める。

「紫……………じゃあ、そろそろ僕を元の世界に戻してくれ。」

ジョットはまた真剣な表情へ戻る。

「……………わかったわ。」

紫はそのままジョットの真下に空間の割れ田を造り、ジョットをそこに落す。

「……………ありがと、紫。」

G i v r o e t e r n a a m i c i n i a

ジョットは落ちる間にイタリア語で、何かを呟き、消えていく……

そう、このジョットこそイタリアで最大勢力を誇る、ボンゴレファ
ミリーの創始者、ボンゴレ^{ブローメ}?世にして、後のボンゴレ^{デーチモ}?世、すなわ
ち沢田綱吉とその守護者達に大きな影響を与える事になるとは、この時はまだ誰も知るよしは無かった……

e p i l o g u e ～?世の夢跡～（後書き）

さて、最初という事で伏線？を張つてみました。

ちなみに、この二人称と一人称は状況に応じて使い分ける予定です。

質問、物語のリクエスト等も応募します。

t a r g e t r o c k (前書き)

明日の分という事で、二つ目の投稿。

魔術剣士の方も力入れてやらないとなあ～

target rock

あの出来事から、時は流れ
時代は？世から？世の時代へ……

ボンゴレ？世、沢田綱吉の血^{サガミ}にて。

「ふう～、やっと終わった。」

高校に（無事）進学した俺、沢田綱吉は勉強机に置いてある今日の分の学校の宿題を終わらせ、椅子に座ったまま背伸びをする。

「駄目シナにしては早かったな終わるのが早かったな、誉めてやるべ。」

すると、机の上に座っている、最強の赤ん坊アルゴバレーーの一
人であり、俺の家庭教師であるリボーンが、自分の相棒である変身
トカゲ、レオンを左肩に乗せながら、俺を誉めてくれる。

でも久しぶりだなー、コイツに誉められるのも。

高校生になった今でもあの時みたいに振り回されているからな。

俺は心中で苦笑し、机の引き出しを開き、手の甲にオレンジ色で「ナツ」と書かれたひと組のミトンの手袋と、オリジナル原型のボンゴレリングとナツのアニマルリングを取り出す。

そして、ナツをリングの姿から解放する。

「ガウ、ガウッ！」

リングの姿から久しぶりに解放されたナツは、嬉しそうに俺の部屋を走り回る。

……………に、しても懐かしいな。

ナツの姿を見ていると、あの十年後の世界での出来事が今でも鮮明におもいだすなあ。

まだ、三年しか経つてないけど。

スパナに入江君。

世界征服を目論んでいた白蘭に、俺達を過去へ還す為に命の炎を燃やした やコニ……………

今でも自分が経験した事が嘘の様に思えて來ることがある。

俺は手に取ったボンゴレリングを首にかけ、ミトンの手袋をこちらも久しぶりに手にはめる。

自慢じゃ無いけど、高校一年の時、リボーンのボンゴレ式、高校入学祝いみたいな物（正確に言つとスバルタ修行）のせいで、死ぬ氣丸無しで超死ぬ氣化モードになる事ができる様になつた。

……………でも、あの修行はかなりひどかつたけど……………

「に、してもツナ。

よく十代目を継ぐ決意をしたな。
てっきり俺は断ると思っていたぞ。」

……………そして、重要な事がもう一つ。

俺は、かなり迷った末に、未来から帰るとすぐ九代目に継承式を開いてもらい、正式にボンゴレ？世の座を継ぐ事が決定したのだ。

「……………俺だって、本当は継ぐ気なんて毛頭無かつたよ……………」

でも……………」

俺がボンゴレ？世を継ぐ理由を思いだそうとした、その時だった。

ボオウツー！

「「「！」」「」

俺は何もしていらないのに、首にかけたボンゴレリングにいきなり死ぬ氣の炎が灯つたのだ。

しかし、驚いた事はそれだけでは無い。

そのリングから生成された炎は、俺の大空の炎では無く、金色に煌めく全く見覚えの無い黄金色の炎だった！

「ガウツー！グゥルル！」

ナツツも炎の色が変だと気付いたらしく、俺の肩に飛び乗ると金色の炎を出してくるリングを警戒するように低く唸る。

「やべーぞ、これは。」

リボーンも危険だと判断したらしく、机の上から飛び退く。

シューイイーン！！

すると、その金色の炎は俺とナツツを包み込む程の結界を創りだし、俺とナツツを外の世界から完全に孤立させる。

「おい、ツナ。

よく聞け、この結界は……」

ブチッ！

頼みの綱だつたリボーンの助言も、あえなく最後まで続かなかつた。

ボンゴレリングと結界がこれ以上ないほど強く光り、もの凄い揺れが俺とナツツを襲つた。

「ううっ…………」

「ガウーッ」

俺もナツツも揺れに耐えられなくなり、結界の中にある、勉強机に必死にしがみつく。

…………俺、ここで何かわからないこの結界のせいで死んでしまつのかな？

…………そんなの嫌だ！！

そしたらもう、獄寺君に山本、ランボにイーピンにハルにふう太、母さんに父さん、それにもう一度と京子ちゃんに会えなくなっちゃうじやん！！

京子ちゃんに至つてはまだ告白もして無いのに……

俺はズボンのポケットに入っている、ウ”アリアーとの闘いの時に京子ちゃんからもらつた、必勝と書かれた、青いお守りを必死に握りしめる。

ギュウイーンーーー！

結界の揺れはさりに激しく、光はさりに強くなり…………

「うああああ～」

結界は、俺とナツを何処かに転送してしまった。

そして…………俺は今日、ナツと共に幻想郷といつ場所に、
幻想入りを果たしたのであった。

target rock (後書き)

さて、この物語の主役ヒロインは誰にしましょう。

今のところ一、三人いるのですが……

誰にしたら良いのでしょうか？

ちなみに、ハーレムについても検討？しています。

標的～ボンバーの夢　Sun solo pilot vocation (新)

今回もまえがき、みたいなものでかなり短めです。

……………これからは、もっと長くしないことなあ。

標的〇～ボンゴレの夢　Un sono del vongole～

「うつ…………此処は？」

俺は突然の息苦しさを覚え、闇へ落ちていた意識を取り戻す。どうやら俺は、何処か薄暗い所で仰向けに横たわっているらしい。

「…………」にしても、此処は何処なんだろう？「

俺は仰向けになっていた身体を起こし、朦朧とする意識の中で、今自分の居る自分のいる薄暗い場所位置を確認しそうとした。

俺の頭の記憶の限りこんな場所は知らない、なら一体ここは何処？

その時だった。

「久しぶりだな、？世。

マレの小僧の時に、リングの枷を外して以来だな。」

「！？」

俺は、背後から聞こえた声に朦朧とした意識^{ブリーム}が完全に覚醒した。この穏やかな喋り声は……ボンゴレ？世！？

俺はもじやと思い背後を振り向く。すると、そこには案の定、全身スーツで身を包み、手には？と書かれた死ぬ気の炎を纏つたグローブに、額から大空の死ぬ気の炎を噴出した俺と瓜一つの男……ボンゴレの創始者、ボンゴレ？世が立っていたのだ。

「なつ…………」

そして、そのまま俺は今、自分が置かれた状況を瞬時に思い出した。

…… そうだ、俺はリングから出た変な色の死ぬ氣の炎で何処かに飛ばされたんだ！！

…… なら、絶対この世にはしないはずの？世と俺は会っているという事は。

「俺は死んじやつたのか…………」

俺は、とてもない墜落感に襲われ、べたつと尻もちをつく。

…… 俺は死んじやつたのか、京子ちゃんに告白する事も結婚する事も出来ずに…………

「…………ふふっははは。」

しかし、そんな俺とは裏腹に？世は静かに笑う、その笑う姿にも何故か威厳がある。

「人が死んでいて落ち込んでいる時に、あなたはどうしてそんなに笑つていられるんですか？」

俺はそんな？世の態度に腹が立ち、睨みつけながら呟く。

なんなんだよ。人が死んで落ち込んでいるというのに…………

「ははっ、すまない。少し？世の対応が面白くてね。
実を言つと、君はまだ死んではいないんだよ。」

「なつー！？」

俺はまたもや、？世の言葉に驚かされる。

「これは、君のボンゴコレリングが見せる特殊な夢、…………正確に言うとボンゴコレの夢、*Un sonno del vostro sole*なんだ。

君も何回か経験している筈だ。」

俺は？世の言葉に一回もつとする。

良かった、俺まだ生きてる……

それに、このボンゴコレの夢についても何度か経験があるのも事実で、少なくとも俺は一回体験している

きっと、未来のボンゴコレ基地で十年後の雲雀さんのハリネズミに閉じ込められた時と白蘭の時にリングの枷を外してもらつた時だろう。

だけど……

「？世、あなたはびっくりそのボンゴコレの夢を俺に見せたんですか？

とつぐに未来での出来事は終わり、俺はむちやんと継承式を済まし、

？世の座を継いでいるのに……」

そう、何故今さら？世が出てるんだ、それが物凄く不思議だ。

俺は、ボンゴコレに関しては全て一段落つけたつもりだ。それなのに、？世が何故俺にこんな変な夢をみせるのか？

まさか……また何かに巻き込まれるんじゃ……

「？世、いや沢田綱吉。」

俺が？世がなぜ俺の夢に出てきたのかを模索していくと、？世はいきなり改まって俺の名前を呼ぶ。

てか、何処で俺の名前を？

「……………実は君に頼みたい事があるんだ。」

「そのために私は、わざわざ、こうしてだけ頃と会う時間を作つたんだ。」

「……………どうしてもやつてほしに事を頼み」とをして欲しい為に……………」

「……………？」
？世が氣を引き締めるにつられて、少しちも自然と緊張してくれる。
きっと、これが？世が持つ、独特な雰囲気なのだろう。

？世は一回、大きく瞬きをすると言葉を続ける。

「？世、私の頼みは……………」

しかし、？世の言葉は最後まで続かなかつた。

「……………？世？」

俺は黙り込んだ？世に話しかける。

「……………すまない。」

私とした事が、少々時間を使い過ぎたようだ。

？世、また改めてお前に会いに来る。」

「くつ？」

？世はこきなり饒舌になると、一方的に次々と喋り始める。

「とにかく、今の時点ではまだ何も説明する事が出来ないんだ。

わかつてくれ、？世。」

「……………」

んな事いわれても、俺は何の事やらさっぱりわからず啞然とする。
もつ止めてくれ。

「……………」

「じゃあな？世。

いや、沢田綱吉。次会つ時まで元氣でな。」

？世はそこまで言つと、スッと何処かへ消えてしまつ。

……………もう止めてくれ。

止めてくれ？世。

これ以上俺に変な事を持つこまないでくれ。

……………俺はやるべき事を全てやつたんだ。ちゃんと？世の
座を継承したんだ。

……………だから、もうこれ以上俺を変なことに巻き込まない
で！――！

俺は？世が居なくなつたことで、頭を抱えながら想つ。

お願いだ。もうこれ以上巻き込まないでくれ！――！

標的～ボンバーの夢　Sun solo deal vocation (後)

今回は

よくある夢の話みたいな感じで重要な所でいなくなる…。

みたいな物語です。

それと、この小説のメインヒロインを決定しました。
その人は〇〇〇〇〇〇（〇は全て漢字）さんです。

みなさんの「意見、ありがとうございましたー！」

標的1 ~ Un incontr o 東風谷早苗と沢田綱吉~（前書き）

よこーーー！

今日は一つの投稿ができたぜ。

いや～聞にあつて良かった、良かった。

今日は長めのつもりです。

ゆっくり、楽しんで読んでくださいな。

標的1 ~Un incontr~ 東風谷早苗と沢田綱吉~

「……………。」

今日は、突然の息苦しさではなく、突然の眩しさを覚え意識が覚醒する。

でも寝起きなので、まだまだぼんやりとしている。

俺は今、知らない家の知らない和室で知らない布団の中で横になつていてる。

俺は、ついやら俺は何処かの家の和室に敷いてある、布団の中で寝ていたらしい。

「……………！」「しても此処は何処だらう？？」

俺は寝ぼけている頭をフルに回転させ俺の置かれている状況を思い出す。

「……………！」「そうだ、思い出した！」

「……………！」「確かに、リングが突然発光して、ナツツと共に何処かに飛ばされて……………ボンコレの夢の中とかいう夢で、？世と会つてそのまま……………！？」

俺はそこまで考えると、とつたに布団の中から飛び起き、自分の持ち物を確認する。

ボンコレリング、京子ちゃんから貰つたお守り、？グローブ……………ナツツのリングもしくはナツツが居ない……

俺はそのまま大慌てで、ナツツを探しに行こうとするが……

「ふえつ、えつ、あつ！？」

バタン！！

俺は慌てすぎたせいで、足がもつれて……

「あつ、やつと田が覚めましたか、なかなか起きなくて心配……
……つつきやあ！－」

いきなり和室に入ってきた誰かを押し倒し、盛大に転んでしまったのだ。

「痛ててててて…………すいません。

大丈夫ですか…………」

俺は押し倒した相手を見て俺は絶句した。

俺が押し倒したそれはかなりの美少女であつたからだ。

華奢で整つた顔立ち、ロングヘアで枝毛一つ無い、綺麗な緑色の髪質に蛙と蛇の奇妙な髪飾りに、巫女装束によく似た青と白の袖の無い、肩と脇を露出した服を着た少女が余りにも可愛すぎてしまつた。

こんな、危険な状況下でさえも、つい見とれてしまうくらいだ。

「うう…………」

「えつ！？あつ！？」

すつ…………すこませんーー！」

俺は少女のかすかな声と共に我を取り戻し、少女からすくぐれ飛び退き、少女の手を掴み、起こすのを手伝ってあげる。

…………にしても危なかつた。

もし、この姿をリボーンに見られたらなんて言われる事やら、それにあいつ、京子ちゃんに告げ口するとも…………

俺はそこまで想つと和室と繋がる縁側を兼ねた廊下から、妙な視線を感じた。

「あっ、続けて、続けて。
私達の事は気にしないでほら続けて、続けて。」

すると、そこには麦藁帽子を被つた、小学生の様な小ささの紫色と白色の服を着た少女が暖かい視線で今のこの状況を覗き込んでいる。

また、その少女の肩の上に乗つてているナッシも俺に向かっていやらしなーという視線を送つている。

「へっ、あつ諏訪子様、これは何んでも無いんですよ、これはただ

「…………」

少女は顔を真つ赤にするとその諏訪何とか様に向かつて、反論する。

また恥ずかしすぎて、舌が上手く回らないらしい。

「いやーだつて、あんな状況見せられると誰でもそつ思つちやうじやん、それにもやるねー君。」

諏訪何とか様は次は俺に向かつて、変な事を言つてくれる。 にしても俺はなにがやるね、なんだろうか？

「とにかく、私とのライオンちゃんはあなた達のその関係を邪魔する気が無いから、そのまま続けちゃってOKだよ！」

諏訪何とか様とナツツは一人で見つめあつて頷くと、また俺と少女に向かって（生）暖かい視線を送つてくる。

「だから」

俺と少女はお互いに声がハモリ合いつて、お互いを指でさして

「私達はそんな関係じゃ無い！！」

一人して真っ赤な顔をし、諏訪何とか様とナツシの考えているやらしい疑惑を否定する。

..... これが、沢田綱吉と東風谷早苗のインパクト
が（かなり）強い最初の出会いであつた。

一時間後

俺と少女は諏訪何とか様とナッシングの誤解をゆっくり必死に解き、何とか事なきを得た。

あんまり、必死に誤解を解こうとしたそのせいで空はもう、うす暗くなり、俺と少女はヘトヘトで、縁側を兼ねた廊下に座り一人して涼んでいた。

「ふー、なんか疲れたー」

俺は縁側で座つたままゆっくりと背を伸ばし隣の少女に語りかける。

「いいえ、こちから先ほどはすいません。諏訪子様、少々悪戯が過ぎる事がありまして……」

そのまま、俺達に静寂が訪れる。

……………にしても、この空氣痛いなあ。

俺、こいつの微妙な空氣、駄目なんだよなあ

「……………そつ、それより君の名前なんていつの？」

この空氣に耐えられなくなつた俺は少し、話題を変えてみる事にする。

実際、知つてみたいと思つたから一石二鳥だ。

「へつ、あつ。

私の名前ですか、……………私は風祝の早苗、東風谷早苗と言います。

この幻想郷で信仰を集める為に、この間神社と湖だと引っ越し越してきました。

「…………俺は沢田綱吉っていうんだ。」

俺は東風谷に一応自己紹介しておく。

「…………それより今、東風谷なんて言った？
幻想郷、引っ越し？」

「…………あの東風谷さん、質問なんだけど、此処は何処？」
俺は最も簡単で、最も聞きたい質問をしてみる。

「…………此処、ですか？」

此処は諏訪子様と神奈子様を祀る守矢神社ですけど？」

「いっ、いやそういう意味じゃ無いんだ。

あの…………なんていうのかな…………さつき言つてた幻想何とかについて聞きたいんだけど…………」

俺は伝えようとすると事が思つ様に伝わらずあたふたする。

「…………ああ、そういう事ですか。
綱吉さんは外来人なのですね。」

東風谷は自分一人で何かに納得したのか、一人でフムフム頷づいている。

「一体何が解つたんだろう？」

「あの東風谷…………」

「あなたが聞きたいと思う事は大体理解できました。

今、この縁側で話す事も出来るのですが、少しこの話は長くなる

ので「」では無く夕飯を食べながら「」しましょ「うーー。
きっと綱吉さんもお腹が空いている事でしょう。」

東風谷はそう、キッパリと言ひ放つと座っている俺を立たせよう
とする。

「……………」

俺はいきなりテンションが上がった東風谷に畠然とし、俺は東風
谷にやれるがまま、縁側から立たされ夕飯に招待された。

…………「」、しても本当に「」は何処なのだろうか？

俺はさらなる不安を胸いっぱいに膨らませ、リビングへ向かうら
しい東風谷の後ろ姿について行くのであった

あ～あ、やつしかった

…………すいません、つい出来心で…………

さて、次は一回ツナから離れ、違うキャラクターを幻想入りさせてみたい
とおもいます、

誰をいれるかって？

今のところは浮雲を紅魔…………

危ない、もう少しでネタばれの所だった。
ではでは。

標的2 scene 夕食と黒い小さな乱入者（前書き）

ツナ「あれ？ 今日は雲雀さんの回じゃないの？」

早苗「確かに変ですね。」

coco「…………」「みんなさー、僕がミスりました、すいません。
ん。

不注意でつー。」

ツナ「えーーー！」

この話楽しみにしてた人になんて言えぱいいんだよ。」

早苗「せつですよ、『利用』返済は計画的にですよ。」

coco「………… それでは、本編スタート！…」

ツナ 早苗「あつ、こちら逃げるなーーー？」

標的2 scene 夕食と黒い小さな乱入者

守矢神社にて…………

俺は東風谷に夕飯に誘われ、一台の卓袱台が置いてあるリビングに招かれる。

目の前には肉じゃが等、本当に美味しいそうな料理がずらりと並んでいる。

「「「いただきます！…」」「ガウツ」

俺とナツツは東風谷がつくつた肉じゃがを口に頬張る。最近何も食べて無かつたせいか、箸が物凄く早く進む。

「沢田さん、もう少ししゃつくり食べてください。喉に詰まりますよ。」

東風谷はそんな事を呴くと俺の隣にある湯呑みにお茶を注いでくれる。

「に、しても良い食べっぷりだね~二人とも。昨日の夕方から、何も食べてないからかな~」

ちなみに、この人?ともリビングに入つた時、自己紹介を済ませている。

本名は洩矢 謙訪子で呼び方はなんでも良いと言われたが、早苗い習つて何故か解らないけど様をつける事にしている。

「昨日の夕方!~」

俺はこの獨特な麦わら帽子をかぶつた諏訪子様の一言にひつかかる。

昨日の夕方？ 何も食べて無い？

「んっ？ 早苗から聞かなかつた。君、この神社の敷地の中でぶつ倒れていたんだよ。

それを早苗が見つけて、あの部屋に運んだんだよ～」

「…………」

俺は、諏訪子様からことの真相を聞かせてもらい、再び驚く。それに加え、その東風谷を呼んだのはナツツだとも聞く。

それに対し、俺は…………

「ありがとう、東風谷さん。

もし君が俺を助けてくれなかつたら、今頃大変な事になつていたと思つんだ。

それに、ナツツも。

ナツツが東風谷さんを呼んでくれなかつたら絶対今の俺は無かつた。」

素直に心の底から感謝の気持ちをあらわしていた。

ここまで、心の底から本気で感謝したのは何年ぶりなのかな？

「いいえ、沢田さん。

私はそこまで感謝される事はしていません、私は人として、現人神として当たり前の事をしただけですよ。

ね、ライオンちゃん。」

「ガウッ！！」

東風谷は俺に微笑みかけ、ナツツを自分の膝の上にのせる。

ナツツも俺に感謝のと東風谷の膝の上が気持ちよかつたのか、普段みせない優しい声でうなる。

しかし、俺はまたしも東風谷の一言に疑問を持つ。

「…………東風谷、現人神って何なの？」

俺は現人神という言葉に過剰に反応してしまつ。

…………三年前、自分が神だと黙っていた悪魔を嫌でも思い出してしまうから。

「…………もうつ早苗。

縁側で一人つきりになつた時、一体何をしていたの。

私は沢田君に幻想郷について早苗達を一人きりにしたんだよ。」

諏訪子様は肉じゃがのジャガイモを箸で器用につかみながら答える。

「えつ…………そだつたんですか！？」

…………知らなかつたです。」

早苗は今の言葉に面を喰らつたらしく。

「あつ……解つた！！

そうか～、二人きりでなんか違う事してたから話せなかつたのか。
あ～、ごめんね。でも、早苗はこう見えて……」

「諏訪子様！！」

諏訪子様の話のを途中で遮る。
またまた顔が真つ赤だ。

「ちつ違います、諏訪子様。

私はただ……沢田さんを晩御飯に誘いながら、ここについてお話しようとしていたんです。

決して、沢田さんとそつ……そんな事はしていませんっ……」

東風谷は顔を真っ赤にしながら大声でしゃべる。膝に乗っていたナツツも驚いて逃げてしまった。

「んもー、少しからかっただけどよーもう、早苗つたらいつも真面目だから反応が面白くてつい…………」

どうやら、諏訪子様は東風谷の反応が面白くてつい、いじってしまっただけらしい。

……はあ、リボーンみたく人騒がせな人だ。

「誰が人騒がせだ、駄目ツナ！！」

「　　！？」

その時だった。

真黒なスーツに身を包んだ赤ん坊が俺の頬へととび蹴りを入れてきたのだ。

「…………リボーン！？
一体何すんだよ！？」

そう、その赤ん坊こそ俺の家庭教師、リボーンであつた。
かてきょ

「 「 ー？」

リボーンの突然の乱入に早苗と諏訪子様は驚いている。

「まあ、スーツ着た赤ん坊がいきなり目の前に現れて、日本語流暢にしゃべるんだからそりや当然だよな。

あれ？その前にリボーンはあの結界の外に居たはずだよな、一体どうやって此処に？

「……………沢田さん、この赤ん坊は？」

「あつ、こいつはリボーンって言って、俺もあんまり詳しくは知らないんだけど俺の家庭教師かていきじょなんだ。」

俺は頬をさすりながら、リボーンを指差して答える。

「こいつ、今まで何処に？」

「そうだ、俺の名前はリボーン。

ツナが言った通り、俺はこいつの家庭教師をしていく。よろしくな、東風谷早苗。」

リボーンは東風谷のそばまで行き、自己紹介をする。

「あれ、なんでこいつが東風谷の名前を？」

「……………えつ、あつ。」

はい、リボーンさんですか。…………に、しても私の名前を何処で？」

やはり、東風谷も俺と同じ事を疑問に思つたらしく。

そりや普通そうだよなあ、自分の名前を紹介した覚えが無いのに知つている奴つてストーカーくらいだし、気持ち悪いからなあ。

「ああ、俺は今までお前たちの会話、正確に言つとジナが東風谷を押し倒す場面から、晩飯の今まで、全部聞いていたからなんだぞ。じつ見えて、俺は変装が得意だからな。」

お前の場合は変装じや無くて、コスプレだろ。

俺は心の中で突っ込んでみる。

それにして、あの場面も見られているなんて…………りや、予想通り京子ちゃんに告げ口されるだ。

「おい、東風谷。

そんな事より一つ質問だ、一体此處、幻想郷つてどういつ場所なんだ。

そろそろ教えてくれねえか？」

そんな俺の考えを知らず、リボーンは独自の口癖で本題に切り込む。

…………じつやう、全部聞いていたといつのは満更嘘ではないらしい。

「…………そつ、そつですね、ではそろそろ本題に入りましょうか。」

東風谷はあの時の事を思い出したらしく、顔を真っ赤にしたまま話題を変える。

「じゃあ、私は先にお風呂入つてこくよ。もう沸いてると思ひ。」

諏訪子様はこの話はつまらないから、と諦めに残しリビングからふらりと消えてしまう。

「…………あいつ、おもしれえ奴だな。」

リボーンは諏訪子様の後ろ姿を見てポツリと呟く、ちなみにレオンはというとリボーンの黒い帽子にひつついてもはやアクセサリー見たいなものになつていて。

「…………に、しても何が面白いんだわ。俺は別に何も感じはしなかつたけど。

「じゃあ、最初の約束通り幻想郷についての説明を始めます。質問は最後にまとめて受けるのでとりあえず、最後まで聞いといつくださいね。」

東風谷は左手で髪を払い、説明を始めるのであった。

（三十分間後）

「…………以上で、此処についての説明は終わりです。
何か質問とか、ありますか？」

俺は（体内時計で）三十分間もの説明を聞き、ぐつたりとする。
…………俺は三年前、十年後の世界に行つたりと、非常の
事態には慣れていると、自負しているけど、まだまだ自分の未熟さ
を改めて知つてしまつた。

「に、してもすげーとこだな幻想郷は、忘れ去られたものが集い、
妖怪と人間が共存するだなんてな。

でも、何故そんなところに俺達は飛ばされたんだ。
東風谷の説明だと、俺達は忘れられたという事になるぞ。」

忘れられた…………つまり、リボーンは死んだと言いたいのだろう。

でも…………？世は、言つていた。

まだ俺は死んでいないと、…………ならどうして此処に？

「いいえ、多分あなたがたは、外の世界では忘れ去られて無いと思
いますよ。

…………その、時よりいるんですよ、何らかの偶然で幻想郷に迷
い込んでしまう人が。

きっと、沢田さんもリボーンさんもその偶然の被害に遭つてしま
つただけで、外の世界に戻れば…………」

「お～い早苗一、お風呂上りいたよー」

東風谷の説明は、お風呂上りの諏訪子様の乱入により遮断され

る。

「やうですか。

じゃあ、先に沢田さん達入ってきてください。
私はまだ、食器洗いが残つてるので。」

「やうだな。

じゃあ俺達で先に入つて来るか行くぞシナ。」

リボーンはやうとおぐれおコビングを出よつとかね。

「やうと待てリボーン！』

風呂に入るはいいけど、お前風呂の場所解るのか？』

「ああ。

『家の構造は、最初ここに来た時に調査済みだ。
まひやつわと行くぞシナ。』

そう言つ捨てると、リボーンはそのまま風呂場があるべき場所に
一直線に向かつていぐ。

「…………面白い方ですね。

リボーンわんつて。』

東風谷はリボーンの後ろ姿を見て微笑む。

「それは俺も同情するよ。

本当、何考えているか解らない奴だ。』

俺は東風谷を見て肩をすくめる。

なんか今回、巻き込まれた厄介事はいつもと違う気がする。
……
なんかが。

標的2 scene 夕食と黒い小さな乱入者（後書き）

ツナ 「あいつ、どこに逃げたんだろう」

早苗 「沢田さん大変です！！」

なんとの小説5000円突破だって！？」

ツナ 「ええええええええ！」？

早苗 「だから、あんな人探すんじゃなくて！？」

ツナ 「そうだね。 じゃあ、」

早苗 ツナ 「みなさんご視聴ありがとうございました！」
これからもよろしくお願いします。」

標的3 Salienteamento di somma 勘違いでの額合せ

早苗「このタイトルなんですか？」

勘違い？ 額合せ？」

ツナ「えつ……………これは……………あれだよ、きっと作者のじょも
ない趣味じゃないの？」

早苗「そうですか。なら今度少し痛い目二……………」

ツナ「うう……………それでは、始まりますーー！」

標的3 SAllineamento di somma 勘違にての額合わせ

その後、俺達は東風谷の山とおり風呂に入った、風呂は木でできた和風風呂で今日の疲れ（なんも体動かして無いけど）を癒す事が出来た。

それともう一つ、今日俺とリボーンが寝る所は、俺がさつきまで寝ていた場所を提供してくれ、俺が着ていた高校の制服も洗つてくれるらしく、その着替えに俺とリボーンに浴衣を用意してくれたのだ。

（元、しても何処でリボーンサイズの浴衣なんてそろえたんだろう？）
「こんな奴のサイズに合つ浴衣なんて何処に置いてあるんだ？」

「それにしても東風谷 早苗はいい奴だつたな。

この幻想郷でもいつに会えたのはかなり運が良かつた。」

俺の疑問とは別にリボーンは浴衣を着こなし、俺へと話かける。
多分こいつが幻想郷に居る分、俺は確実に退屈しないだろうな。
…………リボーンはそういう奴だから。

「確かに、俺もそう思つよ。」

俺も一応リボーンの訪ねに答えておく。

ほんとに此処にきて東風谷に会えたのは本当に運が良かつたと俺も思う。

「おいやナ。

お前、ナッシはどうした、まだリビングに居るのか?」

リボーンはまたもやリボーン用の大きさの布団を敷きながら訪ねてくる。

「いいや、ナッシならもうリングに戻したよ。
あいつ、昨日は頑張つてくれたからな。」

リボーンの問いに、俺は首にかけたナッシのアニマルリングを見る。

本当によくやつてくれたよこつけ。

「……………そうか。

「……………に、しても此処の家の奴らは不思議だ。」

「……………えつ、何言つてんのリボーン。

」」」の人たちはみんな普通の人間だよ。」

少なくとも、俺やリボーンよりは絶対普通の人間だ。

「……………未来の世界に行つた人間など、世界広しどこえど絶対俺たちだけだ。

「……………そうか?

「でも、なんか俺はしつくりこねえんだ。」

リボーンはレオンを寝る時に被る帽子に変身させて頭に乗せる、その帽子の形は諏訪子様のあれを意識したのか麦わら帽子であつだ。

「……………でもリボーンのしつくりこないといつのは一里ある。東風谷は何だかんだで自分の現人神の説明は一回も触れなかつた。

「…………でも、東風谷はきっと……」

「私がどうかしましたか？」

「うわーーー？」

東風谷がいきなり俺達の部屋の襖の扉を開き、中に入ってきた俺の言葉は最後まで続かなかった。

東風谷の服は巫女装束では無く、俺と同じ浴衣を着ていた。

「どうしたんですか沢田さん、そんなに驚いて、私の事で何かあつたんですか？」

「えっ、いやそれは……」

東風谷は首をきょとんと傾げながら訊ねられる。
東風谷のその動作は相変わらず…………可愛い。

って、何考えてんだ俺！？

「ねえ、沢田さん本当にどうしたんですか、…………・いきなり顔を真っ赤にして、具合でも悪いですか？」

「いやー、それはその…………」

やばい、東風谷は頬を赤く染めた俺を病人？だと勘違いしたのか
身をかがめ、その顔を息のかかるところまで近づけてくる。

リボーンー！ 助けて！？

……と思つたその矢先、俺の願いはリボーンの寝顔と
シユピードーという寝息によつて見事に打ち砕かれる。
ちょっと、教え子のピンチくらい助けるよ！

てか……今までリボーンに助けられた事あつたっけ？

……そんな事どうでもいい。

今の状況はやばい、本当にやばい。

『ブランドオブボンゴレボンゴレの血』の超直感を持つ俺が言うんだ。

絶対間違いない。

……下手したら白蘭との鬭い以上のやばさかもしれない。

つて、俺は誰に説明してんのー？

「そのまま、動かないでください。

今、体温を計りますから。」

「……？」

すると東風谷はそのまま、自分のおでこを俺のおでこに当てる。

……昔、俺が風邪をひいたかわからない時に母さんがよくや
つてくれた事だ。

でも、さすがに母さん以外の女人にやられるのは東風谷が初め
てだった。

東風谷の額は俺より冷んやりしていて……

「んー、どうやら、熱はないみたいですね、…………ってあれ、沢田さん！？沢田さん！？？」

東風谷が俺の名前を呼ぶと共に俺は恥ずかしさのあまり気絶している事が解る。<

…………あいつ、リボーンめわざと助けなかつたんだな。
あの薄情者……！

俺の心の愚痴は届かず、意識はそのまま、闇に落ちるのであった。

「次の日～

幻想郷の空に朝日が昇る。

「おい、ツナいつまで寝てんだ！！
さつあと起きろーー！」

「…………もう少し寝かせ…………うぐつー？」

俺のまだ寝たいという欲望は俺のみぞにはまる、リボーンのどび膝蹴りによつて儘く打ち消える。

「…………今日は学校ないだろ、田曜日…………」

俺はリボーンに蹴られたみぞをさすりながら身体を起こす。

…………あれ、俺は今幻想入りしているんだつけ、だから、学校

が（行きたくても）行けないんだっけ？

「何、寝ぼけているんだ。

さつさと起きろ。

もう東風谷は起きて朝飯を作つていんだぞ。」

俺はリボーンが指差す時計をぼんやりとした頭で見て驚く。
……まだ午前六時じゃないか、てか東風谷どんだけ早起きしている
んだよ。

俺は昨日の事をなるべく思い出しながらして東風谷を想ひ。
…………そりこえば、昨日（もじへは今日）は、世が出て
くる、ボンゴレの夢を見なかつたな。
また会おうとか言いながら。

「じゃあ、そろそろ朝飯を食つに行こう。」

浴衣からすでに着替えておつ、リボーンはわしづつと早速コベイ
ングへと向かつた。

相変わらず、せつかちな奴だ。

俺は心中で苦笑し、俺の枕元の傍で綺麗に畳んである高校の制
服に着替え、リビングへ向かつた。

「おはようございます。」

「…………ん、おはよ。」

俺が入るとすぐ、朝飯を、台所から持つてきた東風谷が挨拶をしてくれる。

俺も挨拶を返し、リボーンの隣に腰掛ける。

まだ、リビングに居るのは俺とリボーンと東風谷だけだ。

リボーンは普通だと少々すきで机に届かないので、レオンを椅子に変身させて使っている。

「沢田さん、リボーンさん昨日はよく寝れました?」

「ああつぐつすりだつたぞ。」

「ん…………まあ、結構ねれたよ。」

実は昨日の夜の事であまり寝れたのかは、覚えてないけど…………

「それにしても、沢田さん昨日いきなり氣絶してどうしたんですか? 本当に具合が悪かつたりするんですか?」

「えつ…………あつ、それは。」

俺はなるべく思い出すしない様にしていた事を聞かれ返答に詰まる。「ンナは昨日、風呂に長く浸かり過ぎてのぼせていただけだ、あん

ま心配しなくていいぞ、東風谷。」

「なんと、あのリボーンが、俺に助け舟を出してくれた！！

やった！　リボーンってやつぱ根は…………「でもあいつ。なんかもつと幻想郷の事を知りたいとか呟いていてな。……確かに、人里に行つてみたいとか言つていたんだ。」

「…？」

「なんという事を言つてんだあいつは！？」

「…………そうだつたんですか。

これで、昨日の事が納得がいきます。…………それより、沢田さん人里に行つてみたいんですか？」

「…………うつ、えつ…………まあ。」

端っから行く気が無かつた俺だが、あの無垢な笑顔を見ているとここで断るのもなんか罪な気がする。

ちなみに、人里とは（昨日、東風谷に教わつた事によると）幻想郷に少なからずいる人間が住む里らしい。また、東風谷はそこでよく、買い物に行くと言つていた。

「じゃあ、なら朝ごはんが済んだ後、三人で行きませんか？　ちょうど、私も買い出しに向かう事でしたし。」

「おっ、それは良いタイミングだな。
よし、ツナ、この幻想郷の人里を死ぬ氣で探検するぞ。」

.....何故人里を死ぬ氣で探検しなきいけないのか知らないが、兎に角俺は東風谷と共に探検する事となつた。

この探検で後に俺達はかなり厄介な事に巻き込まれるとは知らずに

標的3 SAllineamento di somma 勘違いでの額合わせ

リボーン「次回はついに人里へだな。」

coco a 「うん…………一応そのつもりだけど…………」

リボーン「今度こそ雪雲雀は出るんだよな?」

coco a 「ああ。絶対であるよ。」

リボーン「そうか。
なら…………」

リボーン&coco a 「次回もお楽しみに!ーー!」

標的4　↓Transistor or iet?

浮雲で染まる紅魔館の空へ（前編）

coco a 「よっしゃ～今回は雲雀の回投稿できたーーー！」

リボーン「良かったじゃねえか。」

coco a 「ではーーー、どうぞーーー。」

標的4 → Transistor Orient? 浮雲で染まる紅魔館の空

（数時間後）

守矢神社、玄関にて。

俺達（諏訪子様はめんどくさい）という理由でこなかつたが、（）は人里に向かう準備をしていた。

ちなみに、俺は靴を持っていなかつたけれど、昨日レオンに頼んで死ぬ気の炎を防ぐ、特殊な糸で出来た運動靴を生み出してもらつた。

「じゃあ、行きましょうか。

沢田さんリボーンさん。」

靴に履き替えたらしい早苗が、出発しようと催促する。

「ああ、そうだな。

……………でも、どうせひつて行くんだ、見たところ此処は山の上にある神社だ。

歩いて行くと、山を行つて帰るだけで、随分時間がかかりそうだぞ。」

「えつ！？

此処、山の上にあるの？」

俺はリボーンの言葉にまたまた驚く、山の上！？
どんなところ暮らしているの東風谷達！？

「あつ……………そうでした。

言いにくいのですが……………一つ言い忘れていたんですけど、実は幻想郷だと、日常的な移動手段は……………空を飛ぶなんです。」

「ひえっ！？」

俺は控えめに、恥ずかしそうに答えた東風谷に、今度こそ驚く。
……………東風谷、もしかしたら、こいつ少し抜けてるんじゃ
ないか？（俺も全然人の事言えないけど）

……………てか、これでどうやって人里に行けっていうんだよ！…！
空を……………飛べない訳ではないけど、こんな事で使う事じやないし……………どうすんだよ。

「ふんっ、なかなか面白そづじやねえか。」「

「「えつ…？」

「こんな状況でも、まだ余裕を持つリボーンに俺も東風谷もまたも
や驚く。

「おい、東風谷。

お前、一回ソナの腕を握りながらその、空を浮いてみてくれない
か。」

「……………いいですけど、何故そんな事をする必要が？」

確かに、何故東風谷は俺の腕を掴んで空へ浮かばければ行けない
のか疑問だ。

いらっしゃ、東風谷といえど俺を掴んだまま人里まで飛ぶという力は

なさそうだし.....

「まあ、兎に角浮いてみてくれ、理由は後ですぐ解るから。」

リボーンは、疑問を持つ俺達とは別に東風谷と話す。

「……………解りました。」

すると、東風谷は俺の腕を掴むと行きますよ、とだけ呟くとフワツと浮き上がる。

「おおっーーー！」

俺は全身に受けながら、空を飛んでいる事に感動する。

…………三分くらい浮いた後、俺と東風谷は地面に着地。

「どうだつたか？」

「空を飛ぶといつのは？」

地面に着地した後すべり、リボーンは感想を求めてくる。

「ああ。

「……………、してても空に浮かぶのは気持ち良かつたな。

もし、俺も飛ぶ事ができたらな……………」

俺は口を閉じ、やつて飛んだ時の感覚を思い出す。
すると東風谷に腕を掴まれてもいいのに……………やつて飛べ

浮遊感が俺に襲つ。

「……………うおーー?」

そ、俺は東風谷の助け無しで空に浮いていたのだ。

「…………す、」「こです。

沢田さんが、浮いてる。」「

東風谷はそんな俺を見て田をまるくする。

俺に空に浮く感覺を覚えさせてしまつ

………そ、うか、リボーンの奴。

俺の超直感を知つてわざわざあんな事を

「よし、東風谷。
これで、俺達も空が飛べるぞ、ならさつと行へば時間がもつた
い無いからな。」「

リボーンは俺の肩に乗り、ポカーンとしている東風谷に人里へ行
いつと催促する。

「……………全く、あなた達といふと退屈しませんね。」「

東風谷は、そう呟くと俺に対してもうして飛んだのか、これ以上
問い合わせる事も無くただ笑顔を見せてくれ、俺達は人里へ向かうの
であった。

ツナ達が人里に向かうのと同時刻。

守矢神社からかなり離れた真っ赤な、館を建てた奴の神経を疑うほど真っ赤なお屋敷……紅魔館

そこは、紅い霧の異変の張本人のレミリア・スカーレットとその従者が住むお屋敷。

館の主、レミリアは今日も優雅に咲夜といつ従者が注いだ紅茶を楽しんでいた。

「咲夜、最近なんか暇ね。

そうだ、日傘もつて何処かに出かけましょ。」

屋敷の外に創られた屋外のテーブルに、紅い瞳に青い髪、紅いドレスと赤いリボンをつけた帽子を被り背中から蝙蝠の羽が生えた吸血鬼…………この屋敷の主レミリアが、その傍ですぐ近くに控えている灰色に染まつた髪にカチュウシャをつけた、紅魔館のメイド長、十六夜 咲夜に声をかける。

「それはなりません、お嬢様。

今日はこの幻想郷で今年一番の暑さだと、天狗が書いた新聞に載つていました。

なので、外出は控えた方がよろしいかと。」

咲夜はそんなレミリアの問いに丁寧に答える。
その姿も何故か洒落ている。

「…………そう、なら外出は止めね。
に、しても最近かなり暑いわね。私は吸血鬼だから、暑いのが
駄目だというのに。」

レミリアは椅子から地面に『届かない足をぶらぶらさせながら愚痴
る。

「それに、しても最近暇ね
何か面白い事は起きないかなー」

「…………そうですね。確かに暇ですね。」

レミリアと咲夜は共に雲一つ無い快晴を見上げる。

その時だった。

ドオオーン！！

「「…?」」

いきなり、屋敷の中からとてつもない爆発音が響きわたる。

普通、自分の住む家から爆発音なんてのが聞こえると慌てふため
いてしまうものだが、二人の少女は笑っていた、まるでこの時を待
つていたかのように……

「噂をすればね…………

待つていて正解だつたわ。」

レミリアはテーブルから飛び降りると咲夜の方を一回振り向く。

「さあ、ひそしふりの異変。
みつちり遊んであげるわよ。」

レミリアはニタニタと笑いながら、爆発音のした紅魔館の中へと駆け付ける。

そして、この後紅魔館の空は孤高の浮雲で、染まりつつあった。

紅魔館 内部 爆発がした大部屋
二人は部屋の中に入り、状況を
部屋の壁、家具は壊れ瓦礫と化し、爆発がしたと思われる場所には大きな穴が空いている。

「咲夜、此処ね、爆発が起きた部屋といつのは、」

「…………はい、爆発の音からして此処の筈ですが。」

相変わらず、咲夜の態度はクールだ。

「…………そう、なら出てきなさい。侵入者。
私が遊んであげるから。」

レミリアは部屋に響く声の大きさで部屋に語りかける。

しかし、その答えの返事は聞こえない。

「……………此処は外れなのかしらね。」

仕方無い、お茶しに戻るわよ、咲夜。」

レミリアが諦め屋外のテーブルに戻ろうとしたその時だった。

「ミードリタナビクー ナミモリノ
ダーイナクシヨウナクーナー ミガイイー」

「「「？」」

「」の部屋の何処かから、音程が狂っている何処かの学校の校歌らしい歌が聞こえる。

「…………咲夜、どうやら此処で良かったみたいね。」

「はい、お嬢様。」

レミリア達は引き返そうとした足を再び部屋に戻す。

「あ。今度こそ出てきなさい侵入者！！」

「…………つねむかこよ、君たち。」

すると、今回の詰りかけでは返答が来る。

「…………どうやら、あなたが侵入者のような。」

レミリアは今、ゆっくりと立ちあがった少年に声をかける。

その少年は、黒髪で鋭い眼つき、黒い学生ズボンに胸元のボタンを外した白いYシャツ。

黒い学ランを肩に羽織り、その左腕には風紀と書かれた腕章をつけ、右手には雲属性のボンバーリングとロールのアーマルリングをはめている。

ちなみに、その校歌を歌つたのは少年の頭に乗つていた黄色い小さな鳥らしく、まだ音程が狂つた音痴な声で歌つている。

少年は、ビリヤリ昼夜の最中に起しだされたらしく、眠い眼差しをこちらに向け、元々眼つきが悪い田をさらに悪くさせる。その少年は…………とても機嫌が悪い事が覗える。

「…………それにしても、こいつは何処かな？」

僕は確かに、並中の屋上で昼夜していた筈なんだけど。」

少年は起き上ると頭の上に乗つている小さい鳥を何処かへ飛ばす。

「…………それと君達、並中ならこの服装は校則違反だ。」

少年はレミリアに向かい、指をせじて淡淡と告げる。

「…………校則？　ふふふつ笑わせるわね。
なら、君は不法侵入。あなたが言つ校則違反よ。」

レミリアは、そんな少年に向かつてあえて挑発口調で話す。

「…………ふう～ん。

「しても、君の隣のメイド僕にナイフなんて向けている
けど何なの？」

「強いの？」

少年は今度は咲夜の方を睨む、しかしその少年の顔は楽しげだ。

「…………ああ、これは私のメイドよ。

それ」「…………かなり強いわ。」

「…………」

咲夜はナイフを構えたままこちらも少年を睨む。

「…………そり、なら少しばらは楽しめそうだ。」

ショキーン

少年は身体に隠しておいたらしく、トンファーを咲夜に向けてこちらも構える。

…………そして此処に、誇り高き幼い吸血鬼、レミリア・スカーレットと何者にもどうわれぬ孤高の浮雲、ボンコレ雲の守護者、雲雀恭弥の闘いが始まるのであった。

標的4　～Transistor or iet?　浮雲で染まる紅魔館の空す（後書き）

ツナ「うわッ…………」れ、ただあらすじ書いただけじゃん！？
こんなで書いたつていいの！？

coco a 「…………」

早苗「あんまり責めたらいけないですよ、沢田さん。」

リボーン「そりだぞツナ、これでやっと雲雀の戦闘つてのが楽しめるじゃないか。
それにはあのメイドの強さも知りてえからな。」

早苗「では…………」

一同「これからも、よろしくお願ひします！――」

一万PV突破記念 隠し弾1 ~Una traccia di sogni~

今回は記念という事でバリバリ番外編です。
気楽に読んでもらえたらなあ～と思ついます。

それではどうぞ…！

一万PV突破記念 隠し弾1 ~Una traccia di soncino~

幻想郷に存在する、一つの大きな武家屋敷、通称マヨヒガ。

そこの一室で、身体の至る所に傷があり、白いシャツと黒い長ズボンをはいた少年が布団の上で寝かされていた。

その枕元には、一組の毛糸の手袋と水色の宝石がはめ込まれた、特殊な形状をしているリングが置いてある。

……多分、この少年の持ち物だろう。

「…………何処だ、此処は？」

…………少年は目を覚ますとすぐ、自分が居る場所に違和感を覚えたらしい。

モゾモゾと、布団の中から起き上がり、辺りを探索しようとしたが

「うへ、…………」

全身にある、打ち傷、切り傷が痛むらしく、思つた様に立ち上がる
ず、そのままその場所に膝をつく。

「まだ、動いちゃ駄目よ
全身の傷が癒えて無いのだから。」

…………すると、いきなり少年の前の空間に割れ目が入つた。
そして、その割れ目から上半身と顔だけを出した、紫色が基調の服
を見に纏つた、金髪でロングヘアの少女が、少年に話しかける。

「…………」

…………少年は今の状況に何も反応が出来ず、ただ呆然とする。

「ほら、判つたなら首を縦に振つてさつさと寝る、後で私の式神に
薬とか持つて来させるからそれまで寝ていなさい。」

少女は呆然としている彼を尻目に、饒舌に喋る。

何故かその目は楽しげだ。

「…………その前に一つ質問がある。
…………一体此処は何処？ それとあなたは…………」

「あ～、そつか君は外来人だもからね～何も知らないのは当然よね～

…………判つたわ、その事についてはちやんと説明するから、とにかく君は寝てなさい。

それと私の名前は八雲 紫。

八雲紫と書いて、やくも ゆかりと読ませるの。
で、君は？ 折角こっちが名乗ったんだからそっちも名乗りなさい。

「

紫は少年の言葉を途中で遮り、また饒舌に喋り始めた。

「…………僕の名はジョットだ。」

ジョットは、呟く様に名前を言つ。

「…………そつ。

ならジョット、あなたは身体の傷が癒えるまで寝ていなさい。
そして、その傷が一通り癒えたら、あなたの質問に答えてあげるか
ら。」

紫は最後に左田でウインクすると身体を割れ田に引っ込み消えてしまつ。

ジョットはただその光景を眺めるしかなかつた。

（数時間後）

「…………

ジョットは、再び田を覚ます。

「おはよつジョットへ、結構よく寝ていたじゃない。」

「.....」

やはり、最初に姿を現したのは紫であった。

しかし、今回は割れ田からではなく、ジョットの傍で座っている。

「どう、傷の具合は?」

紫は手に持った扇子で扇ぎながら答える。

「.....ああ、おかげさまですっかり。
.....それより此処は?」

「ん、此処?

此処はマヨヒガ私達の家よ

「マヨヒガ?」

ジョットは聞き慣れないらしき他の単語を聞き返す。

「そつ、マヨヒガ。

此処は私以外に後二人住んでいる人が居るの。
まあ、あなたを入れれば四人だけど.....」

紫は此処で顔が雲る。

「……………じゃあ何故、僕はマコヒガにいるんだ？」

確か僕は……」

「あ～そっか、ジョットは外来人だからね…………」

紫は再びジョットの言葉を遮り、そしてそのまま黙り込んでしまつ。

「…………ジョット、これから私が言つた事を何も言わずに聞いてくれる?」

紫は今の態度とは打って変わり、表情が硬くなる。

「…………ああ。」

それに釣られジョットも顔が引き締まる。

「…………そう、なら話すわ。

…………此処は幻想郷、忘れ去った物が集まり、それらが共存し合つ場所。」

「…………

「そして、この幻想郷は私が引いた現実と幻想の境界線であなたが住む外の世界と完全に孤立している。」

「…………じゃあ僕は何故、幻想郷に来たんだ?」

僕は忘れ去られたのか…………

ジョットはこんな非現実的な事を言われても、際どい事をただ淡々と告げる。

「いいえ、それは違うわ。」

紫はそのジョットの予測をキッパリと否定する。

「……、僕が此処に、引き付けられた？」
のよ。」

「…………僕が此処に、引き付けられた？」

言葉では、驚いてはいるが表情はまだ無表情だ。

「やア。

まあ、正確に言つとあなたの指輪の力が幻想郷に引き寄せられたの。

「

紫はそう言つと枕元の指輪をチラ見する。

「…………指輪の力？」

「そア、その指輪の力。

私も余り詳しく無いから上手く言えないだけれど。」

紫はここで扇子を一回閉じる。

「…………じゃあ、僕はこれからどうすればいい？」

相変わらずジョットは無表情。

「……………そうね、好きにすれば。

今から、元の世界に帰るのもよし、此処でしばらく暮らすのもよし。
…………全てあなた次第。」

紫は、また二二で扇子を開く。

「……………なら、八雲。

僕を二の幻想郷…………マヨヒガに置いてくれないか?

僕は此処でやりたい、いや…………やらなければいけない事があるんだ。」

この決意もまた無表情。

…………しかし、今回は瞳に映る決意の色が違った。

その瞳は大空の様に澄んでいた。

「……………それが、あなたの意志?」

紫はジョットの瞳を強く見据える、それはまるでジョットの意志の強さを見極める様に……

「……………ああ、これが僕の意志、…………いや僕の直感が出した
答えだ。」

「……………そう、なら決まりね。…………ジョット、これからはよろしく。

紫はまた扇子を開きジョットに話しかける。

「…………あ。

こちらいじめられしく。

ハ雲。

」

ジョットは初めて表情を崩して笑った。

これが、ボンゴレエ世とハ雲 紫の最初の出会いであった。

一万PV突破記念 隠し弾1 ~Una traccia di sogni~

番外編、いかがでしたか？

この？世編はボチボチ何回か投稿する予定です。

次回はついに雲雀戦。

これからも○○○○○の応援よろしくお願いします。

ではでは。

標的 5 ~Orion~ 潤なメイドと孤高の浮遊~(前書き)

今回は、雲雀V.S咲夜編です。

標的 5 ~Orange~ 潇洒なメイドと孤高の浮雲~

.....紅魔館のとある一室。

そこでは咲夜の無数のナイフ雲雀のトンファーの鈍い金属音が飛び交っていた。

「君のナイフ、中々当たら無いね。」

雲雀は飛んでくるナイフを何回か避けた後、咲夜に接近。

両手のトンファーで咲夜に向かつて連撃を加える。

「.....そちうじや。」

あなたのトンファー、中々掠りませんわね。」

咲夜も手に持つナイフを駆使し雲雀の連撃を避ける。

ガヤキキーン!

そして、お互ひの武器が激しくぶつかり、一進一退の攻防を繰り広げる。

.....その光景をリリアは部屋の入口近くでただ、笑みを浮かべながら眺めていた、まるでこの闘いを楽しむかの様に

ガーキーン！

「…？」

すると雲雀は両手のトンファーで咲夜のナイフを全て受け止め、空いている右足で咲夜を部屋の壁際まで蹴り飛ばす。

「君の強さはこれだけかい？」

もし、そつだつたら拍子抜けだ。」

雲雀は壁際から起き上がる咲夜に再びトンファーを構える。

「……………そうですね。

……確かに、私は少々あなたを下に見ていました。
ですが、これからはそつは行きません。…………私も本気で行きます。」

ジャツ！

咲夜はそう立ち上がりながら呟くと、瞳が赤く染まる。

「ワオ。

……君、目が赤くなつたけど、一体どんな手品が使えるの？」

雲雀は咲夜の目が赤く染まる事に驚く。

しかし、まだ顔には余裕があり、闘いを楽しんでいるかの様だ。

「……………余裕ですね、風紀の少年。

しかし、この状況を見てもまだ笑つていられますか？

「……ん？」

すると、雲雀の周りが、ほんの一瞬の内に大量のナイフで囲まれる。

そして、咲夜は左手で、一枚のお札を振りかざし、一いつ宣誓する。

「では、風紀の少年、行きますよ…………

メイド秘技 操りドール！」

そして、咲夜の合図で、雲雀の周りに浮いているナイフが一斉に雲雀に襲い掛かる。

「どうです、いくらあなたが、運動神経が良くて、この大量のナイフは…………」

「がっかりだよ。

なかなか楽しめると思つたけど、君が弱い草食動物で、本当にがっかりだ。」

雲雀は咲夜の話を途中で遮る。

顔にはさつきの様な余裕は無く、草食動物を狩る肉食動物の様な鋭い顔をしている。

すると……

ガヤイーン！

両手のトンファーから、二つの玉鎖を出現させ、それをトンファーごと回転させ……

ガン！カカカカ……

「…………なつ！？」

四方八方が次々と襲い掛かるナイフを両手でかなりの速さで回転させた玉鎖で、全て弾き返し始めたのだ。

…………さすがに、これは咲夜も考えていいなかつたのか、顔に焦りが見える。

…………そして、雲雀はそのまま三分間程、玉鎖を回転させ、全てのナイフを弾き返した。

「生憎、ナイフ使いの天才とはもう戦闘済みでね。手品の種は全て知っているんだ。

君はもっと違う手品を用意していたと期待したけど、どうやら期待外れらしい。

…………だから、僕は、君を噛み殺す！

雲雀は、咲夜に向かつて喋り終わると、玉鎖が回転したままの状態で、咲夜に向かつて突撃する。

「ちつ……

咲夜は部が悪いと見たか、ナイフを使わず、ただトンファーを避け続ける。

しかし、それでも全ては避け切れず、何回か、玉鎖に服や髪等が掠りとられていいく……

「…………いつまで、逃げるつもり?」

雲雀は避け回る咲夜に苛立ちを見せ、その鋭い眼で睨みつける。

「くつ…………」

咲夜は、その瞬間、ほんの一時の隙を突き、玉鎖の攻撃範囲から逃れ、体勢を立て直そうとする。

「君がどんな攻撃をしようと無駄だよ。
君の攻撃は全て見切ったからね。」

相変わらず雲雀は、鋭い眼光を崩さない。

「…………そうですね。」

確かに、私の技は全て見切られ、私の勝率は低いでしょう。
しかし、それでも私はあなたと闘うのです。
それが…………私がお嬢様に対する忠誠の証ですから。」

咲夜は傷だらけの身体で再び、ナイフを雲雀に向けて構える。

「…………そう。

僕には、弱い生き物が強い生物に寄生している様にしか見えないけど。…………まあいいや、次は君を噛み殺す！」

咲夜は再び咲夜を睨みつける。

「…………では、行き…………」

「ちょっと待って咲夜。」

「「「…?」」

咲夜が雲雀に向かって突撃しようとしたその刹那。

…………今までの闘いを傍観していたレミリアが、咲夜の言葉を遮ったのだ。

「…………やつと、登場かい。君のメイド、どんな手品を見せてくれるのか期待したけど、何も見せてくれなくて、がっかりなんだけど。」

雲雀は喋る方向をレミリアに変える。

「…………いじえ、咲夜はちゃんと手品を見せてくれたわ。時間止めるといつも呪文を。」

「…………時間を止める?..」

「そりゃ。

咲夜が使う能力…………あなたでいつ手品は時間を操る手品なの。まあ、あなたには効果は無かったみたいだけど…………雲雀 恭弥。

「

レミリアは、相変わらずニヤニヤとしている。

「…………ワオ。

どうして君が僕の名前を、僕はまだ名前を言つた覚えは無いけど？」

「これが、私が使う手品…………運命操る能力だからよ。…………でも、私があなたから知れるのは名前だけ、後は私の能力があなたに通用しないのよ。まるで、何か堅い壁に遮られる様に…………」

レミリアは「」で笑いを止める。

「…………そう。

でも、僕はそんな事に興味は無いな。種を知った後に見る手品程、つまらない物は無いからね。」

雲雀はレミリアに興味が失せたのか、再び咲夜の方を見る。

「もう、そんなに慌てないで、雲雀恭弥。私だけ、ただ種明かしをしにきた訳じゃないのよ。私は、あなたと勝負しに来たのよ。紅魔館のプライドを賭けてね。」

レミリアは、雲雀を指で指す。

「雲雀恭弥。あなたは、私の田の前で、私の従者を手に掛け様とした。

……私は主として、従者を手に掛けようとした奴を野放しにする訳にはいかないのよ。

まあ、半分は暇潰しつていう意味もあるけど……」

「…………で、つまり君は何が言いたいんだい？」

雲雀はまたレミコアの方を向く。

「私があなたと闘つてあげるという事よ。

…………安心して、私は咲夜より強いから。」

ボオツ……

すると、レミリアの左手から身長に似合わぬ、紅い炎の槍
……グングニルが練成される。

「…………確かに、君ならあのメイドとは違い、楽しませ
てくれそうだ。」

バキンッ！

雲雀は弦くとトンファーから出ていた玉鎧をしまつ。

ボウオツ！

両手のトンファーに雲属性の紫の炎を纏わせる。

「ああ。

舞台は整つたさつと始めようか。でも、僕は相手が子供だと
しても容赦はしないよ。」

雲雀は、レミコアにトンファーを構える。

「解つていろわよ。

……咲夜、少し離れなさい、此処はもうじき戦場になるわ。
かなり危険な。」

レミリアは咲夜に避難を指示する。…………しかし、顔はさつ
きの笑いを取り戻している。

「…………じゃあ、始めましょう、雲雀 恭弥。
ちなみこ、私の名前はレミリア・スカーレットよ。」

レミリアの顔には、やはり笑いがある。

「…………興味無いね、そんなの。」

雲雀はそんな事はどうでもいいっていへ、今にも襲い掛かろうとしている。

「…………では、やつましょ。」

雲雀恭弥、子供にやられたからって、気を落とさなきよつとねー。

ギャキキーンー！

…………そして、レミリアの言葉を皮切りに、トンファー
と槍がぶつかりあつのであつた。

標的 5 ~Oratio~ 潇洒なメイドと孤高の浮雲~（後書き）

此処でみなさん質問です。

僕は一話平均2500文字なのですが、みなさんはどう感じますか？

一言あれば何かお願いします。

標的 6 → Un incidente 人里でのアクシシント→

(前書き)

遂に人里の異変編。

最初はしない予定でしたが、進路変更という事で.....

に、しても最近東風谷より慧音の方がいいんじゃねと思つ毎日.....

ああ、どうしようへ.....

つて、事でどうやー！

標的 6 ↗ Un incidente 人里でのアクシデント

雲雀がレミリアと闘っていたその頃……

空を飛び始めて30分程。

……俺達は無事、人里に到着。

地面に着地し、人里を今度は歩き始める。

幻想郷の人里は歴史の教科書に出てきた様な、江戸時代の街の様な古臭い雰囲気がする。

「…………何か風情ある所だな。」

……俺の肩に乗つたりボーンが人里を眺め回しながら呟く。

「どうですか、幻想郷の人里は。
日本の都会とは違い、風情が溢れる。
何処か田舎の様な懐かしい里。
……それに目を付けるなんて、リボーンさん中々セансありますね。」

東風谷もリボーンの弦くが聞こえたらしく、丁寧に答えてくれる。

風情？

そんなこの人里の何処で感じられるの？
俺にはまだ古臭い里にしか見えないけど……

「…………ふふつ。

沢田さんには、風情なんてまだ早かつたですね、時期に判る様になりますよ。」

「えつ！？」

あれ？

なんでバレたの、俺は何も喋ってないのに……

「お前の顔に現れてんだよ。
この里は古臭いってな。」

「いつ！？」

えつ、そうだったの？

俺は念のため東風谷方をちら見する。

案の錠、東風谷は俺を見て慎ましく笑っている。

あ”～やつちやつた、てか恥ずかしい～！

「…………おい、そんな事より、わざと人里で用を済ますぞ。

東風谷も買い物があるんだろ?」「

「えつー?あつ、はいそうでした……
では、一人ともこれから私から離れて迷子にならないでください
ね。」

東風谷はまた微笑んで歩きだす。

……てか、俺どんだけ子供扱いされてんの!?

ふあ。

俺は一つ溜息をつき、そのまま東風谷の隣で歩き続けるのであつた。

そのまま、人里を歩き続ける事三十分後、俺達は何事も無く買い物が終了した。

「二人とも、此処はどうですか?」

東風谷は手に手下げ袋を抱えながら訊ねてくる。

「…………うっへん、まあ、落ち着きがあつて良い場所だった
よ。」

俺は東風谷が買った買い物袋を持つのを手伝いながら、問い合わせる

える。

「まあ、その前にツナは風情が理解できるよ！」しねえとな。

「うう……」

相変わらず、こいつは痛い所を突いてきやがる。

「…………それより、二人とも、お腹空きません？
もし、良かつたらそこにある団子屋で一回休憩しましょ。」

東風谷は買い物袋を持っていない手で団子屋を指す。

「おっ、そりゃいいな。

折角だから御馳走してもらひつい。

「おー、そこは断われよー！」

俺は肩に届るリボーンに心中で突っ込みを入れる。

全く、図々しい奴なんだからこいつは。

それより、今回は面倒な事起きなくてよかったです！

これで、今回の人里探検は安泰だー！

「で、沢田さんはどうするんですか？
食べますか食べませんか？」

「えつ…………じゃあ、お願ひしようかな。」

俺はまたもや東風谷の屈託の無い笑顔に負けてしまつ。
まつ、いいかな、俺もちよつと腹減っていたし。

「じゃあ、そろそろ行こうぜ。」

俺は、腹が減つてしまつがないんだ。

リボーンは、俺の肩から東風谷の肩に乗り換え団子屋へ急かす。
……つたぐ、リボーンは何処の世界でもやつていける
気がするよ。

東風谷の後にについて行き、団子屋へ入ろうとした、その時だつた。
俺の考えの浅暮さを充分に思い知らされる出来事が起つた。

「おい、みんな

大変だ！里の広場に妖怪が出たぞ！――」

「――！」

一人の村人の言葉によつて俺達の足は止まる。

……妖怪、だつて？

「…………おい、東風谷。

これはどういう事だ？」

東風谷の肩に乗つてゐるリボーンは、帽子で顔を隠す。

「…………あの人の言つてゐる通りの意味ですよ。

この幻想郷は、あらゆる生物が共存する場所。

それは、時に残酷な時があるんです。

今回の様に、妖怪が人里で暴れたり…………ですが、最近はこの里を守つてくれる人が居る筈なのですが…………

東風谷は視線を地面上に落とす。

「……………そんな事より、俺達も現場へ向かうぞ。
まだ逃げてない奴を避難させなきゃいけねえーしな。」

「……………そっ、そうですね。」

では速く、里の中心部にある広場に向かいましょう。」

東風谷はそつと、広場まで一目散走り始める。

……………「りや、厄介な事に巻き込まれそうだぞ。」

……………走り続けて三分位だろうか、俺達は問題の、広場付近に到着。

もう、ほとんどの人が逃げたらしく、広場の周りにはあまり人影が無い。

「……………どうやら、殆どの人は避難した、見たいですね。」

東風谷は、全力疾走したのか、生きを切らしている。

すると、リボーンは東風谷の肩から飛び降り広場の中心部辺りで暴れている妖怪を見る。

その妖怪は、体長一メートル位で形はミルフィオーレ日本基地で闘つた、死刑隊の様な体型でずつしりとしていて、死刑隊と違う部分は両手に鋭く尖った六本の鉤爪がある所だろうか。

「お前達、早く逃げ……て、東風谷じゃないか」

…………すると、背後から女人の人に声をかけられる。

「…………つて、あなたは慧音さん、じゃないですか！」

東風谷は、後ろにいる少女に驚く。

慧音と呼ばれた少女は、全体的に紺色の和風ドレスっぽい服に胸元に赤いリボン、頭には独特な形をした、青に赤い羽が生えた帽子を被り、灰色がかかったロングストレートと、またまた独特な少女が登場する。

「…………あの、東風谷さん、この方は…………？」

俺は東風谷の耳元で尋ねる。

「あっ、こJの人は上白沢 慧音さんです。

さっき聞いた、この里を守っている人の一人なんですよ。」

「はじめまして、私が上白沢 慧音だ。

…………本当に済まない、私が牛柄の子供の面倒に気をとられたせいで、こんな事態に巻き込んでしまって…………」

上白沢さんは、東風谷の紹介が終わると、軽く会釈してくれる。

「グゥオオオー！」

「 「 「 「 !? 」 」 」

すると妖怪が、突然咆哮を上げ、俺達が今、やらなければいけない事を提示させられる。

「に、しても早く、あの妖怪を退治しねえとな。この里にどんな被害が出るか判んねえぞ。」

リボーンは、再び東風谷の肩に乗り、妖怪の方をチラ見見する。

「なつ……赤ん坊が喋った……」

どうやら、上白沢はリボーンが喋る事について驚く。
絶対驚く方向が違うのに……

「んな事、どうでもいいだろ上白沢。
兎に角あの妖怪を退治するのが先決だ、それと東風谷あの妖怪には『弾幕ごっこ』が通用するのか?」

「弾幕ごっこ」……………幻想郷に来た時、東風谷から説明された幻想郷での決闘方法の一種だ。

今は、説明する時間が無いから省くけど……

「……………いえ、多分それは無いと思います。

基本的に弾幕ごっこをする時は相手から言つてきますから……」

「……………そつか。」

リボーンは東風谷の答えを聞くと、いつも通りニシ、つと笑う。

やばい、こいつがこんな笑いをする時は.....

「おい、ツナ。

お前がアレを倒して来い！！」

.....という感じ、大抵は、面倒な事を押し付ける時なのだ
から。

標的 6 ↪ Un incidente 人里でのアクシデント (後書き)

どうでしょうか、前半は人里。
後半は異変という感じです。

次回も多分、人里編で恐らくツナの幻想郷での初ハイパー化させる
予定です。

ではでは

束の間の休息 ～物語のキャラCIVV～（前書き）

どーも、かなりの暇人cocoです。

今回は貯めていた原稿を出しつくして、完全燃焼したので一息！
てな訳で、アイスココアを飲みながらまつたりと覗いてやってくれたらなあ～と思います。

束の間の休息 ～物語のキャラCV～

沢田 綱吉 CV：國分 優香里

主な出演作品

蟲師（ビキ）

妖怪人間ベム（マサル）

等

リボーン CV：一団

主な出演作品

不明（すいません みつかりませんでした。）

雲雀 恭弥 CV：近藤 隆

主な出演作品

一番後ろの大魔王（紗伊阿九斗）

BLACK CAT（トレイン＝ハートネット）

生徒会の一存（杉崎鍵）

ボンゴレ？世（ジョット） CV：浪川大輔

主な出演作品

B L E A C H (ウルキオラ・シフラー)
閃光のナイトレイド (伊波葛)

デュラリヤー! (園原杏里)

八雲 紫 CV:井上奈々子

主な出演作品

ゼロの使い魔 (キュルケ・アウグスター)

洩矢 謙訪子 CV:豊口めぐみ

主な出演作品

聖剣の刀鍛冶 (アリア)

マクロスF (クラン・クラン)

東風谷早苗 CV:花澤香菜

主な出演作品

化物語 (千石撫子)

angel beats! (立華奏)
デュラリヤー! (園原杏里)

十六夜 咲夜 C V 田中理恵

主な出演作品

ハヤテの「」とくー！（マリア）

家庭教師ヒットマンREBORN！（ビアンキ）

ローゼンメイデン（水銀燈）

レミリア・スカーレット C V 櫻井浩美

主な出演作品

angel beats!（仲村 ゆり）

真・恋姫†無双 ～乙女大乱～（孫権）

上白沢 慧音 C V 桑島法子

主な出演作品

CLANNAD（坂上智代）

戦場のヴァルキュリア（イサラ・ギュンター）

以上。

束の間の休息 ～物語のキャラCVC～（後書き） (著者)

どうでしたか、キャラクターCVC編
単なる暇つぶしで突っ走った作品です。
色々あると思いますが、そちらへんは「報告」を。
ではでは。

標的7 → Arancia 心穏やかな、橙の炎へ（前書き）

すいません、最近忙し過ぎて、投稿できませんでした。

今回はツナの初のハイパー化、楽しん見ていただけたら幸いです。

それでは！！

標的7 → Arancia 心穏やかな、橙の炎へ

「ちょっと、まつてくださいーーー！」

リボーンさん。

外来人で、何の力を持たない沢田さん[.]・・・・・この幻想郷で、あの妖怪を倒せるなど不可能ですーーー！」

意外な事に、リボーンの言葉にすぐ食らいついたのが、俺では無く東風谷であった。

てか、何の力も持たないって・・・・・

「・・・・・そうか？

俺が思うには、ツナはそこそこ強いからな何とかなるんじゃねえのか？」

リボーンは言い終えると再び東風谷の肩から飛び降りる。

「何とかなる訳ありませんーーー！」

良いですか、幻想郷は外の平和な日本の世界とは違つんです、もつと日本より恐ろしい場所なんです！

・・・・・いくら、沢田さんが喧嘩が強くても、此処ではその強さだと、絶対太刀打ちできません！

東風谷はさつきのリボーンの言葉を挑発と感じたらしく、地面に降りたリボーンに向かつて必死に熱弁を振るつ。

・・・・・に、してもこんな言い争いしていく良いのかな？
あそこでは、妖怪が我が物ばかりに暴れているのに・・・・・

俺は制服のズボンの尻ポケットから、手の甲辺りにラフとあるミーンの手袋を念のため両手にはめて置く。

「沢田さん！！」

「はいっ！」

俺はいきなり、東風谷に怒鳴られ、反射的に返事をしてしまう。

「沢田さん、あなたも少しは反論してください！」

東風谷は話の途中で舌を齒にだらしつゝ、その場でピアノピアノ

あゝ相当痛そう・・・・・

「ああ、痛かつた。

「わからぬをいたしかばなくて、沢田さん!」

一、一分その場で飛び跳ねた東風谷は再び、俺の方へ向き俺へ怒鳴る。

「…・・・・・はい?」

「はいじゃありません、沢田さん……」良じですね・・・「おと
り込み中申し訳ないんだが、せつせつおもいで暴れている妖怪を何

とかしてくれないかな。」・・・

慧音さんは言い争っている俺達に痺れを切らしたのか、穏やかにがらも殺氣が籠つた声で俺と東風谷を制止する。

「全く、慧音の言うとおりだ。

「のまま」こんなくだらない事で時間を潰して、あれを放つておいたら、どんな被害が出るか解らねえぞ。」

「誰のせいでこんな事してると思つていいんだーー！」

俺はリボーンにすかさず突っ込みをいれる。

がしかし、リボーンは俺の突っ込みを無視して、レオンを右手の上に乗せる。

・・・・・やばい。

「つて、事で此処はお前が行け、ツナー！
死ぬ気でアレを倒して来い！」

俺の悪い予感は的中し、レオンを拳銃に変身させたリボーンは、そのまま俺の脳天に拳銃を向け小言弾を発砲。

ズキューーンーー！

「「ーー」」

乾いた銃声と共に俺の両手と脳天がゅうゅうと熱く、燃えているのが感じられる。

「の感覚が正しければ、きっと瞳の色も橙色に変化している筈だ。

・・・・・・・ それにしても久しぶりだなこの感覚、俺の記憶がたたなければ、超死ぬ気モードになつたのは高校入学のボンゴレ式入学式典いらいか？

「・・・・・ あの、沢田さん？」

「いきなり、どうしたんですか？ その・・・・・」

東風谷はいきなり風貌が変化した俺が信じられないのか目を大きく見開いて俺を見る。

それは、当然だろう。

脳天拳銃で撃たれて、血を流さず炎を流す奴なんてそういう居るものではないだろうし。

「・・・・・ なあ、東風谷。」

俺は、視線を東風谷から妖怪に移し、背中越しで東風谷に呴く。しかし東風谷はまだ驚いたまま、それに、慧音に至つてはそれほどびっくりしたのか、開いた口が塞がらないでいる。

「お前は俺を持たない外来人と言つたな。

・・・・・ なら、今から見せてやる。大切な人を守る、俺の覚悟の炎を！」

「ボオウッ！」

俺はそこまで呴くと、両手から噴出される炎の推進力を利用し、暴れている妖怪に向かつて飛翔。

「はあっ！－！」

そのまま俺は、その推進力を利用し、妖怪の右頬に強烈なる一撃。

「ウグウ－！」

妖怪は、その一撃の威力に耐えられず、何メートルか吹き飛ぶ。

「グゥオオオ・・・」

しかし妖怪は今、殴られた頬を摩りながら、ゆっくりと立ち上がる。

・・・さすが。

今のを受けて、すぐ立ち上るとは、－いつ、妖怪だけあつてタフだな。

しかし、

「これならどうだ？」

「－？」

俺はまたもや推進力を利用し、妖怪の背後へ、瞬間的に回る。
そして・・・・・・

「はつ！」

妖怪の首の付根の辺りに、今度は、右足での強烈な蹴りを入れる

が・・・・・

バシツ！

「ウ・・・グウオオオ！！」

しかし、今回はさつきとは違ひ蹴りを入れても倒ず、妖怪は俺の蹴りを受けても何事も無いかの様に、やり過ごし、すぐ背後へ向くと両手の鋭利な鉤爪を使い、俺を引っかこうと振り回してくれる。

だが、その攻撃は俺に当たらず、ただ虚空を斬るだけである。

・・・・・なんせ、俺には超直感じれのおかげで、お前の筋肉の微妙な動きで次に鉤爪が振り下ろされる場所が解るからな。

「ウグウウウ・・・・・・」

妖怪は俺に攻撃が当たらないのがイライラするらしく、鉤爪を振る腕の動きがどんどん乱雑になつてくる。

俺は相手の動作が乱雑になつてゐる間で隙を見つけ、こいつの懷に割りに入る。

「これで終わりだ。」

ガシツ！！

そして俺は両手で妖怪の両腕の胴体の付け根を掴み、

「はあつ！！」

妖怪の腹に俺の右足を喰いこませ、そのまま妖怪を空中で半回転させ、妖怪を背中から地面に叩きつける。もじ、この技に名前を付けるなら、妖怪を時計の長針に見立てた、時計落とし（コノルオロジオ・ル・ウルティモ・スケルゾ）といふといふか？

「ウゥウウ・・・・

妖怪は、今の一撃でのびたのか、仰向けにしてのびている。

「勝負はついた。もう暴れるのをやめたひどいだ？
・・・・・でないと、俺は本当にお前を殺さなくてはならなくなる。」

俺は妖怪にそつと降伏する様に促す。・・・・・お願いだから、降伏して欲しい。でないと俺は本当に俺はお前を殺さなくてはならなくなる。

「グゥウウ・・・・・

すると、妖怪は意外な事に何の抵抗も見せずにただ、人里の出口へドスドスと立ち去っていく。

しかし、その目は俺の事を強く見据えている。まるで、俺に負けたのがかなり悔しかったかの様に・・・・・

・・・・・そう、ならいくらでも俺にかかるつて來い。

この人里に被害が出ない程度なら、いつでも相手になつてやる。

俺は、その妖怪の後ろ姿へ、心の中でこう呟く。

「なつ、言つただろ。だから、心配する必要はねえつて。」

リボーンは、妖怪をあつさりと撃退したツナを見て睡然とする東風谷の肩に再び飛び乗る。

「…………私がまだ幼い頃に、聞いた事がある。

…………数百年ものその昔、今回の様に人里に妖怪が現れ危機が迫つた時、額と両手に橙色の炎を灯した少年が必ず現れ、その妖怪を幾多と退治したといつ。

しかも、その妖怪達は全て殺さず自分の住み家に帰らせ、その妖怪達からも慕われたといつ。」「

「…………」「

その言葉を聞き、東風谷とリボーンは黙り込む。

「そして、少年はその当時の里の人たちに敬意を込められ、こう呼ばれたそうだ。

全てを飲み込み全てを包容する心穏やかな、大空と…………

「…………」「

リボーンと東風谷はまた、黙りこむ。

しかし、リボーンはこの言葉の意味を理解できたと言つのは、言うまでもないだろう…………。

標的7 → Arancia 心穂やかな、橙の炎へ（後書き）

どうでしたか、少し頑張つてみました。

ん、最後の方で、慧音の言つていたそれ、みなさんは解りましたか？

次は一週間以内に会えたら嬉しいです。

ではでは

すいません、一週間以内にとか言いながら投稿が、（一週間）ギリギリになってしまいました。

それに、最近投稿速度が一週間に一度・・・・・何処の週刊少年ジャンプだ？

それでは、ハ話をどうぞー！

「……………」

先程まで、妖怪が暴れていた、人里の中央にある広場。

しかし、今は暴れていた妖怪の姿は見えず、広場には両手のグローブから噴出した炎の勢いで宙に浮き、そのグローブを駆使した優れた運動神経で、あの妖怪を撃退した一人の少年、沢田綱吉の姿しかなかった。

……沢田綱吉、一昨日神社の境内でオレンジ色の鬚を生やした小さなライオン、ナツツと共に倒れていた、少し不思議な外来人。何が不思議かと言うと、まず、いきなり、何の前触れもなく、私の腕を掴んで私が一回宙に浮いただけで、宙に浮くコツを掴んだ事。

そして、沢田さんが、今回あの妖怪を撃退する直前、沢田さんと同じく、外の世界からやって来た、黒いスースーに身を包んだ赤ん坊、リボーンさんに、拳銃で、脳天を撃たれた時に、沢田さん自身が変化した事。

外の世界より、ずっと過酷で危険な、この幻想郷。しかし、この幻想郷で何の不自由無く、此処の生活に慣れ始まっている、この二人。

「ま、ツナの奴も、久しぶりのハイパー化での戦闘だ。

今回は戦いはツナにとつても、良いウォーミングアップになつたに違ひねえな。」

「…？」

左肩に乗っている赤ん坊、リボーンさんの呟きに私は更に驚く。

その驚きぶりは手に持っていた買物袋を落としてしまつ程。

…… 今の力でもまだ、沢田さんは、ウォーミングアップ。それに、慧音さんが言つていた数百年前に、今回と同じく、人里のピンチの時に現れた、橙色の炎を使いこなした少年。

…… 一体、沢田さん達は何者？

「人里の危機が去つたと言つのに、随分深刻そうな顔してゐるな、東風谷。」

「ひやつ…！」

いきなり、沢田さんに声をかけられ、私は素つ頓狂な声を出してしまつ。

それに、この沢田さんの瞳は慧音さんの言つていつた、大空の様に澄んでいて、まじまじと見つめられると、つい……恥ずかしくなつてしまつ。

…… だが、沢田さんは妖怪を倒したといつのに、まだこの状態（リボーンさんが言うハイパー化）から、普通の姿に戻つていない。

「…………おいツナ。

妖怪を撃退したのにどうしてハイパー化を解かねえんだ、何か他

「にあるのか？」

リボーンさんも私と同じ事を考えたらしく、帽子を深く被り沢田に尋ねる。

「…………ああ。

俺が、あの妖怪との戦闘している間に、俺の超直感が、一いつの大
きな炎圧の死ぬ氣の炎がぶつかっていけるのを感じたんだ。」

沢田さんはそこまで言つと、くるりと向きを変え、あの妖怪が帰
つて行つた森がある方向をじっと、見つめる。
死ぬ気の炎、超直感？

…………しかし、沢田さんは私の心情とは裏腹に喋り続ける。

「…………しかも、それだけじゃない。その一つの死ぬ氣の炎の内、
一つは俺達がよく知つている、雲雀の…………雲属性の死ぬ氣の炎な
んだ。」

「…………」「…………」「…………」「…………」

私は、ここまで来ると沢田さんの話している意味が、本格的に解
らなくなる。

「…………すまないが沢田、それは少しあ前の考え過ぎじゃない
のか？」

「…………普通に考えて、直感で出したそんな答えが、正しいと
いう確率は、少なすぎでは……」

「俺はそんな事、思わねえぞ、上白沢。」

「 「」

慧音さんの、思案はリボーンさんの一言で遮られる。すると、リボーンさんは私の肩からジャンプし、沢田さんの右肩の上に飛び移る。

「いいな、上白沢。

ツナにはな、常人を遙かに凌ぐ優れた直感力、.....超直感といつものを持つているんだ。

.....お前の言う、数百年前に現れたツナと瓜二つの少年と同じでな。」

「.....なるほど、常人を遙かに凌ぐ直感力ですか。

だから沢田さんは私の腕を掴んで浮かんだだけで、その優れた直感力を使い、で宙に浮くコツを見い出だしたんですね。

「.....で、ツナ。

お前はその一つの大きな炎圧の死ぬの炎をお前はどうする気だ？ツナの超直感の読み通り、その雲属性の炎が雲雀のだとしたらかなり厄介だぞ。

もし、あいつの暴れている場所が此処みたいな人里だったら、その人里に、どんな被害が出るか計り知れねえぞ。」

リボーンさんはまだ帽子を深く被ったまま沢田さんに尋ねる。この話を聞く限り、その雲雀さんというのは、怒ると手をつけられなきなる、じゃじゃ馬の様な人のようですね。

「.....そんなの、どうに決まっている。」

沢田さんはリボーンさんの間に、そつと捨てるに視線を森から私に移し……

「あやつー？」

私の首筋と太ももの裏側を両手で抱き上げ……谷にしつ、お姫様抱っこを私にする。

すると、沢田さんは身体を徒競走のスタートダッシュの時と同じ様に身を低く屈め。

「俺は…………その闘いを止めに行くーー！」

ボオウッ

「ひやつー？」

グローブから噴出される、炎の使いその直感で感じとつたりしき場所に、地図やコンパスを一切使わず、只、何処かへ一直線に向かうのであった。

時間は少し戻り、ツナ達がまだ妖怪が暴れているとは知らず、東風谷の提案で団子屋に向かおうとしていた時。

紅魔館では、雲雀とレミリアがプライドを賭けた、大激

闘を繰り広げていた。

「…………君。…………小さこくせに、中々やるね。」

「…………そちらにや、人間の分際で私と互角に渡り合つなんて。」

雲雀とレミリアはお互に距離を取り、身体を休める様に、肩で息をしていた。

二人とも、相手の強さは身に染みて判っているが、自分のプライドが邪魔をするのかその事を素直に認めようとはしない。

バツ…………キイーン――

二人は、小休止が終わり、一気に距離を縮め、雲雀の雲属性の炎を纏ったトンファーとレミリアの赤い槍が激突。

そして、その二つの武器がぶつかり合う鈍い音が部屋中に響き渡る。

ガン　ギン　キン　キン　　槍とトンファーの激しい応酬

キン　ガン　ガン　キン

ガキーン――

そして、二つの武器の激しい鎧ぜり合い。

「…………あなたのトンファー、面白い色の炎を纏つているわね。一体、どんな力を秘めた炎なの?」

しかし、レミリアはこんな激闘のさなか、余程余裕があるのか雲

雀に質問をしてくる。

「………… そんな事より、闘いに集中しなよ。」

バツー！

だが、雲雀はそんな質問には耳を貸さず槍を受けていない、もつ片方のトンファーアでレミリアを急襲。

「…………甘いわね。」

しかしレミリアは片方のトンファーアが襲つて来ると同時に槍を持つたまま、後ろに宙返り。

そして、雲雀の一瞬の隙を突き、宙に浮いたまま、自分の全力を込めた回し蹴りを入れる。

「くっ…………！」

雲雀はそれをもろに喰らい、回し蹴りの威力の強さに、そのまま蹴り飛ばされそうになるが、蹴り飛ぶギリギリの場面で、さっきまで、槍を受け止めていた方のトンファーアで置き土産とばかりにレミリアを殴り飛ばす。

ドゴッ！ ドバツ！

二人共、別々に部屋の壁に激突。

……吹き飛ばされた威力がそれ程強かつたのか、二人は壁をぶち抜くと隣の部屋まで飛ばされ、この部屋の広さが元の倍程の広さになっていた。

…………もちろん、一人のせいで部屋の備品や天井はこれでもかと言つほど破壊され、部屋は大地震で崩れた瓦礫の山の様になっていた。

「…………お嬢様！？」

咲夜は、レミリアが殴り飛ばされるのを見ると、雲雀との戦闘でボロボロになつた身体でレミリアの所へ行こうとするが……

「咲夜、来ないで。私は大丈夫だから。」

壊された壁の中から土埃を舞い上げ、槍を持ったレミリアが出て来て、駆け付けようとする咲夜を槍を持っていない手で制止する。しかし、服はボロボロで頭に被つていた、赤いリボンがついた帽子は無く先程には無かつた、カリスマのオーラが感じられる。

「…………隨分と派手にやつてくれたわね。」

…………雲雀恭弥「

レミリアは雲雀が激突し、埋もれている崩れた壁に人間ならぬ殺氣を込めて尋ねる。

「君も…………やつと本氣になつてくれたみたいだね。」
すると、激突した壁の中からレミリアと同じく、土埃を舞い上げながら雲雀が顔を出す。

…………しかし雲雀はレミリアの放っている殺氣を感じ取っているらしく、微かに笑いを浮かべている。

「これでやつと、君の本氣を見る事が出来る。」

雲雀はレミリアの本気が見られるのが嬉しいのか、微かに笑つたままトンファーを構える。

しかし……

「何を勘違いしているのかしら雲雀恭弥？」

レミリアは、やる気満々の雲雀をさげすむように冷笑する。

「勘違い?」

雲雀はレミリアの一言に眉をひそめる。

「そう、勘違い。

……確かに、今回、私はあなたに殴り飛ばされて、私もあなたと全力で闘うと決めたわ。」

そこまで言うとレミリアは槍を地面に突き刺し、右手の中指と人差し指で一枚のお札を摘む。

「だから……私は本気でやらせて貰うの。

この幻想のルールに基づいたやり方でね……」

レミリアはそこまで言つと、お札……スペルカードを左胸の前に持つて来る。

「…………悪いけど、僕には君の言つている事が理解できないな。
幻想郷、ルール? 一体何の事だい?」

ダンシッ!!

雲雀はそこまで言つと、トンファーを構え、レミリアに向かつて一気に突撃。

「ならないわ、雲雀恭弥。

あなたに身をもつて教えてあげるわ。
私の本当の恐ろしさと幻想郷の厳しさを。」

レミリアは、向かってくる雲雀に不適な笑みを浮かべ……

「神罰 スターオブダビテ！」

……と、雲雀に向かつてスペルカードを放つ。

…………すると、いきなじュニアの周りに、何本もの青いレーザー光線と数多くの丸い弾幕が構築され。

「…？」

突撃してくる、雲雀に向かい、レーザーと弾幕が次々と彼に襲い掛かつて行く。

「ぐつ……」

雲雀はそのレーザーや弾幕が自分に当たるギリギリの所で、雲属性の炎を燈したトンファードそれを防ぐ。

「ロール、出番だ。」

すると雲雀は、右手の中指にはめている、雲ハリネズミのアニメルリング……ロールをリングの状態から解放。

「クピィィィー！」

…………ボオウッ！－

するとロールの鳴き声と同時に雲雀のボンゴレリングに炎が燈る
…………そして、そのまま

ドツ、バババババツ！－

「 「 ー?」

雲雀のハリネズミのトゲが雲属性の増殖により一気に増加。

パン、ダダダダダ!!

最終的にその増殖したトゲが雲雀の変わりにレーザーや弾幕に激突、結局、雲雀にレミリアの放った弾幕が当たる事は無かった。

「君の強さもこんな程度。
なら、興味ないな。」

雲雀はいつも呟くと、ロールの増殖を元に戻し、再びトンファーをレミリアに向けて構えた、その刹那。

どうですか、今回は力を入れて一番の長編。
超直感の説明だけじゃ、物足りないと思つて……。
さてさて、次は絶対五日間以内に投稿したいと思います。
ん？ 終わり方がいつも一緒に、気のせいですよ、きっと……。
ではでは……。

標的9 ſuña battaglia fiera

雲の守護者の激

一週間以内のつもりがポケモンと緋想天という落とし穴にはまり投稿がかなり遅れました。

すいません。

でも今回も結構内容が盛りだくさんです。

それでは!!

斬。

「 「 「 」 」 」

突然、雲雀の背後の壁から紅い一閃が走った。

バシッ！

「 「 「 ……ぐつ。 」 」 」

そのまま紅い一閃は部屋中を駆け巡り、雲雀、レミリア、咲夜を急襲。三人ともそれにより、別々の場所におもいつきつ叩きつけられる。

すると、雲雀の背後の崩れかけた壁から、右手に長く紅く燃える剣を携え、何色もの色がついた縦に菱形のガラス細工をした様な物を翼に生やした、吸血鬼と思われる、一人の少女が現れる。

その少女はレミリアとは色が違い、金髪で髪をちょこんと左側に結つており、白くて丸っこい帽子にレミリアと同じく、紅いリボンが付けてている。

洋服もレミリアと同様ドレス見たいな服を着ているが、色はレミリアのピンクでは無く、まるで鮮血の様に赤い色調のドレスであった。

「あっ、ごめんね～お姉様。

私、手加減つて事知らないから、ちょっと力を入れすぎちゃった。

少女は自分がやった事に罪悪感を持つていないので、軽々しい様子で瓦礫等に埋もれている、レミリア達に話しかける。

「フラン、……………遊びてあなたが此処に？」

瓦礫の山に叩きつけられたレミリアはゆっくりと顔を上げると、田の前に居るフランといつ少女に問い合わせる。

レミリアはどこか、フランといつ少女の登場に焦っている様に感じられる。

「どうして此処に私が居るのかだつて？」

……………あははっ、お姉様つてば変な事を聞くね。」

フランはゲラゲラと笑つた後、また言葉を続ける。

「私ね、お姉様達と遊びたいの。

もつとお姉様達と沢山遊んで、もつともつと多くの物を壊したいの。

」

フランは田を丸くしているレミリアに満面の笑みで話しかける。遊びという単語は、一見微笑ましく思えるが、その後に続く言葉により、この少女が求める遊びは決して微笑ましい事では無いのを物語っている。

「……………ねえ君達、姉妹喧嘩は別の所でやつてくれない？
今は僕との闘いに集中してくれないと、噛み殺すよ？」

すると雲雀が瓦礫の中から姿を表す。今回の一撃で雲雀は更に激昂したらしい、両手のトンファーに纏う薄紫の雲属性の炎は澄んでいて、さらに純度が高くなっている。

「へへ、お嬢様このお兄さんと遊んでいたんだ。」

フランは雲雀を見ると一ータニタ笑いを始める。

「じゃ、三人で遊びましょ。咲夜が居ないのがちょっと残念だけど……」

フランは赤い炎の剣を構える、そして……

「ルールはとても簡単、死んだら終わりのDEATH Gameだよ！」

ガシンッ！

これと同時に、フランの剣と雲雀のトンファーが激突。

フランの登場に焦つているレーリコアを尻目に紅魔館の戦闘はさらに激化するのであった……

その頃、一つの大きな死ぬ気の炎の反応がある場所に向かう為ツナ達は木々が生い茂る、森の中をかなりのスピードで突っ切っていた。

「…………」

一つの大きなエネルギーの場所に向かう為、森の中を猛スピードで駆け抜けている途中、俺はその場所から新たに表れた死ぬ気の炎を超直感が感知するが、

その炎の余りにも大きい炎圧に圧倒され、ついその場で急停止してしまう。

.....にしても、物凄く大きな炎圧だ。これ程大きな炎圧は、見た事が無い。

下手をしたら、これは白蘭以上だ。

「.....沢田さん.....どうかしました？あの速過ぎるスピードから、いきなり急停止させられると、さすがに心臓が.....」

すると、俺の両手の上で抱えられている東風谷は、俺のXグローブから出る炎の推進力にバテたのか、目を回しながら咳く様に喋る。

「ツナ、ふと思つたんだが、お前の超直感に死ぬ急の炎を感じする能力なんてあつたか？

俺が見る限り、この幻想郷に来るまではそんな事はできなかつたはずだぞ。」

「.....」

東風谷とは違い、リボーンはXグローブのスピードにものともせず、彼の鋭い洞察力で発見された質問に、俺は返す言葉が無くなってしまう。

まあ、これに気づくとは、さすがリボーンという所だが。

俺は心のなかで嘲笑すると、気を取り直して、リボーンの質問に答える事にする。

「…………ああ、リボーンの言つ通り、俺も幻想郷に来る前までは俺も死ぬ気の炎を感知なんてできなかつた。

…………でも、幻想郷に来て…………いや正確にはあの妖怪と鬪つた時、何の前触れも無く、感じられる様になつたんだ。」

これは本当の事で、あの妖怪を倒した後、いきなり一いつの大大きな死ぬ気の炎を感じる事ができた。

三年前のあの時では全く感じる事ができなかつたのに…………

「要するにお前の死ぬ気の炎を感知する能力は、この幻想郷に来て開花したものなんだな。

この件が終わつた後調べて見る必要がありそうだな…………」

リボーンは帽子を深く被つて独り言の様にブツブツと呟く。

しまつた…………今はこんな事をしている場合じやないな。
リボーンが言つた通り、まだこの件は終わつていないのでから。

俺はそこまで想つと、俺の両手の中でもまだバテている東風谷に一声かけてやる。

「東風谷、バテていそな顔をしているがまだ我慢できるか?」

「えつ…………あつ…………はい、多分何とか…………」

すると、東風谷の頬が何故か薄い朱色に染まる。

「…………… そうか、ならもう少しの間、堪えてくれ。
そつすれば、俺も速く到着するようにするから。」

ボウツ！

俺は東風谷にじひ言い捨てるに今までの約1・5倍の速さで再び移動を開始する。

…………… もうこれ以上、時間を無駄には出来ないからな。

そうして俺は目的の場所に向かうのであった。

その後、三年ぶりに命を懸けた死闘が待っているとは知らずに……

ツナ達が到着を急いでいる頃、紅魔館では雲雀とフランの戦闘が激化していた。

ヒュン ビュン ビュン ガシンツ！！

フランの赤い炎を纏つた剣は不規則な太刀筋ながらも一撃、一撃に致死性の攻撃力を込めているその剣の連撃を雲雀に与える。
しかし、雲雀はその攻撃を掠るギリギリの所やトンファーで剣を流して回避、その後フランの一瞬の隙を見つけ、両手のトンファーで

の連撃。

だが、フランもそれを意図も簡単に回避、一向に勝敗が決まらない文字通りの『接戦』あるいは『激闘』が繰り広げられていた。

「ねえ、君のお姉さん。

さつきからボーッとして、闘いに参加しようとはしないんだけど、どうしたのかな？」

雲雀は剣を避けながら喋る。

「ん？

ああ、レミコアお姉様の事。」

ガギンッ！

その後、フランの剣と雲雀のトンファーが激突。

「あのね、お兄さん。

その事だけど、私とレミコアお姉様はとても仲が悪いの。だつてお姉様は私の事を495年間もの間、閉じ込められていたんだから。」

ガンツ キン キン ガギンッ

その後、剣とトンファーの激しい応酬。

ザッ

雲雀は両手のトンファーでフランを左右から挟もうとするが、フランは上に跳躍しそれを回避。

ガン ギンッ ガン ガン ガギンッ

フランは翼を利用して、宙に浮いたまま剣で応戦。

しかし、それを雲雀も人間離れしている反射神経で全て受け流す。

ガギンツ！ ザツ

これでも決着がつかず、二人は体勢を立て直す為一旦後退。

雲雀の方が微かに息が荒く、戦況は雲雀の方が若干不利に見える。

「…………でも、それじゃあ僕の質問の答えにはなってないな。僕は君のお姉さんがどうして参加しないのか質問したんだ。誰も君達の友好関係なんて聞いてない。」

雲雀は息を整えると、フランに今一度トンファーを構える。しかし、身体の至る所にフランの剣のかすり傷があり、雲雀は『ボロボロ』である。

「…………もう。

お兄さんは分かつてないなー

だって、私とお姉様は仲が悪い、だからお姉様は私を嫌って、この遊びに参加しない。

理由はこの一つで充分じやない。

ほら、お兄さんだつて、例えば嫌いな人が居たら極力その人を避けようとするでしょ？

それと同じ原理だよ。」

フランは雲雀に同意を求める様に微笑む。
だが……

「…………へえ、君のお姉さんは、面白い考え方をするんだね。
もし僕が君のお姉さんの立場だつたら、真っ先に君を噛み殺そうと

あるの?』。『

雲雀はそこにトンファーを構えるのを止め、フランの微笑にほくそ笑む。

まるで、自分が必ず勝つといつ様に……

「私には、お兄さんの考える事が面白いな。

だって、お姉様が私を襲おうとしないのは、私とお姉様に確たる力の差があるからなんだよ。

だからお姉様は、約500年前に何も知らない私を地下に閉じ込めた。

お姉様があの異変を起こすまで……』

フランはそこまで言いつと、レミコアの方を見る、レミコアはフランにここまで言われ、プライドが著しく傷ついたのか、ただ地面を見て、拳を強く握っている。

「ああ、休憩もできた事だし、そろそろ再開しようか。

僕は君を噛み殺したいからね。』

そう言いつと雲雀はどうした事か右手に持っていたトンファーを閉まつてしまつ。

「あれー?

お兄さんなんで、持つてた武器閉まつちやうの?

まさかと思つけど、その武器無しで私に勝てるとか思つてないよね?』

フランは雲雀の行動に疑問を持ったのか、首を少し傾け、わざと雲雀を挑発する様にコミカルに話す。

「さあ。

僕はそれを君に話す義務は無いから、君には何も言わないからね、どうなのが自分で考えなよ。」

すると雲雀は自分の頭上にいる雲ハリネズミを微かに眺め、右手の人差し指を上にたてる。

「行くよロール、カンピオ・フォルマ形態・変化。」

雲雀はロールに何かをさせる為に掛け声をかける。

「クピイイイイ！」

するとロールはそれを了解したといわんばかりに声を上げ、ロール自らと雲雀の立てた人差し指が薄紫色に発光。

「　　……！？」

雲雀を除く全員をそれを何が起るのか、視線を発光しているロールと雲雀に送る。

ヴヴンッ……ガニッ

それから、徐々に薄紫色の発光が收まり、全体像が見えてくる。

そして……

「さあ、覚悟いい？」

雲雀の人差し指から姿を表したのは、全体的に黒みを帯び、雲属性の炎を燈したトゲがある……雲雀のボンゴレ匣、アラウディの手錠であった。

標的9 ſuña batta g̃ia fier a

雲の守護者の激

どうでしょ。う。

一週間分の内容量 まあ、文才は相変わらず無いですが・・・

ちなみに今はまっているポケモンはPPです。

あれが結構楽しい・・・

それと今週の終わりは僕の学校の学園祭。

その次の日辺りに振り替え休日があるので、その日は色々頑張ろう
と思います。

ではでは。

追伸

イヤホンがついて世を迎えました。

イヤホンして寝てたら気が付いたり忘れてた・・・ひどいっしょ。

標的 10 → Arrivo

雲の墜落 大空の到着

(前書き)

何とか投稿できた・・・

今日から明後日まで振り替え休日、何して過ごしそうか・・・

それでは!

「さあ、覚悟はいい?」

戦場の臭いが漂う紅魔館の一室。

しかしそこは、度々による激闘により一室と言うより、サッカーブランドが丸々一つ入る、大きい広場になっていた。

そして、右手にトンファーの変わりに、手錠を持った雲雀は、常人では絶対に堪える事のない、凄まじい殺気と共に威圧しながら、目の前の敵フランドルースカーレットに問い合わせる。

「ふつ…………アハハハははは」

しかしフランは、その雲雀の問いをあたかも馬鹿にするように、音調がかなり狂った笑いをする。

…………音調が外れたフランの笑い声は、心なしか闇にざわめく悪魔の嘲笑に聞こえる。

「ねえ君、そんなに笑っていて何がおかしいの?」

雲雀はそんなフランに睨まれただけで硬直しそうな鋭い視線を加え再び殺氣で威圧する。

「…………だつて、お兄さんの言つ事がとつても面白いんだも

ん。」

かフランはそんな雲雀の殺氣をものともせず、はたまたコミカルに喋り始める。

「でも、ここまで私に追い詰められてまだ、強がる人間、初めて見たよ。

普通ならここで、助けてーとか止めてくれーなんか言つて私に恐怖して命じこをするのが普通なのに。」

でも結局、私が壊すの決まっているのだから無駄な事極まりないのにね。

お兄さんはそんな事しないってことは……」

コミカルに喋る変わりに内容はかなり残虐さが混ざつている。きっと、この少女はそれだけ圧倒的な強さとそれを証明できるだけの修羅場、フランの言つ『遊び』を体験をしているのだろう。それもかなり一方的な『遊び』を……

「…………」

すると雲雀は、そんなフランの言葉に黙り込むんでしょうね。

雲雀にもきっと、この少女を田の前にした時、『恐怖』や『畏怖』等を感じる事であつただろう。

しかし雲雀はそれらの行為を血のプライドがさせないのである。ア。

血の高貴で気高い、孤高のプライドによって……

「それに、お兄さんだつて気づいているよね。

お兄さんの身体はもう既にズタボロ、私が放つた最初の一撃は、お兄さんの背中にもりに命中させたはずし、普通の人ならその時点で立ち上がる」とすらできなーはずだよ。

お兄さんをそこまで支える物つて一体何、それにお兄さんの身体はいつまで、私との遊びに堪えられるの？

ちなみに私、遊び飽きたおもちゃはすぐに壊しちゃうタイプなんだ

私、かなり飽き性だから。

さあつて、お兄さんはいつまで、楽しめるのかな？」

フランは雲雀は黙つたのをいいことに饒舌な舌でどんどん喋つてくる。

「…………一つ、いいかな。

僕は君の玩具になつた覚えは一回も無いよ。

それより早く、この茶番劇を終わらせよ。君の相手はもう疲れた。」

ヒュン ヒュン ヒュン ヒュン

すると雲雀は右手の人差し指に持つてゐる手錠を弄ぶように回し始める。

しかも一つだつた手錠はいつの間にか二つに増え、左手に持つていたトンファーをも収納し、両手の人差し指で手錠を回し始める。

「君の行動、及び言動を並盛中風紀委員並びに本校への敵対運動と見なし、

君を並盛中・反逆罪として……僕が逮捕する。」

ザンツ

それと同時に雲雀はフランくと向かって走り出す。

ヒュン ガンツ ガンツ ヒュン ヒュンガンツ

雲雀は両手の手錠をトンファーの様に使こなしふランの剣に応戦。

時より手錠で応戦できない場合は血ひの身体を反らす等として回避。

雲雀の動きは更に俊敏さを増し、この激闘に終止符を打とうとしている事が窺える。

「無駄だよ、お兄さん。

どんなにお兄さんが頑張っていても、人間の分際で私には敵わないよ。

それにその手錠、どんなカラクリかは知らないけど。

もし私の手にはめたとしても、すぐに壊して抜け出せるから、かなり無意味だよ。」

フランは緊迫したこの状況を未だ楽しんでいる、きっと少女にとって雲雀はただの人間でしか無いのだろう……

しかし、フランは知らなかつた。

雲雀は三年前、未来に飛ばされ幾多もの戦闘をこなしていたことを。

「確かに、君には一、二個の手錠だけでは、到底効足りそうに無い
ね。」

ガシンツ！ ガチャ

雲雀の言葉が終わると同時に両手の手錠がフランを捕らえる。

「でも、もし手錠が三十や四十の数があつとしても、君は余裕な顔で、手錠を壊して抜け出せるの？」

「…？」

その瞬間初めてフランの顔が驚愕の色に染まる。

ボオウッ

雲雀の言葉の後、間を入れず、彼の雲のボンゴレリングが発光。

ガン カンカンカンカンカン……

フランの手を捕らえた手錠は雲の増殖により激増しフランの顔を

除く全身を駆け巡り、あつとこゝ間でフランの全身を拘束具の如く縛り上げる。

「……………？」

その凄まじい光景にさすがのレミリアと咲夜の二人も何も言葉が
出ない。

「ああ、決着はついた。

君はこの全身縛り上げられた状態から、どうやって抜け出せるの
かな？

見物だよ。」

雲雀は最初に掴んだ手錠の片方を持ち、勝ち誇った顔をして、フ
ランに話かける。

「……………」

だがフランは何も言ひ無く、ただ下を向いている。

「どうしたの？」

何か喋りなよ、でないと…………少し締め上げるよ。」

すると雲雀は掴んでいる手錠を少し握る。

フランを捕らえている拘束具も連動して彼女を圧迫し、フランを
更に締め付ける。

……縛め付けられると同時に拘束具の外にフランの赤い鮮血
が生々しく桜の花びら如く飛び散る。

しかしフランはそこまでされて尚、ただ下を向いて黙り続ける。

「ねえ、どうしたの？」

さつさまであんな流暢に喋り続けていた元気は何処へ行ったの。」

雲雀はさらに手錠を掴み、フランを限界まで圧迫させようとした、

その刹那だった。

ザンシ！

雲雀の右側から、不意に一人目のフランが現れ雲雀の脇腹に、フランの全身の力が籠つた強烈なタックル。

「ぐつ……

雲雀はフランのタックルの衝撃に堪えられず手錠から手を離し、
吹き飛ぶ。

「「「」」

「……………？」

これは悪夢なのか、雲雀が吹き飛んだ場所に、残虐な笑みを浮かべた、三人目のフランが登場。

吹き飛ばされ、体勢のままならない雲雀の腹に右足での屈強な一撃。

「ぐつ…………」

バキッ、といつ骨が軋む音とともに、雲雀は口から吐血。

そのまま、雲雀はフランに蹴り飛ばされ…………

「がつ…………」

四人目のフランが駄目押しと言わんばかりに、雲雀がたたき付けられた地面が崩れる程の渾身の躍落とし。

(手錠に拘束されているフランを除いて) 総勢三人のフランによる、怒涛の嵐。

その光景は三人の悪魔が織り成す、壮絶なるフランのスペルカード『フォーオブアカインド』であった。

「「「「どう、私の強さ。」」」

何本か骨をまた折つといったけど、お兄さんも存分に、楽しめたで

しょ。」「」「

合計四人に分身したフランは地面に倒れ込んでいる雲雀に尋ねる。

「　　「でもいいや。

私、お兄さんと遊ぶのあきちゃった。」「

グギギギギギ…………バギンッ！

するとアラウディの手錠に拘束されていたフランは物凄い力で手錠を破壊し、先程の鮮血が何事も無かつたの様に抜け出し、残り三人のフランが手錠から抜け出たフランと同化する。

またフランに破壊された手錠はアニマルリングの形となり、雲雀の手の指に戻った。

今回、フランを拘束するのにかなりの死ぬ気の炎を消費したらしく。もし、フランがレミリアと同じく弾幕を放つてもロールは使えず、雲雀自身も『フォーオブアカインド』により、動く事さえままならない。

形成逆転…………そして、万事休す。

だが、

「…………」

雲雀はこのボロボロの身体で、操り人形の様なぎこちない動作で、再び両手にトンファーを握りながらゆっくりと、立ち上がる。制服も既にボロボロ、口の周りにはさつきの吐血の後があり、目つきもこの状態でまだ、鋭くなっている。

「うふふ、まだやる気?」

お兄さん頑張るね、どうしてやしまで頑張るの?

何がお兄さんをそこまでやせるの?」

「……………」

雲雀は、フランの言葉に耳を貸さず呆然とトーンファーを構える。

「……………まあ、いいや。」

そんなの今から壊すおもちゃに聞いても仕方ないからね。」

すると、フランは一枚の札を手にとる。

「バイバイ、お兄さん。

お兄さんとの遊び、まあまあ楽しかったよ。

でも、わうおしまい。

禁忌 カ『メ カ『…………『GAOOO...』……?』

フランのスペルカードはある動物の砲勝により、最後まで呪えられる事は無かつた……

バゴギンシ――!

デゴンシ――!

「……………？」

紅魔館の壁に大きな亀裂が入り、全員の視線がその亀裂に送られる……

「……………どうやら、間に合つたみたいだ。」

「バンシ！」

身を屈めて、白いシャツに黒いベストを着た少年が現れた。

「ガウッ！」

しかも、只の少年では無い。

橙色の鬚を生やした、小さなライオン。

右肩に黒いスースに身を包んだ赤ん坊に、両手に緑色のロングヘアーに巫女を装束を着込んだ、少女を抱えた。

死ぬ気モードの沢田綱吉、いやボンゴレ×世であった……

標的10 → Arrivo

雲の墜落 大空の到着

(後書き)

・・・疲れた。

基本寝る前に小説を書くのですが、眠い・・・

誤字があつたらお願ひします。

次は明日に会えたら良いです。

ではでは！

昨日、投稿の予定が風邪により一日のびました。

ごめんなさい。

それと、サブタイトルのイタリア語、これからまえがきで解説する事にしました。

今回は、『戦闘開始』という意味、それでは

死ぬ気の炎を感知し、人里から飛んできた俺は、寝ている門番が居る庭を通り越し、表側の壁が、紅く塗装された館に乗り込み、この館の中の状況に絶句する。

両手を東風谷を抱いていたので、ナツツを使い、壁を石化させて侵入するという手荒いやり方で侵入したのだが……

至る所に瓦礫の山、天井は高くえぐれ、部屋と部屋を仕切つていた壁は無惨に壊され、ちょっととした大広間に、また血痕もあらゆる場所に垂れ落ちていて生々しく、それが戦場の渴いた雰囲気と激闘の傷跡を嫌というほど醸し出している。

超直感が感じた炎を追つてここまで来たが、正直ここまで酷いとは……

「にしても…………この部屋の状況は酷いですね。

沢田さんの指輪からあのライオンちゃんが現れたのも驚きですが、それ以上にこの空間の余りに生々しい雰囲気に酔いが一気に覚めてしましましたよ。」

東風谷も俺と同じ考え方しつゝ、深刻な顔してこの空間を見回す。

彼女の頬に、うつすらと一線の汗が浮かび上がる。

「…………ツナ。

まだ、悪い知らせは終わってねえぞ。

アレを見てみる。」

右肩に乗っていたリボーンは、地面に降下し、ボロボロの状態になつて立っている、雲雀恭弥を指で指す。

「沢田綱吉に赤ん坊…………何処から現れたのかは知らないけど、何しに来たの？」

雲雀は俺の方を向くと、相変わらずの鋭い目つきで俺達を睨む。しかし、その姿にいつもの威厳は無く、制服も至る所がほつれていて、雲雀の動作に操り人形の様なぎこちなさがあることから、雲雀は相当のダメージを受けたのだろう。

それも、常人では命を落とすレベルの物凄いダメージを……

「あつ、また新しいお兄さんだ。
今日はいつも以上に色んな人がくるね。
何かお祭りみたい！！」

すると、独特な形状をした形の羽を生やし、赤いドレスに黄色めいた髪を左側にポニー テールで結んだ可愛いらしい幼女が俺達の方を向いて微笑んでくる。

幼女は、羽が生えているという時点で人間では無いことを物語つており、おそらくは東風谷の姫つ、幻想郷に住むという吸血鬼の幼女である。

だが、

この幼女が出す、威圧感はハンパない。……
本人は気づいてないかもしれないが、放たれる威圧感は本当に凄まじい。

超死ぬ氣化では無ければ、俺は足がすくんでいただろ？

きつと、雲雀はこの幼女にやられたのだろう。それも、完膚なきまでに。

ザツ……

俺は、東風谷をそつと地面上に立たせると、右肩にリボーンの変わりにナツツを乗せ、一步、前踏み出す。

「…………雲雀、お前は傷を負い過ぎだ、下がっている。こいつは俺が何とかする。」

ボオウツー！

両手のグローブに炎を燈し、雲雀へ語りかける。

俺のファミリーの一人がやられそうになつてているんだ。

その事に黙つて目をそらして無視できる程、俺は廢れていらないんでな。

それに、俺はボスを継ぐ時、決意したんだ。
守護者達を俺は、全力で護るという事を……

「…………何言つてんの、沢田綱吉。

これは僕の獲物だ、僕の邪魔をするなら、まずは最初に君を噛み

殺すよ？」

すると案の定、と言ひべきか。

雲雀はそれを許諾せず、俺に向かつてトンファーを構えて来る。

「…………止めとけ雲雀、今のその身体じゃツナを倒す事すら不可能だぞ。

自分の事だ、雲雀が一番わかっているかもしないが、お前、骨を何箇所か折られていて、立っているのがやつとの状態だろ。悪い事は言わねえ、ここにはツナに任せて一回下がれ。

…………もし、言つ事を聞かないなら力づくでも下がらせんぞ。

リボーンは帽子を深く被り、レオンを拳銃に変化させ、雲雀を齧す。

「赤ん坊…………」

雲雀は何故かリボーンの言つ事には、聞く耳を立てぬじへ。

トンファーをぐつたりと降ろし、

「仕方ない。赤ん坊の言葉に免じて今回だけは君に譲るよ。」

と言い捨て、この部屋の壁側まで行きゆつくり座り、俺と幼女の闘いを観戦するかの様な姿勢をとる。

本当にさすがだな、この雲雀を言い丸めるとは、やはり凄い。これで俺も本気で行ける。

「ガウツ！」

右肩に乗つてゐる、ナッシもどつやうりやる『奴』だ。

「…………沢田さん、私も一緒に闘います。
あの子の殺氣は尋常じゃありませんし、第一、外来人の沢田さん
一人じやとても不安です。」

…………すると、以外な事に東風谷が俺と一緒に闘つてくれるとい
う。

東風谷の実力を知る良いチャンスだし、とても心強い、だが……
…………すまない、東風谷。
「…………」の場は俺にやらせてくれ、これは俺の闘いなんだ。」

「……？」

…………俺は東風谷との共闘を断る。

「確かに。今回は、出る幕じやねえぞ東風谷。
これはツナのファミリーについての問題だ。」

リボーンが俺の言葉におこしつをかける様に東風谷へ語りかける。

「なつ…………リボーンさんまで…………どつしてですか？
相手の強さがわからない今、数が多いなら闘いが有利に……」

「いいから、おとなしくツナの闘いを黙つて見ていろ。
それからでも、お前が加わるのは遅くは無いはずだ。」

「……………」

リボーンは、東風谷を靈雀と同じく言ごくめ、辺りは一層静かになる。

「さあ、小休止は終わり。

そろそろ本題に入らうよ～、お兄さんが両手にしている、そのグローブって、お姉様がよく話した、ボンゴレって組織に関係する物だよね？」

「…………」「…………」

俺とリボーンは幼女の言葉に、耳を疑う。何故、幻想郷の奴がボンゴレの名を……

「ふふっ、どうやら図星だつたみたい。

じゃあ、教えて。ボンゴレの強さを、お姉様を楽しませた、その強さを。」「

「…………ああ、いいだらう」

ボオウシ～

呴くと同時に、俺はグローブの炎を柔の炎から剛の炎へと変化させる。

…………そうだ、俺が今からやる事は決まっている。

この幼女がボンゴレを名を知っていたとしてもそんなの今は関係無い。

今はただ……

ザツ～！

推進力を利用し、今までいた場所から瞬時に、この幼女の背後へ移動。

「お前を倒す事に集中するだけだ。」

ザンツ！

眩ぐと同時にグローブで幼女の背中に一発のストレート。

ギンツ！

「…………くつ、」

幼女はそれをすんでの所で、赤い炎を構築した剣で迎撃。
この赤い荒々しい炎…………嵐属性に近い。

バツ

俺は一度、幼女から距離をとり……

「はあつ！」

真っ正面からの正拳。

ガンツ

これも同じく、幼女の剣で受け止められる。

「何を考えているの、ボンゴンのお兄さん？

正面からの一撃を、まさか、私が止められ無いとでも思ったの。

ほら、早くその自慢の拳で私の『レーヴァテイン』、突破してみ

てよ。」

幼女は、俺を挑発する様に、軽快な口調で「ミカルに語りかける。
しかし……、これが受け止められる事など予想通り。

「ナツツー！」

すると俺は右肩のナツツに、一声。

「GAOOO！」

ナツツは俺の言葉を待っていたかの様に、幼女の剣へ向け、咆哮。

ピシヤツ

「…………えつ！？」

ナツツの咆哮により、幼女が持つ『レーヴァテイン』という剣が
大空の調和により石化。

その石化した剣を左手で掴み、それを軸にし幼女の脇腹に、回し
蹴り。

ドバンッ！

幼女は、俺の蹴りに耐えれず既に崩れている、部屋の側面の壁に
激突。

「どうした、お前の力はそんな物か、俺はまだ本気の一割も出して

いないぞ。」

俺は、その側面の壁を見据えながら幼女に、聞こえる様な声で呟く様に話しかける。

……そう、鬪いはまだ、始まつたばかりだ

・・・ついでソフラン編開幕。

最初を見ると、ツナが結構有利そうですが、さてこれからどうなるやら・・・

時期を見て、他の守護者も幻想入りさせます（紅魔館とは限らないけど）、とついうよりぶっちゃけ、守護者を何処に行かせるか考えているのですが、タイミングが・・・

辰々と語って、「めんなさい、どちらで守護者の話あることはジョットの話を組めば良いか誰かアドバイスください。

でわでわ。

いろいろあって遅くなりました。

ごめんなさい。

今日からテスト一週間前、さてどうがんばりましょうか・・・

あと、サブタイの意味は闘う理由です。

では!

沢田さんにより、連れて来られた赤く塗装された大きなお屋敷。

中では最初に雲雀さんと言つ、沢田の知り合いらしき人と、幻想郷の吸血鬼が闘つていたらしく、雲雀という人は戦況は余り芳しく無いらしかったみたいですが。

私達の乱入により状況が一変。

「どうした、お前の力はそんなものか。

俺はまだ本気の一割も出して無いぞ。」

両手のグローブに橙色の炎を纏つた沢田さんは、その橙色の瞳で、吸血鬼の幼女を蹴り飛ばした壁を見据える。

向こうで見てている、メイドと蝙蝠の翼を生やし、ピンクのドレスを着た少女も、彼の想像を超える強さにより目を丸くしている。

私には、沢田さんが闘つている理由と、リボーンさんが言つていたファミリーというのは、何の事かさっぱりわかりませんが。

沢田さんの戦闘力は、私達が考へている以上に…………高い！

「どうだ東風谷、ツナの強さは。

お前は敵の力がわからない以上、味方の数は多いに越した事はないと言つたが。

今、ツナの闘い方を目の当たりにしてもまだ、同じ事が言えるか

？」

「…………」

私は隣に居る、リボーンの問いに心を惑ひてしまつ。

……沢田さんの強さの秘訣は、両手の炎を燈したグローブの推進力を使い、相手を翻弄する、非常にトリッキーな闘い方にある。

もし、そんな沢田さんと一緒に闘おうとしたら、彼のあの俊敏さに水を差さないよう事前に一人で、戦術を練らなければいけない。つまり、私達はその事前の打ち合わせをしていなく、私が迂闊に入ると沢田の足を引っ張つてしまつ事にも…………

「…………」

「まあ。

東風谷が何も言わねえのなら、俺はそれでも良いんだけどな。んじゃあ、俺は向こう行つて雲雀の怪我の様子を見て来るからもし、東風谷にまだ、ツナと一緒に闘う気があるのなら俺は止めはしねえが。」

すると黙りこく私を、リボーンさんはどう思つたのか、雲雀といつ少年の元へ行つてしまつ。

…………本当にこの二人は何者なんでしょう？

まだまだ沢田さんと吸血鬼の闘いが続くと思われるこの屋敷で、私はリボーンさん達に大きな疑問を抱える事となつた。

闘いは始まつたばかりであるところに……

十
十
十

「うふふふ。さすがは、お姉様が認めたボンゴレの人間。
私を楽しませてくれるだけね強さはあるみたいだね。」

羽を生やした吸血鬼の幼女は無邪気に笑いながら、俺の攻撃を何事も無かつたもの様に壁を抜け出して来る。

その笑いはあの白蘭の如く、どこか不気味だ。

「じゃあ、ウォーミングアップはいいまで、私も本気で行くから、あまり早くに壊れないでよね。」

斬。

すると幼女は再び炎の剣を鍊成すると、即ちもとまらぬ速さで素早く突撃。

ザンツ シュツ サツ

俺はそれをグローブで受け止め、突撃の後の連撃もグローブを使い受け流す。

そしてそこから、剣と拳の一進一退の攻防。

嵐属性らしき、赤い炎を纏つた剣は俺の首を刈り取る様に横へ薙ぎ払い。

俺は、身体を下に反らし、その薙ぎ払いを回避。剣はそのまま角度を変え、斜め上からの斬撃。

ビシッ！

斬撃を全てでは避けきれず、ベストに一線の剣筋。

薙ぎ払い、回避。

斬撃、グローブで弾く

斬撃、グローブ、斬撃、回避、斬撃。

同じ、パターンの攻撃が何度も繰り返され、俺と幼女の戦闘が激化。

カウンターのチャンスを上手く掴めず、自然に防御へと転換。

くつ……未来で闘つた、幻騎士みたいな流派を極めた剣士の剣撃であれば微妙な筋肉の動きを超直感で察知し当たる前に回避する事ができるが、この幼女みたく無垢に剣をめちゃくちゃに振るう様な奴は、筋肉の動きを読みにくく、グローブで剣を受け止めてしまうため反撃がやりにくい。

「闘いの途中に考え方？」

バンッ

「がつ……」

幼女の細い足が俺の腹を捉え、幼女とは思え無いかなりの力で蹴り飛ばされる。

「まだまだ」

「バシンッ！」

幼女は蹴り飛ばした俺を追撃する様に、地面を踏切、俺に剣での強烈なる一撃。

俺は一撃をグローブの推進力を使い激突を回避。しかしその一撃の剣圧が物凄かった為、打ち付けた地盤の破片が飛び散り、俺の身

体に幾つかが掠つてしまつ。

ザンツ

俺は一旦、幼女から距離を取り地面に着地。今の破片と先程の剣撃でズタボロになり鬱陶しくなつた高校の黒いベストをむしり捨て、シャツとネクタイだけになる。

「今の攻撃を避けるとは、私も少しビックリ。
うんうん、それでこそボンゴレだよ。」

幼女は相変わらず、コミカルに挑発的に俺を怒らせる様に喋る。

……舐めやがつて……

「んじゃあ、肉弾戦は飽きたから、次は弾幕ごっこね。
ボンゴレの人なら全部避けれるとよ。」

幼女は、喋り終わると右手で一枚の札を掴む。

……なるほど、アレが東風谷の言うスペルカード。

東風谷が言うには、カードに靈力をあらかじめ込め、弾幕を放つ、いわば、俺の世界で言つ、死ぬ気の炎を注入しつでも開匣可能で、開くと弾幕が飛び出る札型の匣兵器。

また、匣兵器との違いが幾つかあり、その中での大きな違いはその形とスペルカードと匣兵器を造るまでの過程の簡単さにある。

両兵器は制作されるまで、高度な技術と科学者が必要で、俺達だけでは到底、造れそうに無い代物だが、スペルカードは札に俺の場合は死ぬ気の炎を込めるだけで造れるとても簡素な物。

現に俺も、東風谷からまだ炎を込めていない空のカードを渡され、ある技を記録させとしてある。

とはいえたま、一枚しか持していない為、こじぞと/orいう場面で使える、あの大技しか記録してないが……

「禁忌 カゴメカゴメ」

すると、俺の回想が終わると同時に幼女のスペルカードが発動。

緑色の鮮やかな弾幕が四方八方から一直線に、俺の周りをじわりじわりと間隔を無くしながら迫つて来る。

まるで、未来にいる時、白蘭とのチョイスで霧の真六弔花、トリカブトが使つた方眼ウミヘビの様に。

ヤバいな、もしこのまま四方八方から弾幕が飛んで来ると、身動きがとれなくなり、最終的に囮まれて当たってしまう。それに、上に飛んで移動しようとしても、地面から天井までの間が小さい為、ピーキーなXグローブの炎だと、頭から天井に激突し、弾幕に当たる以上のダメージを受けてしまう。

「さあ、お兄さん早く、今居る場所から移動しなよ。
じゃないと私のスペルカードでドッカーンだよ？」

相変わらず、幼女は人を舐める様な口調で喋つてくる。

きっと幼女も、俺が避けれ無いのを知つてわざと、挑発して来るのだろう。

でも、俺がそんな事を考へてゐる間にも刻々と弾幕の幅が狭まり、身動きがとれなくなつてしまつ。

仕方がない。ここまで迫られるともつ考へてゐる暇は無いみたいだ。

「ナツツ、形態変化 カンピオ・フォルマ モード」

すると俺は右肩のナツツを左手に乗らせ、形態変化の掛け声をかける。

ナツツの額にある、帽子みたいな部分からボンゴレの大空の紋章が浮かび上がり、ナツツが左手の上でライオンの姿から徐々に変化。

弾幕が俺に当たるまでにこに入るか……

ザツ デンツ ダダダダダダツ！

弾幕と弾幕との間隔がついに無くなり、鮮やかな緑色の弾が我さきにと俺へ突撃。

「あははは、ボンゴレも呆氣ない。

お姉様を楽しませたのだから、もっと強いと思つたけどなんだ計

算違ひだつた……………「何が計算違ひだ?」……………「

ナツツが形態変化した、調和の能力を持つマントで当たる弾幕全てを石化させ、幼女の言葉を遮る。

東風谷の事だ。

今の俺の状況に驚き、田を丸くしているだらつと思いつつ、東風谷の方を向くと、案の定驚いた顔をしている。

「サンキュー、ナツツ。」

幼女の弾幕を全て石化させ、ナツツをリングの姿に戻してやる。

「……………お前がどんな強力なスペルカードを持っているかなんて、俺は知らない、それに興味も無い。」

しかし、これだけは言つてやる、俺はお前を楽しませる為に闘つている訳ぢやない、俺はボンゴレのボスとして、闘つっているんだ。

俺は幼女に宣言する様に強く放つた。
きっと、この幼女は雲雀、そして俺との勝負を、遊びだと感じているのだらう。

それは、こいつの剣撃を見ていても感じられる。なんせこいつの攻撃には邪な考えが見とれないからな。

でも、だからこそ俺はこの幼女と闘つ。

俺が未来で経験した、闘いの怖さとこいつのを教えさせる為に！

標的12 suna ragonne di lottare

、田嶋ひづる

・・・短いし、文才ないし投稿遅いの三拍子そろったcocoで
す。

あと、余談ですが、風邪が全快しました!!

あ～モンハンsecond G何処行つたんだ?

必要じやない時は見つかり、必要な時に限つて見つからぬ事、あ
りませんか?

さて、何が言いたかつたんだろう。

お前は、何に焦つてる!

あつ血親だ!

ではでは

標的13 ジ・対炎 X Burner (前書き)

すいません、テストと戦闘していたら間があきました、これからは毎日連続で投稿していきます。

✓Hフラン編が終わる予定は、今週です。

それでは！

標的13 ジ・対炎 X Burner ジ

「禁忌 クランベリー・ラッシュパー」

幼女が可愛く透きとおった声で、面白半分に発する言葉。
しかし俺には、そんな幼女の透きとおった声も、悪魔の囁きこじか、聞こえなかつた。

「さあ、どんどん撃つよ
ボンゴレのお兄さん」

迫つてくるのは、密度の濃い弾幕。

一つの場所にじっとしてると弾幕に囲まれ、逃げ道を塞がれてしまつので幾度か弾幕を避けつつ移動しなければならない。

俺は今、吸血鬼らしき少女と闘つている。

しかし、その幼女可愛い外見とは裏腹に、やたらと強いのだ。

人間離れした、類い稀な力の強さ、俊敏さ。
体術は、十年後の雲雀、白蘭に相応する強さ。それに、幼女による剣、弾幕の攻撃力がやたらと高い。

さつき、腹に彼女の足が食い込んだが、あれはほつきつて何回も喰らつたら命にかかる。

なり……

「やられの前に倒す！」

ボオウッ！

俺はグローブから炎を噴射し、弾幕の中を疾走するように通り抜け、一気に幼女と距離を詰め幼女に向かい、足で、一発の蹴り。

ガギンッ！

しかし、その蹴りは幼女の剣によつて阻まれる。

「くつ……」

俺は蹴りの状態からすぐ体勢を立て直すと、俺と幼女は浮かび上がり空中戦闘。

空中になると、剣と拳が本格的にぶつかり合へ。足場が無い分、攻撃方法にバリエーションが生まれているが、この幼女に果たしてそんな小細工で通用するだろうか？

「禁忌 恋の迷路！」

すると、フランドールの三枚のスペルカードが発動。

迷路という文字通り、円状に放つ弾幕には逃げ道があり、その円状に放たれた弾幕群に当たらない様、慎重ながらも素早く回避。

ちなみに、当然のことながら、弾幕が放たれる度にこの屋敷はどんどん荒んでいく。

それに、誰も俺達の闘いには参加しようとしない。

しかし、不思議だ。

雲雀丘、この幼女がひそんでいたものもわれたの
だわつか

雲雀と言えど、ボンガレ雲の守護者、戦闘センスはびか。

たかがこれ位の攻撃であそこでボロボロになる訳がない。

回想が終わると共に、
く、幼女との肉弾戦。
弾幕群を全て避けようとすると、息を休める暇無

「ほり、ボンゴレ

「一九四九年十二月廿九日鉛筆」

「...」

幼女の言葉と可愛らしい笑みと同時に右肩に一本の線が走り、鮮血が飛び散る。

俺は激痛により、声を上げたいのを抑え戦闘を続ける。やつとこ
こで声を上げると隙ができてしまい、勝負に負けてしまつ気がした
から。

といつても、俺の体力は限界を迎えるようとしている。

そもそも、去年の入学式以降、鈍りきつているこの身体で、幼女に挑もうといふ事自体が無謀なのだ。

妖怪の場合はさほど強くなく、楽であったが、妖怪との幼女と

では力の差が違い過ぎ。この、覚醒しているとは言い難い状況で勝つなど無理もいいところだ。

「さつかも言つたけど、闘いの最中に考え方は命取りだよ?」

ヒュンー

「ぐあつ……」

幼女は、俺に急接近すると身の丈と長さが合わないその剣で大きく薙ぎ払う。

「沢田さん……」

東風谷の絶叫と同時に俺は屋敷の地面に激突。薙ぎ払われる瞬間にグローブを噴射し回避しようとしたが、失敗。

だが、直撃を免れたのがせめてもの、不幸中の幸いであった。

「もつ

真面目にやつて貰わないと困るよ。これは闘い
あまり弱いとすぐ壊しちゃいそうになっちゃうからね」

地面に激突した俺をさげる様な手をして俺に喋る。
見ると幼女は既に剣からスペルカードに持ち替えており、これで決める気である。

「……なら、俺もスペルカードで応戦する」

俺は、ズボンのポケットから一枚のカードを取り出す。大空の炎

と同じ、薄く橙色がかかっているそのカードを

「禁忌 スター・ボウブレイク！」

そして、幼女の四枚めのカードが発動。

虹色に光る弾幕が広範囲に構成され、そのまま流星の如く向かってぐる。

「ナツツー！」

「ガウツー！」

俺は再びナツツを開匣。
マンテックロ・ディ・ボンゴレ・ガル界・フォルマ
一世のマントに形態変化し、カードと逆の手でマントを持ち、そ
の弾幕から身を守る。

ナツツ、この量の弾幕はキツイかも知れないが、耐えてくれ。

ナツツならできるはずだ。

「グウツ……」

すると幼女の怒涛の攻撃が終わり、ナツツは少しボロボロになりながらも、耐えてくれる。

「サンキュー、ナツツ

もう、終わらせる

俺は、ナツツに感謝し、リングに戻すと左手を幼女とは逆方向に向け、炎を逆噴射する。

俺のスペルカードは、幼女みたくすぐに発動できる代物では無く、撃つ時の衝撃に耐えれるよう。支えを作らなければいけない。

「ツナめ

ついにスペルカードを使おうとしてやがるな

上手く狙えよ」

すると、リボーンが微かに咳く。

「お兄さん、スペルカードを使おうとしてるの？
でもそうは、いかないよ！」

幼女は、リボーンのことばを聞き、剣を持ち俺へ突撃。

普通なら、余計な事をと怒るが。
今の状況でのリボーンのことばは、有り難い。

「行くぞ、俺のスペルカード

‘対炎 X Burner’ ! !

「！？」

掛け声と同時に右手に構えていたグローブから、炎が幼女に向け

て噴射。

わざわざ、左手で炎を逆に噴射していたのは右手の噴射の支えを作る為、地面で撃つといつのも、当然足場が良い場所で撃ちたかったから。

つまり、横の薙ぎ払い攻撃はわざと喰らった。

……それに、こちから突撃してくれたおかげで、狙いを付ける手間も省けた。

「うう……」

幼女は、対炎 X Burner、を剣で防いでいるが、それがいつまでもつかは時間の問題。

バギッ！

「うああああ！」

最終的に、Burnerに飲み込まれ、ボロボロになつて時間に落下。

「どうだ？

俺のスペルカードは、溜めた炎はかなりの量だ、立ち上がる」とも難しいはずだ

俺は落ちた幼女に近づき、言葉をかける

「確かに、ボンゴレのお兄さんのスペルカード、威力は圧倒的だつたよ

……生で喰らついたら、私でも、危なかつたくらいだし

「…?」

俺は幼女の言葉に違和感を覚える。

幼女は何を言つてゐる、俺は確かにX Burnerを当てたはず、生とはじつこいつ事だ?

俺が疑問に思つてゐると、背後から東風谷の叫び声が聞こえる。

「沢田さんー後ろです!!」

標的13 ジ・対炎 X Burner ジ（後書き）

・・・・・ ものすごい駄文を書いた気がするのは、僕だけ。

ぶつちやけ、結構急ぎました。

内容がないがしろにならぬようにしたのですが・・・

次の話は、きっと大丈夫です、何が大丈夫かと言つと、クオリティ
や文法的にも。

なんせ、後半の方を最初に書きましたからね。

長話もこれくらいで、次回もよろしくお願ひします。

標的14 ～蛙の子は蛙～（前書き）

バソフラン編の一冊の見どりです、今回は投稿日が一日遅れた代わりに、上手く仕上げました。

依然、今週でバソフラン編は終了ですー

標的14 ～蛙の子は蛙～

「沢田さん…後ろです…！」

俺は、東風谷の叫びに応じ意味がわからぬまま、ヒツセにその場でしゃがみ込む。

「…ツ…！」

しゃがんだ俺の頭上を通つたものに、俺は不意をつかれた。通つたのは剣。

それも、幼女が持つていたあの赤い剣。

「まだまだ」

まだ幼女の攻撃は止まらない。

俺の前に、ボロボロになつてゐる幼女とは違つ、別の幼女が俺の頭上から接近。

俺はそれを、激突間一髪の差で身体を転がし回避。すぐに受け身をとつて、その一人の幼女に向かい、身構える。

「惜しかつたね、ボンコレのお兄さん
まだ言つてなかつたけど実は私、四人に分身できるの」
「…………なつ」

「 「 「 「 」」んな風に……」「」「

田の前にボロボロになつた幼女を含め、現れた四人の幼女に俺は驚愕する。

その光景は、まさに四人の悪魔による地獄絵図

一人、一人が俺の事を笑つていてそれは少し……いや、かなり不気味だ。

でも、こいつらは幻覚か？

ミキサーの如く、頭の中の色々な考えがグルグルと混ざり合い、俺は混乱する。

……俺を見て不敵に笑う四人の悪魔。

……そして、何より痛かったのは、対炎 X Burner を外した事。

一応、当てはしたが、幼女いわく、それは分身。本体に当たなければ、何のダメージも無いらしい、つまり俺の、対炎 X Burner は空撃ち。

結果的に戦況は変わらない、いやむしろ悪くなつたくらいだ。

「 「 「 「 んじや、行くよボンゴレ
禁忌 フォーオブアカインド」「」「

ザンツー！

四人の幼女は一斉に地面を蹴り、俺へ猛襲。

俺は、グローブを使い上へ飛びその猛襲を回避。

「 「 「えいっ！」」

そして、悪魔達による、弾幕四重奏。

グローブの推進力で幼女達の周りをグルグル周り、その四重奏を回避。

……これだけの弾幕、見ている東風谷達は大丈夫であろうか、それにこの戦況をどうやってひっくり返すか……

「ツナ、ボケッとするな

後ろだ！」

リボーンの言葉により我を取り戻し、背後を見るなり、現れたのは分身の一人と思われる幼女であった。

幼女は、笑いを浮かべると俺の背中にひと蹴り。

「があつ」

背中に亀裂が入りそうな程の強烈の一撃を喰らい、俺は声を上げる。そう、あの弾幕は四重奏なんかではなく、三重奏だったのだ、残りの一人で確実にダメージを与える為の罠。

「まだだよ」

すると、目の前から二人目の幼女が現れ、俺へタックル。

「ぐつあ……」

地面にたたき付けられ、地面の埃と土の匂いが全身を激しい痛み

と共に駆け巡る。

「まだだ……
まだやれる」

俺は身体に鞭を入れ、地面から立ち上がる。

だが……

「遅いよ?」

待っていたのは何人目かは知らないが、幼女の蹴り。

幼女の蹴りは顔面に命中し、受け身が取れず、そんな俺に容赦ない暴力、弾幕の四重奏。

「アハハハはつ！」

屋敷に響くのは、幼女の笑い声、それだけであった。

「ハア……ハア……ハア……」

屋敷に築かれた瓦礫山の中。

俺は何とか、あの攻撃に耐えたものの幼女の弾幕による容赦ない攻撃に、視界が掠れ、朦朧とする意識の中で、やつとの事で仰向け

に倒れている状態だ。

「よく耐えたねって、いいたいけど、その様子じや、もう満身創痍だね
ボンバーのお兄さん

やつぱりお姉様を倒したといつのは嘘だつたのかな？」

幼女は相変わらず、舐めた目と口調をしている。

……完璧に負けた。

俺は瓦礫の中、朦朧とする意識の中、ふと思つ。やはり、X Burnerを外したのは痛かった、でもそれ以前に力の差が歴然だつた。

相手は幻想郷の吸血鬼。

何年、生きていたかは知らないがきっと、未来に飛ばされた俺より、ずっとはあるかに経験が豊富。

結局のところ、俺は幼女に、遊びと闘いの違いを教えると明言したが、逆に幼女に教えられてしまった。

……闘いを舐めていたのは、俺の方であつたのだ。

ろくに三年前の状態の身体で闘い抜けると思い込み、気持ちだけ空回りして、そんな甘つたるい覚悟で勝てるはずなどあるはずも無かつたのだ。

全身に走る痛み、今更ながら後悔の念が湧く。

ああ、…………俺はやつぱりダメシナだ。

高校生になり、多少はダメシナも改善していると思つたけど、結局何も変わつてはいなかつた。

毎日、リボーンと勉強の特訓はした。

…………でも、心は同じだつた。

ああ、全身が痛い。

…………この感覚は、死ぬ氣が解けた時と同じ感覚だ。

案の定、両手を見るとグローブがミント状の手袋の姿に戻つている。

きつと俺は幼女から攻撃を受けすぎ、白蘭の時と同じで鬪える精神状態じや無くなつてしまつてしまつているのだ。

もう、いいだらう。

結局のところ京子ちゃんに何も言え無かつたが、それも仕方がないか

…………その時だつた。

「随分とボロボロだな
ボンゴレ^{デーチモ}×世」

「…？」

俺の右手のボンゴレリングが突然発光し男の人の穏やかな声が聞こえたのは。

それに、場所は瓦礫の中では無く、黒い空間の中、ぽつんと膝を地面につけて座っている。

また、俺の目の前に居るのは……

「ボンゴレ…………エ世？」
ブリーフ

そう、俺の目の前に居るのは、黒い無地のマントに、全身縦の線が入ったスーツ、金髪のその髪の脳天と、両手のグローブから、死ぬ気の炎を出している男は、ボンゴレの創始者で俺の先祖。歴代ボンゴレ、最強の男と言われたボンゴレエ世だった。

エ世は俺の視線に気がつくと、俺に微笑み返してくれる。

…………話を元に戻すが。

きつといには幻想郷に来た時に見た、あのボンゴレの夢といふの中。

…………でも、俺はどうしてここへ？

「X世

その傷の度合いからすると、お前、紅魔館の吸血鬼の幼女と、勝ち目がないと知りながらも、闘っているんだろう？

随分とまた相変わらず、無茶無謀な事をしているな

「…………え？」

俺はエ世の言葉に、目を丸くする。

吸血鬼…………なんで、エ世が俺が闘っている相手の事を？

「ははっ、よくわかつたな、という顔をしてるなエ世
そりや当然だ、だつてお前は俺と似ているんだから

幻想郷の里で暴れていた、妖怪を退治したと思ったら屋敷に連れて来られ、訳がわからないまま、吸血鬼との死闘、
そして、その闘いにより絶体絶命

俺が闘つた吸血鬼はX世よりプライドが高貴で気高く、ボンゴレ
の雲の守護者全にしたい程だったが
全く、蛙の子は蛙とは昔の人もよく言つたものだ」

「…………はあ」

いきなり、饒舌になり喋り始めるエ世。
彼の言つている事はあまり理解できないがその顔はどこか、懐かしげだ。

「…………むつと、すまない

今日はこんな昔話をしに来たのでは無かつたな、ついでつかり話
がそれてしまつた

エ世は俺の視線に気づいたのか、ゴホンと咳ばらいをして、俺に語る。

「なあ、X世

单刀直入に聞くが、お前は本当のどいる、何故あの吸血鬼と闘つ
ているんだ?」

「…………はあ?」

「…………別に、無いならぬでそれでいい

それは、X世自身の問題で俺の出る幕は無いからな
…………でも、ボンゴレの座を継いだお前なら、決して無益な闘
いはしないはずだ

それを踏まえ、俺はその闘いの理由を聞きたい

「…………

俺は、一世の言葉に身体が動かなくなってしまう。

闘いの理由。それを聞かれると、あの、幼女に闘いと遊びの違い
を教えるから」と答えたくなつたが、それこそ、俺の思い込んでい
た幻想だと思い、口には出せ……いや出せなかつた。

「…………

「…………

二人の間に空白の時間が訪れ、俺達を包んでいく。

別に答えを模索している訳ではない。

その理由をざわざわと口で云々ようかと、迷つてゐるのだ。

「…………ふふつ、あははははは

「？」

エ世が俺を見て何を思ったのか愉快そうに笑う。

「何がおかしいのです?」

「…………ははははは

いや、やつぱりなと思つてな
やはりお前は、どこまでも俺に似ているボンゴレ×世

お前の闘いの理由はわからないが、そこまで大それた事では無い
はずだ

例えば、早く闘いを終えて家に帰りたい、誰かと一緒に何かを食べに行きたいとか、周りの人から見たら、馬鹿げている」と、当た
り前の事

それに、俺とお前は闘つ意義を見出だし、命を懸けて、ここまで
きた

そうだろう、X世?」

「…………

エ世の言葉を聞いたその瞬間、俺は水に打たれた様に、目が覚め
た。

…………そうだ、俺は闘いの理由を教えるだなんて、大それ
た事なんて考えてもいなかつたんだ。

それはただのカツコつけで、表面的な理由。
俺の闘う理由なんて、もう決まっている。

「…………その表情
何かを掴んだ見たいだな×世」

「うん

あなたのおかげで、色々とはつきりしました
もうこれで、大丈夫です」

俺は立ち上がり、工世へお礼を言つ。
改めて、またこの人の偉大さを知った気がする。

「…………そうか、なら紅魔館の吸血鬼とまた闘つて来い

別に玉碎覚悟で死に行けとは言つてはいない
お前は既に、俺が到達した、零地点突破、を極めているんだ
なら…………きっと勝てる、なんせ俺が勝てたのだから

じゃあな、×世今度はお前が一矢報いる番だ」

工世はポンッと俺の右肩に手を置くと、幽靈みたくフワッとあの
黒い空間と共に消えてしまつ。

そして、今は再びボロボロの身体で瓦礫の中。

しかし、この状況とは対極に、俺の気持ちは軽く、まるで傷ついた所が癒えた様に清々しい。

あの状況下、俺は工世に会えて本当に幸運だと思つ。

「…………なあ、吸血鬼…………」

俺は、その場の瓦礫を退け、しゃがみ込んだまま、田の前の幼女に向かって言葉を続ける。

「ん?

「どうしたのボンゴレのお兄さん?」

「…………お前は、俺の事を満身創痍と言つたな」

「それがどうしたの?」

「ふざけるな

俺は、お前とのたかが遊びで命を落とす事なんて、阿呆な事は、できないんだ

「ふう~ん、それで

じゃあ、もし、命を落としたらボンゴレのお兄さんをさばくわ~.

幽霊にでもなつて私を呪いに来る?」

幼女はニヤッと笑い、俺を挑発する。

「呪いに行く?

いいや、そんな事は無いわ

もし万が一、俺が命を落とす様な事があれば……

その時こや

死んでも、死に切れねえ！…」

この言葉を放つと同時に、俺の脳天とグローブに再び火が燃る。

俺はここに勝つて、東風谷達と一緒に団子を食べる…。

この瞬間。

俺に闘い理由、いや初めてこの幼女と闘う、覚悟が誕生した。

標的14 ～蛙の子は蛙～（後書き）

・・・はあテストが色々な意味で終了し、やりたい放題のcoco aです。

これから、そこそこ調子に乗って、いろんな事に挑戦していきたいです。

新連載とか。

つて事でまた明日、会えたら、
でわでわ！

標的15 ～形勢逆転～（前書き）

・・・やばい、です。

なんか今週で終わらなくなそうな雰囲気出します、結構ギリギリですね。

残りの原稿も切れてきそうなので・・・

でも、これ以上文のクオリティも下げる訳もいかないので・・まあ、善処します。

標的15 ～形勢逆転～

「ふふつ、何を言つたかと思えば
残念だけどボンゴレ
あなたは既にダメージを負い過ぎている
幾ら頑張つても私には勝てないよ？」

「さあ、それはどうかな
試して見るか、俺がお前に負けるか勝つか？」

俺は人差し指をヒョイヒョイと動かし幼女に向かつて挑発する。

「じゃあやつてみなよ

お兄さんの本当の実力で私にどこままでついていけるか

「ああ、やつてやるや」

「！？」

ザツー！

俺は、グローブの推進力を使い、最初と同じく少女の背後に回り込んで、背中にチヨップ。

幼女は、俺の動きが余りにも早過ぎた為、防衛が出来ず。俺は彼女の背中を完璧に捉える。

「くつ……」

幼女は攻撃の衝撃に耐えられず、そのまま吹っ飛び。

勢いそのままに、俺はグローブから炎を逆噴射させ、吹っ飛ばした幼女に追いついて、追撃の一 手。

ガシンッ！

しかし今度は、空中で体勢を戻した幼女の剣に阻まれ、戦闘はそのまま、空中戦に。

空中での、剣と拳での激しい応酬。

俺は、最後の力を振り絞り、激闘を続ける。

……やっぱりな、俺の目的は幼女に闘いの怖さを教えるはずだったが、ボンゴレの夢がきっかけで、いつの間にか目的が東風谷達と団子を食べる為にすり替わっている。

でも、何故だろ。

「うちの方がイメージしやすいからか、さつきより死ぬ気の炎の純度…………覚悟がより一層強くなっている。

こういう事が起こってしまうと、俺って高校生になつても、やっぱダメツナのままなんだつてつくづく、痛感させられる。

「闘いの途中にまた、考え方？」

幼女の赤い牙は、俺の顔面の数ミリ程離れた場所を斬る。

瓦礫が、色々な場所に散らばっている屋敷の一室で、俺の拳が外れるごとに幼女の剣撃、幼女の剣撃が外れると俺のパンチが……と剣と拳が交錯し、息が詰まる闘い。

……また、さつきのダメツナの話に戻るが
俺は逆に、高校生…………いや、今この瞬間まで、ダメツナで居てよかつたと思う。

だつて、そっちの方が、今回みたいにみんなで人里の団子を笑い、話し合いながら食べるという

ほんの小さな、普通の人から見たら、馬鹿げてさえ映る事に……
こんなにも、一生懸命になる事ができるから。

「さすが、ボンゴレの人

私の動きについてこれるなんて、人間にしては上出来

その底力…………あなどれないね」

「…………さあな、俺はそんな事は知らない

それと、ボンゴレのという呼び方、いい加減に止めてくれ

俺には、沢田綱吉という名前がある」

俺は剣の斬撃を右手のグローブの甲で防ぎながら、幼女の問いに答えてやると、フリーの状態の左拳を一回、幼女の腹辺りチヨップ。軽く、幼女の動きが鈍ったところを駄目押しというで、かなりの死ぬ気の炎を込めた拳で手刀を作り、横に大きく薙ぎ払う。

「やべ、なら沢田さんもお前って呼ぶの止めて」

しかしフランドールは、それを身体を外に大きく反らして回避。

「私にもちゃんと、フランドール・スカーレットって、名前があるから」

そして、フランドールは身体を反らした衝撃を利用し、空中で一回転。

「わよひなー、沢田綱吉」

勢いそのままに、フランドールのその赤い刃が、俺の脳天にめがけ牙を剥ぐ。

今までの俺なら慌てるかも知れないが、今の俺はそんな事はしない。

……フランドール。

それに、俺は逆にこの時をずっと、ずっと待っていたんだ！

……

ガギンッ！

金属を叩く様な、鈍い音。

田の前には、俺との闘いで初めて驚愕の色に染まるフランドール。

「その慢心が裏田に出たな
」

俺がやつたのはは勝つた気満々のフランドールの赤い牙を、右手の手の平と左手の手の甲で四角刑をつくり、白羽取り。

「うつ、うそ…………私の剣が…………とめられるなんて、この一撃には有りつけの力を……」

フランドールは、俺に剣を白羽取りされたのに動搖したのか、顔色が一気に変わる。だろうな、フランドールみたく、これだけ余裕をかましていると、もしもの時の対応に戸惑い…………いや焦ってしまう。

それに、自分の渾身の牙が、まさか俺のグローブで防がれるだなんて、夢にも思わなかつたのだろう。

まあ、俺も、成功するか微妙だつたが、上手くできたな。

俺は一度、幻術で太刀筋が幾田にも分裂する剣を（イカサマながらも）止めた事があるんだ。

攻撃する場所を一点に絞られた剣なんて、そんなの赤子の手を捻るくらい簡単なんだ。

「それに、驚くのはまだ早い」「

「…?」

キヨアアアア！

すると、俺の脳天から出る炎がノッキングする様な不規則な炎に変化し、フランドールの剣を白羽取りをした俺のグローブの、手の甲にあるボンゴレリングの紋章が次第に『X』へと変わつてくる。

当然と言えば当然だが、俺はただフランドールの剣を止める為だけに白羽取りをした訳では無い。

俺は、剣が脳天に向かつてくる時、未来で経験した、フランドールと同じく剣を白羽取りした幻術を使う剣士との戦闘を思い出したからこそ、俺は、白刃取りの形一つを見てみても、あえて手の形を右手の手の平と左手の手の甲を相手に向け、四角形をつくる独特の形にしたんだ。

相手の死ぬ気の炎を吸収し、自分の炎に変換する技。

一世の言葉で思いついた、死ぬ気の零地点突破に総称される技の内の一つ、‘零地点突破 改 白刃取り’をするために。

……………でも、この技を成功させるには満たさなければならなかつた条件があつた。

それは、幼女に剣を斜めでも横からでも無く縦に、それも彼女に気づかれるようにやる必要があつたのだ。

だから、俺はあの時、彼女に剣筋を白刃取りができる様な形に誘導したのだ。

こいつと会話した後、俺はわざと身体を大きく使って隙を作り、それを彼女が捉えてくれたのだ。

フランドールなら決して見逃さない、俺にとつては致命傷となる小さな隙を！

「行くぞ、フランドール。

受けて見ろ、これが俺の本当の力

零地点突破…………改だ！！！」

ギュオアア！

そしてついに、右手と左手の間にできた空間が、フランドールの死ぬ気の炎を、剣を伝つて吸收する。

さあ、フランドール。

お前は見た所吸血鬼、悪く言えば大量の死ぬ気の炎の源、生命エネルギーを持つ化物。

この、零地点突破 改、からどう足搔く？

「うつ…………くつ…………！」

フランドールは、炎を吸い込まれる事を不快と思ったのか、必死に剣をグローブから逃れさせようと動かす。

だが、絶対に逃げさせるものか。

「くつ……くつ……あつ……あ！」

零地点突破改が始まつて、約30秒後。

彼女はよつやく、俺の零地点突破改から逃れる。

「ずつ、ずるいね沢田綱吉

人の力を……吸い取つて……自分の物にするだなんて」

フランドールは、剣を構えると、ヒヒヒヒヒヒ息つきをしながら喋る。

俺に死ぬ氣の炎を吸われ疲れているのだろう。

俺も、身体に収まるギリギリのところまで吸つたはずだ。

やつとこれで……お前と対等、いやそれ以上に闘える。

「黙らないで……なんかいつたらどう、沢田綱吉？」

「…………さあな、お前は俺の、零地点突破改、をイカサマと言つたが、俺はそうは思わない」

俺は両手に燈す、炎の量を多くする。

その量は通常の約二倍。

しかし、ボンゴレリングは前代未聞な炎圧の死ぬ気の炎にも耐えてくれる。

「だつて、俺は四人に分裂するお前の方がずること思つからだ！」

「…………くつ」

グローブと剣がまた、再び交差しそれらが、空中で今一度乱舞。

しかしフランドールは俺の攻撃を防ぐのが、精一杯りしく先程みたく悪魔四人の地獄絵図を展開しようとはしない。

それなら、いける。

「…………遅い」

「！？」

俺はフランドールの剣撃を回避し、一気にこいつの懷に潜り込み、右手で強力なるアッパー。

「…………くつ」

フランドールは、そのまま天井にのめり込もうとするが、神懸かつた運動神経で、天井で受け身をとり、そのまま天井を蹴つて、勢いをつけて俺に仕返しの一撃を仕掛けようとする。

まずい

このまま避け無いとなると、いくら炎を回復したとしても、フランドールのハンパない攻撃力によつて粉碎させられそうだ、それに例え避けたとしても、どうせ次の一手が来る。

「ナツツ、形態変化攻撃モード」

カンビオフォルマモード・アタッコ

俺は今一度ナツツを開匣させ、彼女の屈強なる一撃に対抗する為、ナツツを左手に乗せ、形態変化させる。

「攻撃モード？」

沢田さんのライオンちゃんはあのマント以外にも変化するのですか？」

フランドールの迎撃に備える中、ふと、東風谷とリボーンの話し声が俺の耳に入る。

「そうだぞ、東風谷

詳しい事はまた今度説明するが、ツナの匣兵器ナツツは、初代ボンコレファミリーのボス、ボンコレエ世エセが使った武器に形態変化できる様になっているんだ

「初代ボンコレボスが使った武器に……形態変化ですか？」

「ああ、いっちも後で説明するが

ツナの相棒、ナツツは最初の方で使った、モードディフェンザ防衛モードの一^一世のマント（マンテツロ ディ ボンコレブリーモ）だけで無く、モード攻撃モードの二^二世のガントレット（ミナーテ ディ ボンコレブリーモ）の二つの別々の武器になる事ができるんだ

そして、その攻撃モード、二^二世のガントレット（ミナーテ ディ ボンコレブリーモ）は普通のガントレットでは無く、その昔、初代ボンコレボスが拳に全身全霊の死ぬ気の炎を込め、究極の一撃を放った時に変化したグローブの形状の事

「では、あの拳は沢田さんの唯一のスペルカード、対炎 X Bu
「rene」、と同等の威力を持つ、沢田さんの究極の一撃を秘めた拳
つて事ですか？」

「まあ、そんなところだ」

ガキンッ！

リボーンの解説の区切りがつくと同時に、フランドールの剣と俺
の一エ世のガントレット（ミナーテ ディ ボンゴレブリーモ）が
激突。

「「はあああつ…！」

それらが凄まじい勢いで激突。

俺もフランドールに負けぬよう、腹の底から大声を出し、ガント
レットに多大な力を込める。

「「ああああつ…！」

そのままお互いの意地と本気がぶつかつたままの硬直状態。

俺達の周りの地面や天井は、二つの武器の激突に耐えられず、少
なからず落下。

崩れた天井から伺えるのは地平線に沈みかけた、真っ赤な夕日。
どうやら、こいつと闘っている内にかれこれ3時間もたつたらし
い。

ギイイイイイイ！

バギン！

「？」

金属が割れる鈍い音…………音から予測すると、どちらかの武器が破壊される。

「ハサウエイ」

…………しかし、どちらかの武器が壊れたのかは、すぐに判つた、甲高い悲鳴が屋敷に響き、激突の末破れたフランドルが地面に物凄い勢いで落下する。

ぐつ
なんで、ありえない
私が人間なんかに……力で負けるなんて
ありえない」

すると、フランドールは一世のガントレット（ミナーテ・ディボンゴレプリーム）に破れ、身体のいたる所に傷を負いつつ、ブツブツと独り言を言いながらも、ゆっくりとした動作で立ち上がる。よく立ち上がったと言いたいところだが、彼女の表情に今までの余裕は無く、服はボロボロ。

この闘いの意識を、フランドルは遊びから死闘にへと、やつと切り替えたのだろう。

「でも、もう遊びは終わりだよ……
私も本気を出すからね……」

フランドールはガクガクとその短い足を奮わせて答える。

きっと、フランドールの言つてる事はハッタリだ。

だって、こいつにはもう、俺の、零地点突破 改、により、死ぬ氣の炎を大量に吸収したし、逆に俺は死ぬ氣の炎を全快させれた。

どうやらうが、俺に勝てるなんて……無理だ。

標的15 ～形勢逆転～（後書き）

・・・いや～テストが終わり、その答案が帰ってきて一難去つてまた一難：

やめて、僕のlifeはもう零よ！

・・・あと、どうしても小説の書き方がピンときません。

アドバイスよろしくです、でわでわ

標的16 ～死闘の幕引き～（前書き）

…ああ、なにもかも燃え尽きた。

返された答案で鬱になり現実逃避をしてたら、投稿日がへんな事になりました。

それでは…

標的16 ～死闘の幕引き～

+

+

+

形勢逆転。

……今、この状況を表わすのに、最も適している言葉。

……それは、もう圧巻のひと言でしか無く、そこに居る（リボーンさん、雲雀という人を除く）全ての人間が沢田さんの底力に圧倒されていた。

—死んでも死にきれねえ——

……沢田さんが放った、言葉。

私は雷に打たれた様に、この言葉にジンとさせられる。

その言葉を放つた後、沢田さんはあの幼女の剣を白刃取りをして、
“零地點突破改”<sup>ミナーテ・ディ・ボンゴ
レ・ブリーモ</sup>という技を決め、リボーンさん曰く「一世のガントレットによる究極の一撃で、戦局を一気にひっくり返した。

……リボーンさんは、これで当然という顔をしているが、私にはさっぱりと理解ができなかつた。

一体沢田さんをあそこまで駆り立てる理由は一体何なのだろう。そして、人里の時にも感じたけど幻想郷に来るまでは果たしてどんな生活をしていたのだろう。

いつも眉間にシワを寄せ、祈る様に拳を振るう、沢田綱吉さんに対する私の興味と疑問は更に膨れ上がった。

この闘いが終わつたら、沢田さん達と、それこそ団子でも頬張りながらゆつくりと沢田さん達の事、そして私達のことについての話を、していきたい……と強く思った。

＋ ＋ ＋

「禁弾 そしてだれもいなくなるのか」

フランドールとの激闘。

俺、沢田綱吉の心の中ではもう終盤戦をしているつもりだ。
…………だが、その終盤戦が、俺にとつて一番の正念場だと思う。

向かつてくるのは、密度が濃い弾幕。

その弾幕は今までの比では無く、‘カゴメカゴメ’の様に、四方からやつてくるタイプのもの。

零地点突破改で流れは一気に傾いていたが……俺は一つ、大事な事を忘れていた。

零地点突破改は、死ぬ気の炎が回復できても、精神力は回復できないという事

つまり、力が回復しても、密度の濃い弾幕に集中できる程の集中力は無い事

それに、いくら弾幕を避けてもフランドールの姿を超直感でさえも感じれず、再び弾幕を避けるだけの、一方的な猛襲。

「…………つぐ」

「どう?これが私の本気。

それと私の姿が見えなくて、まともに反撃できないまま、散つて

いく気分は？」

姿を消したフランドールの声が怖い程、響いて聞こえる

「ボンゴレ、あなたの敗因はただ一つ
私を本気に、つまり遊びから闘いにへと意識を切り替えさせた事
いくら形勢が逆転しようと、結局は私の勝ち
残念、詰めが甘かつたのはそっちの方だよボンゴレー！」

「…………フランドール、言つた筈だ、俺の名前は沢田綱吉
ボンゴレなんて名前じゃない」

しかし俺は決して、その響く悪魔の声や弾幕達に恐れなかつた
俺には闘うべき覚悟があるし、ボンゴレエ世から貢つた助言もあ
る。

第一、

「俺の覚悟はこんなものじやない」

弾幕達の第一波を回避すると、また密度の濃い周りから俺を囲む
タイプの弾幕が構成され俺に迫つてくる

俺はまず四方向の弾幕を三方向にする為、グローブから炎を噴射
し、その推進力を利用し忍者の如く側面の壁に垂直立ち。そして脳
天から再び、ノッキングする様に大空の炎を噴射する。

「無駄だよ沢田綱吉、その炎が不規則に噴出する、‘零地点突破’
という技は見切つた

その技は相手の力を吸収する強力な技だけれども、それは前方か
ら迫るものにしか効果は無く弾幕を四方向から三方向に減らしたと
しても、それらを一回で吸収するのはとても難しいはず」

「役にたつかどうか、そんのは関係ない
俺は俺自信の覚悟と零地点突破を貫く

……それだけだ

フランドールに呴くと同時に、弾幕の第一波が三方向から、俺へと向かつて猛襲。

…………あの技を成功させる為、周りの弾幕達の存在に駆られつつも、‘零地点突破’を成功させる為、意識を集中させる。

ナツツを形態変化させエ世^{カンビオ・フォルム}のマント^{マンテツロ・ディ・ボンゴレ・ブリーモ}で弾幕を防ぐ。

…………リスクを考えず、確実に防御するのなら、やはりナツツの力を借りた方が良いかも知れない

でも、それではきっと意味がない。

これはあくまでも俺の推測だが、フランドールはやつと、闘いと遊びの違いをわかつてくれた。

今こそ、フランドールの姿は見えないけど、俺が‘零地点突破’改’を決めた後、明らかにお前の態度が一変していた。

その昔、エ世も経験したといつ、お互いが本気を出し意地とプライドを懸け、まるで綱渡りをするかの様な精神を擦り減らす命の駆け引き

ビギッ!!

第一波が大蛇の如く、俺を大きく飲み込む

「沢田さん!」

本日何回目だろうか俺を呼ぶ東風谷の叫び声……

「アハハハはつ

やつぱり、零地点突破、じゃ防御できなかつたね
自分の力を過信した結果、自らの策に自惚れて壊れるなんて呆氣
ない！

ふふ

ふふふつ、ボンゴレも壊した事だし、次は小さい
赤ん坊とその縁の巫女のお姉さんの番
どつちが先に壊れたい？」

「まだだぞ、吸血鬼

お前の考えは、はやとちりだ
ツナはまだ壊れてなんかいな

いぞ」

リボーンのフランドールに臆する事のない、独特の話し声

「ええつ！？

何を言つてるの赤ん坊、あなた達も見たでしょ、弾幕に飲み込まれるボンゴレを……」

「残念だがフランドール、俺は見て通り、まだ壊れちゃいない」

「！？

俺は、まだ壁に垂直立ちした状態で姿が見えない、フランドールの話の出鼻をくじく様に語りかける。

「えつ…………でも、どうして？

ボンゴレは、あの弾幕に…………！」

フランドールの言葉はそこで止まる。それと、驚いているのは彼女だけではなかつた。俺、リボーン、雲雀を除く全員がその光景に目を奪われていた。

……その光景を言葉で表すと、氷の糸で構成された蜘蛛の巣、俺に三方向から迫る密度の濃い弾幕はその場で凍結し、氷が弾幕から弾幕を伝導し屋敷の壁に到達。蜘蛛の巣の様に張り巡らしている。

「聞いて無い……弾幕が凍るなんて聞いてない！！

でも……何故？

ボンゴレの、零地点突破、は炎を吸収するだけの技じゃ無いの！？
なのに……一体なんで弾幕が凍るの！？」

きっと、零地点突破 改 の状態で既に精神が参っていたのだろう。

フランドールは、唐突に姿を現すと、この自分の弾幕が凍つていることにパニックになる。

「フランドール、お前は何を勘違いしている？

俺は、零地点突破 の構えは見せたが、一言も、零地点突破 改をするとは言つてないぞ」

「！？」

俺の言葉にフランドールの目が大きく見開く。

「確かに、ツナの言う通りだ

‘零地点突破’を勝手に解釈し、勝った気になつていたのは吸血鬼の方だったな

「…………あの…………リボーンさん？

さつきから一人で何を納得しているのです、私にはさっぱりと理解が……」

どうやら、理解できないのはフランドールだけで無いらしく、東風谷の頭にも？マークが浮かんでいる。

「簡単な事だぞ、東風谷

確かにツナは、‘零地点突破’の構えはしたが、‘改’をすると
は一言も言つて無いんだ

そもそも零地点突破とは、本名を‘死ぬ氣の零地点突破’と言い、
三つの技の総称なんだ

その三つの内、二つは、ツナが編み出したもので、自らを死ぬ氣
とは真逆の状態して敵の炎を中和する‘零地点突破’、さつきツナ
が吸血鬼の剣を白刃取りをした時に使つた‘零地点突破 改’、

そして今回、ツナが使つた……」

「‘零地点突破 初代エディション’、ボンゴレエ世が編み出した
死ぬ氣の炎の逆、つまり、冷氣で敵を凍らせる技
それに、その冷氣は死ぬ氣の炎と同じ超圧縮エネルギーだから、
溶解する為には死ぬ氣の炎で無いといけない
……まさか、またこの憎らしい技を見れるとはね」

近くで俺達の闘いを傍観していた、蝙蝠の様な羽を生やし、ピン
クのドレスを着た少女が、リボーンの零地点突破の解説を妨害し、
自己流で続ける。

…………こいつ、零地点突破 初代エディションを、憎らしいと
いう技と言つていた事から

…………恐らくその昔、エ世と闘つた吸血鬼といつのはこの少女
の事であろう。

「さあ、そろそろこの死闘も終わりにしそうか、フランダール……

……」

弾幕が凍つてゐる事に驚いてゐるフランドールを尻目に、俺は左手の炎を、再び逆噴射。

さつき、コンタクトが無いと撃てないと言つたが、そんな事はなかつたみたいだ。

未来で何回も撃つた技、身体が、三年経つた今でも、忘れていたかつたみたいだ

「行くぞ、フランドール、これが俺の覚悟の炎
全力でお前に解き放つ」

「そう、なら……撃てるものなら撃つてみなよ沢田綱吉
私にはまだスペルカードがある、そんなのまた弾き返してあげる
から……」「――？」

フランドールはこの期に及んでも、まだ対抗するらしく、ボロボロの身体で再び、スペルカードを構えるが……

「――？」

…………零地點突破 初代エディション、の弾幕伝導がフランドールにも届き、彼女の両手両足を氷の糸が掬つて、掴んでいたスペルカードを下に落とされてしまう。

「…………これで、ツナのスペルカードが完璧に決まるな
もう相手は既に四肢を氷に捕らえられ何も出来ないからな

「では、沢田さんはあの吸血鬼の女の子を殺す気なのでしょうか……」

「いいや、ツナの性格から考えて、そんな事はない
まあ、俺達には見ている事しか出来ないからな
ツナが何をするのか、見てやろうじやねえか」

リボーンは東風谷に話しあると同時に、あいつは、お馴染みの帽子を深く被りにやけ笑いのポーズを取る。

……また、俺の方も準備完了。

右手と左手の炎の出力が安定し、氷に捕われていて両手両足を必死に動かし、逃れようとしている悪魔に標準を合わせせる。

「…………フランデール、お前の敗因はただ一つ

俺との闘いを完全に舐めきつて、遊びから闘いへの意識を切り替える時が遅すぎたこと

…………お前がやつたその遊びで、幾つの命を壊したかは知らないが、その壊された奴のその気持ち、存分に心へ刻め

X Burner スーパー・ノヴァ・エクスプロージョン
超新星爆発！！」

俺の掛け声と共に、今まで放ったX Burnerの中で、最も威力が高い最高出力、「超新星爆発」をフランデールにお見舞いする。

屋敷中にX Burnerの轟音と、悪魔の悲鳴が響き渡り、二つの火柱が龍の如く屋敷をまっすぐに駆け抜ける。

その一体の炎龍は、俺と悪魔による死闘の終了の合図を意味していた。

標的16 ～死闘の幕引き～（後書き）

……「いつも、こそこそです。

一応タイトル通り、これで「フラン編」が実質終了になります。にしても、一章終わらせるのに、莫大な話数を費やし内容はグダグダ。

よく、こんなもの人さまに公開できるなど、結構な勢いで後悔しています。

本当は、十月の半ばで終わる予定だったのに……

それでも、読者の皆さまの感想は、心の支えとなつていてそのおかげでまずは第一章を完結させる事ができました！

あと、一話で「フラン編」のその後、そして記念の話を一話いれて、三話田から第一二章といつ事になる予定で、僕も結構やる気がみなぎつています。

次の章の話が、どの守護者もしくはどのキャラクターのは未定ですが、これからもこの書く、小説を暖かい田で見守ってください。

……さて、長々と語りましたが最後にみなさん、最近寒くなっています充分お体に気をつけてください、それとこれからもこの書く、小説をよろしくお願いします！

標的17 ～雲の守護者のやの後の処遇～

「…………終わったな」

「X Burner 超新星爆発」を撃ち終えた俺は、低く呟くと、垂直立ちをしていた壁から下りる改めて部屋を見ると、無惨な様子で廃墟ような雰囲気となっていて、崩れた天井から入って来る夕陽が、異常に眩しい。

…………夕陽に照らされるまま、サッカーポート並に広くなつた部屋を歩くと、ふと視界の中に、見覚えのある黒いマントが落ちているのを見つける

「満足できたか、フランドール？」

見覚えのある黒いマント…………一世のマント（マンテッロ デイボンゴレブリー）ナッシをマントからリングの姿に戻すと、中から出てきたフランドールにて、腰を屈めて視線を合わせて、声をかける

「…………」

しかし、フランドールは俺の問いかには答へず、ただ黙つて下を向いているだけ。羽もぐつたりと降りしつゝて、さつきまでの悪魔としての姿を微塵も感じさせない。

「…………」じりや完敗だね、してやられちやつたよ、沢田綱吉。：

「ええ、これが、お姉様をも凌いだボンゴレの力なんか私も、わかつた気がする」

今まで黙つていたフランドールが下を向いたまま、ふと口を開く。口調は相変わらず変化ないが、表情が今にも泣きそうな、顔をしている。

「……ねえ、沢田綱吉

あなたに一つ、聞いても良い？ なんで、あなたの放った炎のレーザーが、私を飲み込もうとした直前に、なぜあなたは、その黒いマントを私によこして、敵である私を守らせる様な事をしたの？」

フランドールが不意に顔を上げ、瞳が俺を強く見つめる

……なるほど、そういう事か。

つまり、フランドールが言いたい事は、X Burner 超新星爆発を放つたその時、なぜ俺が、敵であるフランドールに、ナットを送り形態変化させ、防衛モードであるエ世のマントで、あいつをX Burnerから守りつけたのか。

要約すると、フランドールは、殺そうとました俺に、助けられた事をかなり不思議に思っているのだ。まあ、もし俺がフランドールの立場で、同じ事をされても、きっと驚くが……

俺に言わせてみればそんなの不思議でもなんでもない。

「お前を助けた？」

……そんなの答えは簡単さ、俺はフランドールの様に、相手を殺す事を目的として闘っていないからだよ

少し、和やかに言つたが、フランドールの瞳がまだ、俺を強く見つめる。

「フランドール、俺の目的は、お前に闘い怖さを教える事だ。彼らお前でも、あれだけ体力を削られ、X Burner 超新星爆発、を叩き込まれたりしたら、一たまりもないし命にも関わるだろう？」

……それに、お前が怖さを理解したというのなら、俺はそれ以上攻撃したりはしない。

だって、これ以上お前を傷つけて何になるんだ？」

俺はその、答えを求めるフランドールの瞳に、全てを話してやる。誰かを傷つけはするが、俺は誰も殺しはしない。それは俺のポリ

シーであり、ボンゴレのボスを継いでも、決して揺らぐ事のない信念。

「…………ふふっ、やすがね。それでこそボンゴレリング、…………いや、あいつの意志を継ぐ者。

強さもさる事ながら、周り者をその寛大な心で包みこんでしまつ、まるで、すべてに染まりつつ、すべて包容する大空のよつて。久しぶりに、私も楽しませて貰ったわ」

俺が、フランドールに説明をしていると唐突に横から、フランドールとは別の少女の声がする。

…………見ると、零地点突破 初代エディション、を解説していた、ピンクのドレスに水色の髪、蝙蝠の様な翼を生やした少女が立っていた。

フランドールはその少女の登場に驚いたのか、あたふたとし始める。

「フランにボンゴレ、これはまた、随分とやってくれたわね。
存分に楽しんだの良い事だけど…………この後の部屋の片付け、誰がやると思つてゐるのかしらねえ、一人とも？」

蝙蝠の羽の少女は、俺とラフランドールを交互に見ると、ニヤリと笑う。その笑顔は、何かしら悪巧みをしているかの様な、そんな印象が強く残る。

「ああな、先に言つとぐが俺は知らないぞ。

俺は、フランドールの鬭いに巻き込まれた、いわば被害者。何故、俺が片付けなんてしないといけない？」

俺は、このまま行くと部屋の片付けをやらせられそうになるので、ニヤリと笑つた少女に言葉を返す。

きつと、こいつがフランドールの姉のお姉様。

言い方は悪いが、あのフランドールの姉だぞ、さつきの笑いの印象通り、どんな性格をしているかは目に見えるじゃないか。

「…………ふふつ、残念だけビボンゴレ。そんな言い訳が通用すると思つて？」

「…………」
案の定と言ひべきか、俺は蝙蝠の羽の少女の存在感、殺氣とともにうべきオーラに圧倒されごくりと唾を飲む。

「もし仮に、あなたが被害者としても、あれこれ云々する雲雀恭弥、あればどうなの？」

あれは、私の許可無しに、好き勝手暴れて、ここまで酷くないけども、この部屋を荒らしていったわ。

…………そういえばあなた、フランと闘つてた時に、ボンゴレのボスとして闘つって言つてたわね。

部下のやらいかした始末をするのも、ボスの仕事じゃなくて？ 沢

田綱吉

「…………」

俺は少女の言つた事に返す言葉が出ない。

…………確かに、俺はボスとして闘つとは言つたが、まさかそれを逆手に取られ、こつも追いつめられるとは……考へてもいなかつた。

一

「確かに、今話を聞く限り、雲雀はツナがここに来る前に、足速く暴れてたらしいな」

「…………リボーン」

…………こんな時に、また俺達の会話に現れたのは、黒いスーツに身を包んだ、立派な揉み上げが印象的な赤ん坊、リボーンであった。

「でも、その事でツナが責任を負うだなんて、冗談も良いところだぞ。」

大体、内の雲の守護者は、その雲の名前通り、自由奔放で誰からの束縛を嫌う奴なんだ。それは、ファミリーの一員になつても変わらずで、雲雀に関しては基本、放任主義なんだ」

リボーンは、ふらつと現れると、俺の肩に乗り、フランドールの姉の気迫に何も臆する事なく喋り始める。

「そう、それなら仕方ないわね、さつさと雲雀やその縁の巫女を連れて帰りなさい……なんて生易しい事、私が言つてでも思つた？」

雲雀恭弥が放任主義なら尚更。

やはりあなた達に責任を取つて貰わないとね。…………それでも嫌というなら、私が力を持つとして、責任を取らせてあげる。さあ、どうする？」

ピンクのドレスの少女は、リボーンの一言で頭に血が昇ったのか、フランドールと同じく、言葉に殺氣を込めてリボーンに言葉を返す。「確かに、そういう事なら喜んでツナが相手になつてやる、と行きたい所だが、生憎こちらもガス欠でな。

……その代わりとして、雲雀を此処に置いて行く。
それでどうだ？」

……その瞬間、俺はリボーンの頭を疑つた。さすがに、今の発言の意図は、俺でも理解ができない。

「そうね、それは私にとつて願つてもない事だけど。自由奔放で誰よりも束縛を嫌う、当の本人が、そんな事許すのかしら？」

「その通りだよ赤ん坊。……そんな事、僕が許すとでも、思つているのかい？」

やはり、雲雀は今の一言に反応し、ボロボロの身体を引きずりて、

「ここまで来ると、俺なりに向かつてトンファーを構える。

まあ、実質、俺とフランドルは空氣に近いが……

「雲雀、そう慌てるな。お前を此処に置いておくのは、ちやんと一つの意味があるからなんだ。お前がこの後どうするかは、これを見てからでも遅くはない筈だべ」

リボーンは、雲雀をなだめると言葉を続ける。

「一つの理由のつま、まあ一つ曰は、お前の身体にある、傷治の治療についての事だ。

この屋敷なら、きっと雲雀の治療をしてくれるだろうし、第一お前だって、そのボロボロの身体で、立つてこらのやつとの状態なんだろう?」

「…………」

リボーンの言葉に、雲雀は顔をしかめて黙り込む。きっと、図星であるのだろう。

「それともう一つの理由……ここからが重要なんだ。

もし、お前の身体にある傷が癒えれば、後はお前のやりたい放題だ。

例えば、此処にいる奴らと戻り存分、心ゆくまで鬪つたりとか……

「…………」
「…………確かに、赤ん坊の言つ通りだ。気が変わった、傷が癒えるまで僕は此処にこさせさせて貰うよ。でも本当に此処にいる奴ら、存分に歯み殺せるんだよね?」

リボーンの一つ目の理由を説明した後、明らかに、雲雀の田の色

が変わる。

何と言つか……リボーンは雲雀の扱いを心得ているんだな。雲雀が戦闘マニアと知つていて、問題児である雲雀を確實に言いくるめた。

「ええ、もちろんよ雲雀恭弥、そこは此処の主である、私が保証するわ。それに私とあなたの決着がまだだつたじやない、あなたの怪我が癒えたら、存分に相手をしてあげるわ。」

そして、リボーンのその計画に面白がつてフランドールの姉も加わる。……なんかこの一人、色々と気が合つそうだ。性格が一人してまるつきり似てゐるからか？

「さあ、そうと決まれば後は実行するだけ、咲夜。早く雲雀恭弥を、運んであげて」

フランドールの姉は、慣れた口調で部屋の隅にいた、メイドを呼び出す。

そのメイドは、一回俺らに向かつて一礼すると、雲雀を何処かへ連れていく。

「…………沢田さん、大丈夫ですか？」

そして、咲夜というメイドとすれ違になると同時に、東風谷が俺に駆け寄つて来る。きっと、今の今までタイミングを摑めずにいたのだろう。

何故か、フランドールが、東風谷の事を恨めしそうな視線で見ていたが……気のせいだらうか。

「まあ東風谷、お前もツナに色々と聞きたい事がありそうだが、今は置いといて、俺らもそろそろ家に帰るぞ。空がもう暗くなつているし、諏訪子も腹を空かせているだらうから」

リボーンはそう言つと、東風谷の肩に乗る。

東風谷は、あつと小さく叫ぶと崩れた天井の隙間へと向かって飛んで、一足早く行ってしまう。

「待ちなさい、ボンゴレ。最後に一ついいかしら。」

俺もそれに、ついて行こうとして立ち上がった時、不意にフランドールの姉に呼び止められる。

「ねえ沢田綱吉。今度は、あの赤ん坊や巫女を連れて、ここに紅魔館に密として来なさいな。

精一杯のおもてなしと、私の知っているボンゴレに関する事、全てあなたに話してあげるから

フランドールの姉は、ニヤッと笑うと俺を誘惑するように右手の指をくいくいと向ける。

「…………ああわかった、気が向いたら来てやるよ。…………だけども、今回の様な、手荒いおもてなしだけは、勘弁してくれ

俺は冗談をいれて、姉に言葉を返す。フランドールの姉は、ええ、わかつたわと鋭く尖った八重歯を見せて、ニヤッとではなく、うつすらと微笑む。

「おいッナ、いつまでそこにいる気だ？ 置いて行くぞ！」

俺がフランドールの姉と、話していると上からリボーンの声がする。あいつも微かに笑っていて、きっとあいつは、このシチュレーションを予想していたのだろう。この策士め……

「リボーンが呼んでる、そろそろ行かなきや。

……じゃあな、フランドール。遊びは程々にしとけよ？」

「…………うん、わかった。遊びと闘いの区別はなるべくつける様にするよ。だから、また此処に、絶対遊びに来てね！ 沢田綱吉」

俺は、最後にフランドールと会話をすると、吸血鬼姉妹に手を振り屋敷を後にする。

これから予定は人里を日指し、そこを経由して守屋の神社へと向かう。わざわざ途中で人里に向かうのは、上白沢慧音に無理矢理

預けた、荷物を回収するため。

「……なあ、東風谷。一つ頼みがあるんだが、良いか?」

「ん? 何ですか沢田さん。頼み事つて」

大きな湖に差し掛かつて、丁度その上を通り越している時、俺はふと東風谷に声をかける。

「今日じゃなくて良いから、今度東風谷が言つてた……人里にある、美味しい団子屋へと連れて行つてくれないか? そこでお前に話したい事があるんだ」

言葉を放つた瞬間、東風谷の肩のリボーンが密かに笑うのが見え、東風谷も東風谷で顔を真つ赤にしてあたふたとしている。全く、俺が何か変な事を言つたか?

……月が綺麗に輝く幻想郷、俺はそんな月を仰ぎふと、いつ思つ。

元の世界に帰る前に、せめて東風谷だけには、俺達ボンゴレについて、本当の事話をなればいけないな、と…

標的17 ～雲の守護者のやの後の処遇～（後書き）

……絶賛スランプ中のこっこaです、上手く書けたか解りませんが、少し書き方を変えました、次はもっと早く投稿できるように頑張ります。

でわ……

標的18 「雨の剣士と半人半靈の少女」（前書き）

すいません、前回投稿した日からまるまる一ヶ月の日が経ってしまいました。

申し訳ございません。

これからは、そんな事がなによつ、頑張っていきたいと思います。
では！！

標的18 ら雨の剣士と半人半靈の少女

「はああっ！」

夕焼けに染まる空。葉っぱ一つじゃない桜並木の中、俺は声を掛け声と共に時雨金時の柄を強く握りると目の前の少女に向かって、渾身の一突きを放つ。

金属同士がぶつかり、火花と鈍い音をまき散らす。

彼女は俺の一撃を直らの持つ刀で捌き、無駄の無い動きで距離を取る。

「どうしました、山本武。あなたの時雨蒼燕流はこれで終わりですか？」

自分の周りに、フワフワとまつ白い風船みたいな物を浮かせ、全体的に緑色の服を着て、銀髪のショートヘアに黒いリボン、そして刀を構えた少女、魂魄妖夢は俺にこう吐き捨てるに刀を握り直し下段に構える。さつきまで優しい表情をしていた彼女は一変し、対照的とも言える、鋭い視線に冷淡な口調。おまけに女の子とは思えないビリビリした殺氣まで放つていて、魂白がただ者では無い事を物語っている。

「…………ははっ、今のを捌くとはさすがだな。こ魂魄りや俺も、本気でやんないとな」

「…………余裕ですね」

俺は、そんな態度を急変させた魂魄に、へへっと笑うと、時雨金時を中段に構える。笑いを見せたものの、自分の心の焦りを捨てられなく、俺も一步後ろへ下がり、じくりと唾を飲む。

（数時間前）

「おっ……これは、時雨金時じゃねえか！！」

……事の発端は、今から何時間か前。何気なく自分宅の物置を整理していた時に、偶然、濃い青の竹刀袋に入った時雨金時を見つけた所までさかのぼる。

「懐かしいな、こんなとこに閉まつといったのか」

偶然、時雨金時を見つけた俺は、今までやつていた物置の整理なんてそっちのけで、時雨金時に夢中になつた。

なんせ、二年前には時雨金時じいじと一緒にスクアーロや、幻騎士と闘い抜いた、俺の魂を分けた相棒なんだ。

ツナがボスの、かなりリアルなマフィニアージの事を

「…………ん？」

すると不思議な事に、突然首にぶら下げていたボンゴレリングが、光りを放ち始めたのだ。

「！？」

ボンゴレリングが強く光を発したかと思えば、エレベーターに乗つている様な、落ちていく感覚がして一、二年前（あの時）と同じ、俺を何処かへいざなつてしまつたのだ。そして、そのいざなわれた場所というのがここ、白玉楼で、魂白が庭に倒れていた俺を見つけ、屋敷の中まで運んでくれたらしいのだ。

でも、そんな優しい彼女が、まさか時雨蒼燕流の名前と時雨金時を見ただけで、がらつと彼女の性格が変わつてしまつなんて……

「山本武…………あなたが仕掛けないのであれば、私から行きますー！」

俺の回想は、彼女の一言で搔き消され、彼女の一撃に備える

ため刀を中段に構える。

刀が重なり、再び鈍い音が響く。

魂魄の左足を軸にし全体重をかけた、重い一撃を受け止め、そのまま何回か斬り合つ。

……それにしても魂魄、強いな。

魂魄と刀を何回か合わせる中、俺はふと思つ。彼女には、剣術の基本がみっちりと仕込まれてあり、あらゆる場面に対応できる応用力、適応力もある。正直に言うとそんな剣士と闘うのが一番辛く、ましてやそんなど闘つて勝とうとするなんてのは至難の技。

「一いつや、また厄介な奴と闘う事になつたな……」

魂魄の刀の切つ先が俺の洋服にかかる。

意識が再び、魂白との闘いに集中される。

久しぶりに体感する命の駆け引きに、身体が緊張感で包まれる。

魂白はその優れた適応力で俺の太刀筋の癖を分析し、動きが格段と良くなり攻めに転じる。しかし俺はそんな彼女の攻撃を受けるのに精一杯で、どうしても防御重視になつてしまつ。その結果、俺が防御に転じたのを良い事に、魂魄の攻めに拍車がかかり、俺の負ける確率がグーンとUP。おまけに一度攻撃に転じた彼女から体制を直すのは難しく、負のスパイラルに嵌まつてしまつ。俺が一番恐れた最悪の展開となつてしまつたのだ……

「その昔、伝説の暗殺剣術と謳われた、時雨蒼燕流も墜ちた物ですね」

落胆の気持ちが混じる、魂白の言葉が、彼女の振るう刃の如く俺の心に冷たく突き刺さる。

「師匠からは、時雨蒼燕流の剣士と闘つ時には、死をも覚悟する勢

そつげん

」

落胆の気持ちが混じる、魂白の言葉が、彼女の振るう刃の如く俺の心に冷たく突き刺さる。

「師匠からは、時雨蒼燕流の剣士と闘つ時には、死をも覚悟する勢

」

いで挑め、と教えられましたが……あなたの弱さに拍子抜けしました

「ん？ おい魂魄……ちょっと待て……お前は何か大きな勘違
いを……」「

「問答無用！－！」

俺は魂魄の言葉に動搖を隠しきれず、反応が遅れた一瞬の隙を突かれ、背後の木に叩きつけられる。

「…………つー！」

呪きつけられた痛みと闘いながら、俺は目をうつすらと開き、澄んだ顔した魂白を見る。

魂白が言った時雨蒼巖流、……それは、俺が使う時雨蒼燕流とは似ても似つかない全く違う流派。

昔、親父から聞いた事があるのだが、時雨蒼巖流とは、時雨蒼燕流ができたのと同じ時代に、時雨蒼燕流への強い対抗意識を持つた人が独自に作った流派らしい。親父によると、長年その二つの流派は互いにしのぎを削っていたらしく犬猿の仲だつたらしいのだが、何代目かの時雨蒼巖流の使い手が弟子に自分の流派を継承させる事無く死んでいった為、時雨蒼巖流はそこで途絶えてしまつたんだとか……。

話を元に戻すが、きつといつは時雨蒼巖流と時雨蒼燕流を「いつちやにして、いろいろと勘違いをしているのだ」。

俺はそこまで考えると、その場から立ち上がる。

さつきの衝撃で左側の一の腕をやられたらしく、血で染まつておりズキズキと痛みも襲つてくる。

「…………ったく、お前にも何かしら事情があるのかもしれないが、巖と燕という字を間違えたという、ただそれだけの理由で殺される

のは真っ平じめんだぜ

俺は咳く様に喋ると、ボンゴレリングを指に嵌め、バットを構える格好をして刀を構える。

「何ですか？ その構えは…………」

魂魄は俺のした変な構えに、顔をしかめる。

「これは野球でボールを打つ時の構えなんだ。…………生憎俺にはこれしか出来る事が無いんですね」

俺は、中学生の頃に、スクアーロにも言つた覚えがあるセリフを彼女にも使う。

魂白、俺の本気は…………これからだ

標的18 「雨の剣士と半人半靈の少女」（後書き）

突然ですが、誰にだつて思い入れのあるキャラクタ 居ますよね。ちなみに、僕が東方を知るきっかけとなつたのが魂魄妖夢でリボンを知るきっかけとなつたのが、山本武なんです。

つまり、この二人の対戦は僕にとってまさに、夢の対決見たいなもんで、正直この先の展開が僕にも想像が…
…まあ兎に角スランプからも抜け出した事だし、改めてcoco a の書く小説を、これからもよろしくお願ひします！！

標的19～奥の手

俺は言葉を言い終わると、右手の中指にある透き通った水色をした石に雨の雲の形が彫られた、ボンゴレリングに意識集中させ、澄んだ水色をした高純度の雨属性の死ぬ気の炎を燈す。

「指輪から炎を燈すとは…………これからどんな手品を見せてくれるのです？ 山本武？」

「手品？ 残念だが魂魄、これは手品じゃ無いんだ。この炎は死ぬ気の炎といってな、詳しい事は俺も忘れたけど、すんげえ力を秘めた炎なんだ。その力は、お前を倒せる程の……な」

魂魄は死ぬ気の炎の事を知らないのか、怪訝な顔をして、炎を燈しているポンゴレリングを覗き込む。

「私を倒す？ 「冗談にしては笑えないですね。あなただつて感じたはずよ、私とあなたの実力差というものを」

「実力差か…………仮に俺と魂魄にそんなのがあつたとしても、もし俺があの時全力で行つていなかつた、と言つたらどうする？ 俺には奥の手があるんだよ。」

俺は、魂魄を挑発さする様に喋る。その会話の間に、俺は時雨金時に雨の炎を纏わせる。俺だつてやる時はやる男なんでね。魂魄に一方的にやらされたまま、のこのこ引き下つてたまるか。

「そうですか…………なら、あなたには改めて実力差をしらしめ、その減らず口を叩けなくする必要がありますね！！」

完全に挑発に乗つた魂魄。彼女は刀を構え再び俺に向かつて突撃していく。

「…………」

俺は向かつてくる彼女の存在に焦りを感じつつ、気持ちを集中さ

せ、時雨金時を今一度強く握る。そして、彼女が俺に後一歩といふ所まで近づいた時……

「時雨蒼燕流、守式一の型、逆巻く雨！」「なつ！？」

何年かぶりに使った型なのだが、身体が時雨蒼燕流をまだ覚えていてくれたらしく、慣れた手つきで、あらかじめ時雨金時の刀身に纏わせてあつた雨属性の死ぬ気の炎を巻き上げ、巻き上げた炎で俺の姿を隠し、体をかがめて彼女の斬撃から回避する。

「時雨蒼燕流、攻式一の型車軸の雨！」

そして間髪を入れず、時雨金時を両手で持ち、魂魄が居るであろう場所に向かい、渾身の力を込めて突く。

刀が何かを捉えた感覚がしたが、巻き上げた雨の炎が邪魔で、何を捉えたのかは見当もつかない。

次第に巻き上げていた雨の炎が收まり、今の状況が見えてくる。

「身を隠してからの、突きによる奇襲攻撃ですか…………しかし、これが奥の手というのでは、少々物足りないですね」

時雨金時が捉えたのは彼女の持つ長い刀。刃の切っ先が頬に掠つたのか、彼女の顔に二つの切り傷がついていた。

俺は一旦、体制を立て直す為後ろに大きく退き、間合いを取る。今までの彼女なら、俺が間合いを取つている間に追撃の一矢や二矢をお見舞いをしてくるはずなのだが……今の魂魄は追撃をしてこなかつた。

いや、それができなかつたというのが正しいのかもしれないけど。

「どうやら、俺の奥の手が上手く効いたみたいだな」

「奥の手…………！」

冷静な口調とは裏腹に、刀を持つ腕がガクガクと震え、初めて焦

りの表情を見せる魂魄。

「そつ、俺の奥の手、鮫衝撃アタッコ・ディ・スクアーロ。身体によく響くだろ？一応、説明をしどくけど、鮫衝撃アタッコ・ディ・スクアーロつてのは、渾身の一撃を衝撃波にして相手の神経を麻痺させる衝撃剣なんだ。

気休めっちゃなんだが、身体が思う様に動かないからってそんなに焦る事はないぜ。

俺だつて、スクアーロに最初にやられた時はびびったんだからな「…………つー！」

俺は笑顔を交えて、焦った表情をしている魂魄に話しかける。いまだに腕が、ズキズキと痛むが、今のところ時雨蒼燕流を使うのには何も問題は無い。それどころか、鮫衝撃による攻撃で彼女の神経は麻痺している。

鮫衝撃が有効な時間は一番長くて5分。それまでに魂魄を打ち負かし、俺の話を聞かせる事ができれば、彼女の時雨蒼燕流と時雨蒼燕流の誤解を解く事が出来るかもしれない。

「行くぜ、魂魄。俺が継承した、完全無欠の時雨蒼燕流を見せてやる！」

俺は腕の痛さを無視して刀を構えると、取った間合いを一気に詰め、魂魄と刀をぶつけ合うつ。

今回は俺が攻勢に転じた。

それに魂魄に俺の放つ太刀筋を分析させない為に、右、左、上、下、と色々な場所から斬り続ける。

刀と刀がぶつかる音が、今はやけに心地好いし懐かしい。

久しぶりの実戦で、身体が三年前の感覚を思い出しているのだろう。

「……山本武、やはりあなたは未熟です。色々な場所から斬りつけられれば私に勝てるとしても思つていいのですか？ 先に言つておきますけど、そんな事をしても私には絶対に勝てませんよ。私にはどうしても、勝たなければいけない理由がありますから」

同士をぶつける中、彼女は俺の目を見て、はつきりと言つた。

やはり……魂魄は凄い。鮫衝撃をまともに喰らつたというのに、俺の攻撃を平然と受け止め、俺と会話をする時ですら、余裕を現している。

昔の人人が言つた、敵ながらあつぱれといつのはまさじへこの事を指すのだろう。

「だが、今のお前の様子を見る限りじゃ、俺の攻撃を平然と受け止めるのが精一杯つて感じだな。

今までのお前なら、冷静に分析して反撃をしてくるのに、今はおとなしく受け止める事しかしない。

お前は、俺の鮫衝撃を受けたせいで、頭ではわかっている事が、身体が言う事を聞いてくれないからできないんだろう？」

「…………つ！」

俺の予想は図星だつたらしく、魂魄は顔をしかめて舌打ちをする。やはり魂魄は、鮫衝撃のおかげで、普段の力を発揮できていない。なら……倒すチャンスは、なおさら今しかない！

「…………時雨蒼燕流、攻式八の型篠突く雨！」

俺は強く決心し、捨て身の覚悟で彼女の懷に飛び込むと鋭い斬撃で斬り上げる。もちろん、斬り上げると同時に刀の向きを素早く替え、刃の無い方で攻撃する。

しかし、篠突く雨は魂魄を捉えきず、刃が少し、彼女の服をかするだけ。彼女は篠突く雨から逃れると、後ろに大きく飛んで俺から間合いを取る。

「今の斬撃を放った時……何故あなた、刃では無く峰のある方で私を攻撃したんです。あなたは……時雨蒼巖流は……この期に及んでも、まだ私をこけにするというのですか！？」

魂魄は、今までの斬り合いでズタズタになつた緑色のドレスの様な服をかなぐり捨てその下に着ていた、ラフな白のワイシャツ姿になる。

「いいや魂魄。俺はお前をこけにしようとなんて、これっぽっちも思つてないぜ。」

お前が時雨蒼巖流をどんな感じに解釈しているかは知らないけど、少なくとも俺は人殺しじゃないぜ。俺はただの剣士だ」

「……人殺しじゃないとまで言わせるとは、私はあなたに時雨蒼巖流を継承した者への怒りを通り越して呆れを感じる事しかできませんね」

俺は時雨蒼巖流の使い手なのだが、親父を侮辱されたのかと思うと、何故か歯痒くなる。

「なあ魂魄。俺はこの鬭いが始まつた時から疑問に思つていたんだだが、どうしてお前はそんなに俺を敵視するんだ？ 俺はただ……」

「だまれ！！ それ以上善人の仮面を被るな、この偽善者！－！」

「偽善者って……」

俺は彼女の気迫に圧倒される。きっと、それだけの理由があるのだろう。

「……」

「すいません、少し取り乱れました。

でも……良いですか山本武。

あなたは何も知らない様ですが、私があなたを……いや、時雨蒼巖流を憎むようになつたきつかけを作つたのは、そちらの方なん

ですよ。」

魂魄はそこまで言つと、一度目を閉じ、気分を落ち着かせるため
か深呼吸をする。辺りはすっかり暗くなり、夜の風が冷たい。それ
と、幽靈でも現れるのではないかと思えるほどに不気味である。

「あなたが、時雨蒼巖流をした者から、何を吹き込まれたかは知り
ませんが、この際なのではつきりと言つておきます。

あなたが先代から技と友に教わった知識。それは、自分達の犯し
た過ちを隠す為に、書き換えられた、真つ赤な嘘です」

「真つ赤な……嘘？」

俺は彼女から放たれるプレッシャーに圧倒され何も言い返す事が
できず、ただ彼女の言つた言葉をおうむ返しするしかなかつた……
魂魄を説得するの為には、彼女の背景にある、時雨蒼巖流をもつ
と理解する必要があるのか。

……俺はふと、そう思つた。

標的19～奥の手（後書き）

：投稿が、遅くなりました。
ごめんなさい。

次は月曜日に会えたらいこなと思っています。

それではーー！

標的20～憎しみの理由

「真つ赤な嘘？」

私、魂魄妖夢はこの期に及んで何も知らないフリをする時雨蒼巖流継承者、山本武に、私は怒りを通り越して呆れてしまった。やはり時雨蒼巖流の人間は許せない。

自分達の犯した過ちを歴史の闇に葬り去らうとしているだなんて

「…………いいでしょ。なら、私が本当の事実を教えますが、私が喋っている間にはあなたからの一切の攻撃を禁じます。よろしいですか？」

「…………ああ」

私は山本武から受けた鮫衝撃の効果を薄くさせる、時間稼ぎとしても丁度よいと考え当時の出来事を話す事にした。

「……まず最初に、私は幻想郷では無く、あなたと同じ日本に生まれたのです。

そして魂魄一族は、冥界を司る西行寺の護り刀として、先祖代々仕えていた。

私が生まれた当時は、まだ応仁の乱が始まる前という事もあり、平和な時代でもあった。それに、まだ時雨蒼巖流も生まれていませんでした。」

私は山本武がこの隙を狙つて奇襲を仕掛けてこないと判断し、構えていた楼観剣を鞘に收める。

夜の風が私の髪と黒いリボンをなびかせる。

「…………そして、私も成長し父上から剣術を習い始めた頃、ついに

応仁の乱が勃発。当然、京の都に住む私達にも戦渦の火が回つて来て、私達半人半靈の魂魄一族をも無惨にも飲み込んだ。

……幽々子様は無事で、奇跡的に私達が住んでいた寺は焼けずに済みましたが、植えてあつた桜並木が西行桜のみを残して全滅、我が魂魄一族は私とお爺様以外は死んでしまった。寺も再建する程の財力も無く、幽々子様は行き残つた私達だけで、幻想郷へと移転する計画を立てたのです。」

「…………」

これまでの話を真剣な眼差しで聞いている山本武。

身体を動かしてないせいか、肌に感じる風が幾分と冷たい。

これほど寒くなるのだったら、安易に服を脱ぎ捨てなければ良かつた。今更思つても仕様が無いが。

「一年の歳月をかけ、桜の苗木を埋め直し、幻想郷に移転する準備がようやく全て整つた頃。…………そんな時期に現れたのが、当時日本一の剣聖を称されていた、初代時雨蒼巖流の使い手。そいつは、京の都で最強の剣士である私の爺様と剣の勝負がしたいと言い、何度も何度も私達の寺へ尋ねて来た。

普通の人は、それで諦めて帰るのだが、その時雨蒼巖流の使い手はそうでは無かつた。

自分と会おうともしない私の爺様に腹を立てたそいつは、私達が寝静まつた頃を見計らうと、百人にも及ぶ門下生を引き連れお爺様を闇討ちに來たのだ！

当然、私もお爺様も刀を取り鬪つたけれど、それでも敵う相手では無く……お爺様はそいつから私を守つて殉職、お爺様を斬つて満足したらしいそいつは、屋敷を散々あらした後、門下生を連れて引き揚げていつた。

その晩、幽々子様は外出してたためこの事を詳しく知らず。早朝にお帰りなさつた幽々子様は、お爺様を手厚く埋葬され、屋敷ごと

幻想郷へと移転された。

…そして、私はこの幻想郷の土地でお爺様で誓つたのです。お爺様の形見であるこの楼観剣と白楼剣で必ず、時雨蒼巖流の使い手を斬ると…

話終えると同時に、私は鞘から楼観剣と脇差し程度の長さの白楼剣を、共に抜き放つ。新たに白楼剣を抜いた理由は、彼を必ず斬るという決心がついたから。

ちなみに、幻想郷で主流となつてゐる“弾幕”じつことは、彼と闘う間は絶対使わないと決めている。あくまでもこの闘いは、刀と刀の真剣勝負。それを弾幕などというのを使つては、お爺様のとむらい合戦にはならない。この勝負、お爺様から教わった剣術だけで勝つてみせる。

「…山本武、私の話はこれで終わりです。
では早速、勝負の続きを始めましょう、話した通り、私はあなたを斬りたくてたまらないのですから」

手の痺れも幾分ととれてきた。これでまた存分に暴れられる。
やつと今日達成できます。お祖父様の悲願を！

「はああっ！」

そして私は怒りに我が身を任し、一本の刀で山本武に斬り掛かつた。

「はああっ！」

怒りに我を任せ、襲つてくる魂魄。俺は一本の太刀筋を見極め、地面に手を着き身体を大きく反らして攻撃を避ける。

魂魄の話を聞き、彼女がどれほど時雨蒼巖流に恨みを持っているかは時雨蒼巖流使いの俺でも痛い程理解できた。

「…でも、今の話に俺は妙な違和感を感じた。魚の小骨が喉に刺さった時みたいに、彼女の話を上手く飲み込めないのだ。

そんな事を考えている内にも、魂魄の一本の刀から、暴風の様な荒々しい斬撃が繰り出される。一撃一撃にずつしりとした重みがあり、絞衝撃とまでは行かないながらも、手の感覚が麻痺してくる。

「…魂魄が今使っている一刀流。これもお爺さんから教わったのか？」

手の麻痺を紛らわす為に、刀をぶつけ合いつつも、魂魄に向かって喋る俺。

「はい。

正確には、お爺様から教わったのを自己流にアレンジしたのです。いつか来るこの日の為に…」

彼女の刀が頬を掠める、魂魄鋭利な刃の切っ先は、ひんやりとした冷たさと共に痛みが襲つて来る。

「…じゃあ、いくつか魂魄に質問したい。

お前は、お爺さんの仇を討つこの時まで、ずっとその事を目標に生きてきたのか？」だが俺は、そんな痛みにも怯まず、喋り続ける。今度は妙な違和感の正体を突き止めたくて…

「…あなたにそれを話す義務など、私には微塵も無い。あまり、変な事を聞かないでくれますか？」

ガキンッ！

その言葉と同時に、俺達の刀が交錯しあう。

彼女の一本の刀は俺の両腕を掠り、俺の時雨金時は魂魄の黒いリボンを斬つた。

「…それじゃあ、次の質問。お前のお爺様は京都で一番強い剣士と言つたが、具体的に言つたら、どれ位強いんだ？」

「…それも、あなたに話す義務は無い」

今度はあっさりと切り捨てられ、実際の勝負の方も、一の腕に負った昔の傷口がじわりじわりと痛み出して来る。

「んじゃ、最後の質問。応仁の乱つて、西暦何年の出来事だつたけな？ すまんが、教えて……」

「いい加減にしろ！」

とうとう魂魄が痺れを切らし、一本の刀を振り上げ、鬼のような形相で俺に斬りかかる。

俺はとっさに、地面に手をついて身体そらして彼女の攻撃を避ける。そして俺は、反撃として時雨金時を斬り上げてみるが彼女の対応が思つた以上に速く、一本の刀に弾かれ、体勢を崩されてしまう。

「甘いつ！」

魂魄は、その隙を見逃ず、俺の腹を右足のつま先辺りで思いっきり蹴つた後、腹の痛さのせいであざくまつた俺を、刀の峰でボールを打ち飛ばす様な感覚で数十メートル先にある木に叩きつけた。

「……ああ」

何とか気を失わずに済んだ俺は、意識が朦朧としつつ、腹の痛みと闘いながら、時雨金時を杖代わりにしてノロノロと立ち上がる。そんな俺を魂魄は、蔑む様な表情で見つめていた。

口の中が血生臭い、打ち飛ばされた時に唇でも切つたか？

「魂魄、今の一撃はかなり効いたぜ…もう少しで意識を失いそうになつちまつたぞ」

「そうですか…でも、これ位で意識を失なわないで下さいね山本武。これ位でくたばってしまつては私の復讐が果たせませんから」

魂魄はそう言い捨てる、一本の刀を構え直す。

はつきり言つて、小次郎と次郎が居ないこの状態で、彼女に勝つのは余りにも難し過ぎる。魂魄は一刀流のお陰で手数が二倍以上に増えていて、彼女の刀を受けるのが精一杯だ。おまけに、一の腕もズキズキと痛んできやがったし。最悪の状況じやないのか？ これつて。

ちなみに、次郎と小次郎の指輪は、時雨金時が入つっていた竹刀袋の中にあるのだが、打ち飛ばされた際の衝撃で彼女の足元に落ちてしまつたのだ。

なんとか、その竹刀袋を回収しない事には勝つ事なんて不可能に近い。

幸い、今の彼女の頭は、俺への復讐でいっぱい、足元まで注意は回つてないはず。

……なら、俺が時雨蒼燕流の特式型で彼女に、ほんの一瞬の隙をとれる事が出来れば、竹刀袋を回収できるかもしれない。

「待つてろよ魂魄、俺だつてきつい一発をお見舞いしてやるぜ……」
俺はすぐさま、雨属性の炎を再び時雨金時にを纏わせ、特式型を放つ為に身体を低くして身構える。

竹刀袋を回収できるチャンスは恐らくこの一回が最初で最後、野球で例えると9回裏の攻撃で2アウト、満塁、フルカウントの極限状態。この作戦が失敗すれば、彼女は足元にある竹刀袋に、気づいてしまうだろう。

一回だけというシビアな条件に、少し焦る俺。
俺は焦りと鬪つ中、彼女に放つ特式型を考えていた。

……そして

「時雨蒼燕流、特式十の型燕特攻！」
スコントロ・ディ・ローランティネ

悩みに悩んだ結果、俺は燕特攻を使う事にし、時雨金時に纏わせた雨の炎をえぐるように巻き上げながら、魂魄に突撃する。

「…っ！」

俺の燕特攻に、多少焦りを見せる魂魄。…よし、この調子ならいける！

普段は、前衛に小次郎を配置して使う型なのが、今回は小次郎が居ないので、幾分かは威力が落ちる。

けれど、そんな事はどうでもいい。なんせ、俺の今回の目的は、彼女の足元にある竹刀袋の回収だ、別に魂魄を傷つける事じゃない。虚勢を張つても、わずかな隙を作る事が出来ればそれで良いのさ！！

標的20～憎しみの理由（後書き）

冬休みにはいってそいつパソコンが一台とも壊れ、修理からかえってきたのが昨日でした。投稿が遅れてしましました。

それと、オリジナル設定を加えすぎました。温かいめで見守ってください。

年内最後の投稿、良い年をお迎えください！

標的21／万事休す、そして解けた違和感

ガキンッ！

燕特攻スコントロ・ディ・ローンティメが、彼女の持つ一本の刀にぶつかった瞬間、今まで以上に激しい火花が辺りに散らばった。

手を伸ばせば竹刀袋まで届く距離。今すぐに手を伸ばして回収してもよいが、焦りすぎて魂魄にその事を悟らせてはいけない。ここは慎重に立ち回らなければ。

刀同士が未だに火花を散らしあつたまま、しのぎを削る。魂魄は燕特攻を受けるので精一杯だつたらしく、じわりじわりと後ろへ後退る。

「時雨蒼燕流、攻式五の型五月雨！」

俺は後ずさる魂魄に、駄目押しとして五月雨を放つ。

五月雨は、通常の剣術で言つところの中斬りを放つだけの攻撃だが、これはそんな柔な型じゃない。五月雨は刀を素早く持ち替える事で、相手の守りのタイミングを狂わす変幻自在な斬撃を放つ事ができる型なんだ。

「つ……あうつ……！」

案の定、魂魄は守りのタイミングを狂わされ、時雨金時の峰の部分で放つた上向きの中斬りをダイレクトに喰らい、宙を舞う。
「よつしゃつ！ 俺は魂魄が宙を舞つた瞬間、心の中で大きなガツツポーズをとつた。

小次郎達を回収できれば、きっと魂魄に勝てる。それに、彼女の時雨蒼燕流に対する誤解だって、解ける事が出来るかも知れない。

俺はすぐさま、地面にしゃがみ込み、右手を伸ばし竹刀袋をつかみ取ろうとする。

「これで戦況が一変する、俺がそう確信した瞬間だった」

「……うつー」

竹刀袋を掴んだ左手に突然、ずつしりとした重みと激痛が訪れ、痛みを身体が理解する間もなく、喉元に一本の刀の切つ先を突き付けられた。

「まんまと私の罠にはまりましたね、山本武」

「魂魄。…お前！」

頭上から聞こえる少女の声。俺はやっと今の状況を理解した。

……そう、俺の左手を右足で踏みつけ、丈の長い刀…確かに樓觀剣の切つ先を俺の喉元にも突き付けているのは、この直前まで宙を舞っていた魂魄妖夢であった。

魂魄は五月雨を喰らい、ボロボロになつた目のやり場がない白いシャツを着て、蔑む様な表情で俺を見下していた。

……でも変だな、前から思つていたけど、俺こんなに魂魄の服をボロボロにするまでの攻撃をした事あつたっけか？ リボンを斬つたのは認めるけど、服の方はせいぜい少し掠らせただけだぞ。

「あなたが何らかのアクションを起こすと思い、足元に落ちていた一それ（竹刀袋）をそのままにしておいたけど、こうも上手く功を成すとは…。一体竹刀袋の中には、何が入っているのでしょうか？」
まあ、私はそんな事に興味はないんですけど

「！！」

魂魄は、俺の左手を踏んでる足とは逆の方の足で竹刀袋を蹴り飛ばす。

そもそもって俺は、彼女の今の一言で愕然とする。魂魄には俺の

考えていた事がわかつていて、それでいてわざと竹刀袋に気づいていないふりをしていたんだ。俺をおびき出す餌として…

今更ながらそう考えてみると、自分の浅はかさがだんだん歯痒く思えてくる。

おまけに戦況も以前よりますくなっているし…万事休すだ。

ははっ、俺って一体何してるたんだろ？

「…にしてもお前。五月雨を喰らつて吹っ飛んでたのに、どうしてこんなに早く俺を捕らえる事ができた？…瞬間移動でも使えるのか？」

「いいえ。私は瞬間移動はできませんけど、空を飛ぶ事が出来るのです。

でも、まさかあなたの闘いで空を飛ぶ事になるとは思いませんでしたか…」

魂魄の言葉に耳を疑つた。

鳥の様に空を飛べる？この幻想郷だと何でもありかよ。

「…山本武。遊びはこれで終わりです。さあ、覚悟はいいですか？今、あなたの状態は籠の中の鳥。私の気分次第で生かす事も殺す事だつてできる。

命が惜しければ、私に命乞いの一つでもしてみたらいかがですか？魂魄が足に今以上の力を加え、右手を踏みつけた。

しかも彼女、俺の怪我をしている一の腕を踏んでいて、閉まりかけた傷口がまた開き、右手に力が入らない程の激痛が襲つた。

…この状況を打破する手立てはある。

彼女は時々金時を抑えてはいないし、上手くいけば少なくとも、この格好からは逃れられる事はできる。

だが、仮にこの状況を打破できたとしてもその後はどうすればいいのだろうか…、右手も小次郎達も使えないこの状況で。

「…へへつ、こりゃ本当に何もできねえな。それに、お前がここまで狡猾な手を使うとは思わなかつたよ。

今のは戦もお前の爺さんから習つたのか？」

俺は、何もやる事が無いので、彼女を軽く挑発してみる。どうせ話す義務はないとか言つて、答えてくれないのがオチだと知つているのに…

「…………そうですね、本当ならあなたにお爺様の話をする義務はありませんが、どちらにしろあなたはここで死にます、ならば冥土の土産として、話してやるのも悪くはない」

しかし、俺の読みは外れた。

戦況が有利になり、多少の余裕を持ったせいか、俺の事を見下し始める魂魄。

もしかしたら、あいつに変なスイッチでも入れちまたのかもしない。
まつ、結局俺はどうする事もできないから、あいつの話を聞くとするか。

冥土の土産には、したくないけど…な。

「私があなたに行つあ通称“見て見ぬふり作戦”的元の形は、あなたの言う通り、お爺様が考えたもの。私のお爺様は剣術だけでなく、戦略を練る事にも長けていて、応仁の乱では東軍の軍師として活躍されました」

きつと作戦の名前について、ツッコミを入れてはいけない。直感でそう感じた。

「東軍の軍師という事は、それなりに有名な人って事だよな。

だが俺は学校の授業で応仁の乱を習つたが、魂魄という名前は聞いた事がないぞ、これはどう説明するんだ?」

「……それはきっと、お爺様が偽名を使われていたからでしょう。私達は訳あって魂魄という名を人前ではさらさなかつたから……。だから、偽名のまま記録として残り、後世に残つたのでしょうか」

魂魄のおかげで、だんだんこいつの爺さん像が見えてきた。

今までの話を聞く限り、こいつの爺さん、かなりのお偉いさんだつたぞ。

剣の腕は京都一、頭脳の方もきっとEIQ240位はあるトップエリート。

……でも何で、時雨蒼巖流の人何かに負けちましたんだろう? 畏ら夜の奇襲だとしても、時雨蒼巖流の真似をしたアマチュア剣士に負けちまうだなんて。

当時、爺さんの体調がそれ程悪かつたのか……あるいは初代、時雨蒼巖流継承者はそれほど強かつたのか、かつ……!!

この瞬間、俺の頭で何かが繋がつた。

バラバラだつた、時雨蒼巖流、時雨蒼巖流、魂魄妖夢、応仁の乱というピースが一枚の絵を成した時の様に……

野球の感覚で例えると、相手ピッチャーの渾身のストレートを、バットへし折られながらも、打球をバックスタンンドに叩き込んだ……

……こんな感覚。

そうか、そう言つ事だったのか!

今まで頭に残つていた、彼女の話の違和感が綺麗に消え、顔が自然に綻ぶ。

……これなら、今まで起こつた全ての出来事にも説明がつくし納得がいく。

問題は、この事をどうやって魂魄に伝えるのかだけれど、まつ何とかなるだろ。

「…………どうしたんです、山本武。さつきから黙り込んで。ついに命を捨てる決心でも、ついたのですか？」

長らく黙っていた俺を不思議に思ったのか、魂魄が話しかけてくる。

先ずは、この状態から脱出が先決だな。左手の一の腕の痛みも限界を越えているし。やむを得ん。多少使いつのに気が引けるが、奥の手を使わせてもらいうか。

「なあ魂魄。今のこの緊迫した状況の中では……あまり言いたくないんだけれども……、その何というか……今のお前の格好だと……俺は……下からまる見えなんだけれど」

「……」「……」

顔面を林檎の様に真っ赤にして、咄嗟にスカートを触る魂魄。だが、俺はこのほんの僅かな綻びを見逃さなかつた。

「時雨蒼燕流、攻式八の型 篠突く雨！」魂魄の懷に、捨て身の勢いで飛び込み、時雨金時の峰の部分で彼女を突き上げる。

「ここので欲張つて竹刀袋を回収しようとしてはいけない。彼女は空を飛ぶ事が出来ると言つていたし、第一こんな間違いは二度と起こしたくない。」

俺は直ぐさま立ち上ると、突き上げた魂魄を見ながら、何歩か後ろへ下がる。

魂魄も、突き上げられて地面に落下するまでの間に姿勢を整え、

綺麗に着地。しかし、顔はまだ赤らめたままだ。

「……にしても、今まで踏まれてた二の腕の状態、思ったより深刻だな。右手に何の力が入らないし、指を動かそうとしても、指が命令に従ってくれない。」

魂魄め、やつてくれちゃって…

「山本武…、何度も言いますが、あなたはいつも、何故刃がない方で私を攻撃する！ あなたは、私との闘いを…この期に及んでまでも、舐めているのですか！」

怒声にもとれる大きな声で叫ぶ魂魄。そーいや、昔にも銀髪の口

ンモの誰かさんから言われた事があつたな。

「別に、俺達は人殺す為に剣術習つてる訳じやないからな。

お前に何を言われようと、刃のある方では絶対にお前を攻撃しないよ。これは、俺が絶対に曲げる事の信念…いや、ポリシーだ」

つい昔の癖が出たせいか、俺の部分が俺達になってしまった。

ツナ達、今ごろ何してつかな、もしかしたら俺と同じで、幻想郷に居たりして…まつ、でもこんな夜遅くまでは起きてたりしないか。

「…そうですか。あなたがその気ならば、私も自分の信念を通させてもらいます。」

そう言うと魂魄は、再び一本の刀を構えて、俺に突撃してくる。

普通なら、時雨金時でその突撃を防ぐか、身体を動かして避けたりするのだが。

「この時の俺は…

標的21～万事休す、そして解けた違和感～（後書き）

あけましておめでとうございます。

最近、異常に気温が悪いせいか、手がかじかんで誤字脱字が大量にあると思います。

何か誤字等があつたらお願ひします。

あと、妖夢のキャラを限り無く崩壊させてしまい、「めんなさい。

でわ！

標的22 ～黒幕の登場～

あえて地面に時雨金時を落とし、丸腰の状態になり、身体を低く身構えると、向かつて来る魂魄をじつと見つめた。

「！？」

俺のした常識はずれな行動に、表情を苦くする魂魄。しかし、それでも突撃してくるスピードは落とさない。

……じつや、失敗したら身体はただじゃ済まねえぞ。まつ、絶対成功させるから問題はねえけど。

「はあっ！－！」

ついに俺と魂魄の距離が無くなる。

そして、彼女は大きな掛け声と共に大きく地面に踏み込むと、俺に向かつて丈の違う一本の刀を振り下した。
もちろん、刃のある方で。

斬られたら……死ぬ。

そんな死の覚悟をしながらも、俺はその一本の刀の太刀筋から目を離さなかつた。

「悪いな魂魄、俺もここで易々と斬られて死ぬ訳にはいかないんですね！」

しかし、俺も引かなかつた。

俺は一本の刀の軌道から目を逸らさず、振り下ろされた一本の刀を両手の人差し指と中指の一本の指を立てて受け止めた。

つまり、真剣白刃取りの片手バージョン。……にしてもよかつた。

何とか出来たぞ、雨属性の鎮静効果を応用し、即席で作った、片手真剣白刃取り。

「ぶつちやけ、この技は俺にだって成功するかどうかわからなかつたさ。

お前に勘づかれて、太刀筋をずらされたらそれで終わりだつたし

……」

俺は白刃取りの成功に安心して、低い姿勢を崩し、ふう、とため息をついた。

そして、受け止めていた彼女の一本の刀から指をそつと離す。

「…………どうだ魂魄？ その格好から身体が動かねえだろ？」

「……私の身体に何をしたのです、山本武？」

動かない自分の身体に焦りを感じたのか、動搖を見せる魂魄。

まあ、思う様に動かないのは無理もないか。

俺が何回もあいつの身体に、雨属性の死ぬ気の炎を入れといったからな。

それが、今になつてやつと作用したんだろう。

まあ、雨属性の炎が作用してくれなかつたら、白刃取りは成功しなかつたのだけど。

「何をしたつて言われても、俺はただ、この水色の炎を魂魄の身体に入れてただけだぜ、刀に纏わせてな」

俺はボンゴレリングから死ぬ気の炎を出し、魂魄に見せびらかしながら話す。

「…………だから、このままじつとしておいてくれよ。俺だって、これ以上お前を傷つけたくはねえからさ」

「敵なのに、傷つけたくは無い？……矛盾してますね。我々は敵だから闘う、なのに何故、あなたは敵である私を助けようとするのです？」

俺の言葉を疑問に思つたのか、俺の目を、じつと見つめながら話す魂魄。俺も負けずと、魂魄の目を見つめる。

「…………べつに、人が人を助けるのに理由なんて必要かよ？　それに、魂魄は充分に可愛いからな、……そんな奴の苦しむ顔を俺はもう見たくないんだ」

俺が喋り終わると同時に、魂魄の頬が林檎の様に朱く染まり、表情を見られまいと顔を俯せる。

…………はて、何で顔を真っ赤にすんだ？

俺は魂魄の様子を不審に思いつつ、青い竹刀袋を探しに行く。

いやー、やつぱり「いやつて、彼女の動きを封じてから取りに行くべきだつたな……

魂魄の事を気にせず、ゆっくり探せるし、第一腕の傷も深める事はなかつたのに。

「……で、目の前の私を拘束し、闘いが終結してしまつた今、あなたはどうするのです？　この幻想郷にいる限り、あなたは何処にも逃げれないし、元の世界に戻る事も困難なはず」

ようやく竹刀袋を見つけ、再び魂魄を拘束している所に戻つた時、不意に彼女から声をかけられた。

「……あなた？ 元の世界に戻ると言われても…。なんせ俺はまだ、やるべき事をやっていないし…」

「…？」

俺の言葉を変に思つたのか、魂魄は不思議そつな顔をする。
さて、そろそろ頃合いかな？

俺は魂魄に笑いかけ、再び時雨金時を構え直すと、誰も居ない筈の夜の桜並木に、魂魄にも聞こえる様な大きな声で、いつ問い合わせた。

「そろそろ姿を現してもいいんじやないか、魂魄の爺さんよ」

十 + +

「そろそろ姿を現してもいいんじやないか、魂魄の爺さんよ」

「……！？」

山本武の一言で、半人半靈の庭師、魂魄妖夢はハッとする。
幾ら山本武によつて、身体を思つ様に動かせ無くとも、魂魄は視線を動かし山本武をまじまじと見据えた。

「…………〔冗談にしては笑えないですね、山本武…」

私は言葉を紡ぐつとしても、これ以上繋げる言葉が見つからずも「もじ」と口づくる。

にしても、わざからの山本武は変だ。いきなり、私が可愛いんだと云つたり、私の御祖父様がまだ生きてる様な事を言い始める。

そんな、私の考えを知らない彼は、ただただ暗闇に覆われる、桜並木を見つめていた。「……」

もう、5分は経過しただろうか。桜並木からは、人の声はおろか気配もしない。聞こえるのは風が木々を揺らす音だけ。

私は気を取り直し、山本に話しかけようとした、その瞬間だった。私は暗闇の桜並木に隠れる人影を見るなり、言葉を忘れ凍りつく。

「……おじいさ……ま？」

暗闇から姿を現したのは、見た目65歳位の老人。白髪が混じつた髪、しわくちゃな顔には幾つかの切り傷があり、還暦を過ぎながらも颯爽としたその姿は、死んだ筈のお祖父様、魂魄妖忌こんぱくようきその物であつた。

妖忌祖父様は、私と山本武を交互に見るなり、しゃがれた声を発する。

「久しぶりじゃな、妖夢。元気そうでなによりじゃ、剣術の訓練は毎日怠つてないか？」

…これは夢？

私の憧れであった御祖父様にせつかく会えたというのに、私は素直に喜べなかつた。どうして、御祖父様は私をかばつて死んじゃつた筈なのに……

妖忌は、わたしの心情を察知したのか、穏やかな笑みを浮かべ、話しかける。

「まあ、驚くのも無理もない。死んだと思った者が、何の前触れもなく目の前に現れるのだからな。」

「……でも、待つてください御祖父様。それでは、私が今まで仇と思っていた山本武の……時雨蒼巖流はどうなるのです！ これでは……」

「真実は、斬つてから知る」、お前はわしの教えを貫き通した。それで、良いではないか妖夢」

“真実は斬つてから知る”御祖父様が口癖の様に言つていた教え。今回の場合は山本武は何も悪くない、ただ私が逆恨みをしただけだつたという事だ。つまり、彼は何の罪もないそれなのに、私は……そんな彼を本気で殺そうとしたのだ。

私は罪悪感と脱力感を一気に感じ、目を閉じる。山本の雨の何とか作用のせいで、地面に座る事もかなわない。

「それと、少年。私が居ると何処で氣付いた？」

「まあな、ぶつちやけて言つと俺は最初から怪しいと思つてたぜ、その時はまだ居るのがあんただとは気付かなかつたが」

刀を肩に乗せ、穏やかな表情で話す山本。しかし、その表情の中には秘めたる怒りがある、私はそう感じた。

「…………最初からか、少年その根拠わしに話してくれるか？」

山本の話に興味津々な御祖父様。あんなに、楽しそうな顔をした御祖父様は、私も初めて見た気がする。いつも御祖父様は無表情であつたから……

「ああ、別にいいけどよ。でもこれはあくまで俺の予想だ、話しき

聞いて気分を悪して襲い掛かるのだけは止めて欲しいぜ。俺はそれで一回死にかけてるんでな」「

「……わかった、それは約束しよう」

妖忌が言葉を言い終わると同時に、山本の刀も竹刀へと姿を変え
る。

「俺が魂魄との闘いで真っ先に怪しいと思つたのは、俺が逆巻く雨から車軸の雨を放つた…………つまり、俺の刀の先端が魂魄の頬を掠つた時の事。

（…）
「…」

「ほう…それで」

妖忌は、含み笑いを込めて山本を見つめる。彼もその視線に気づいたのか、肩をすくめて話しを続ける。

「次もまあ 同じ事だよ」 魂魄が最初に着ていた緑色の奴も、俺は
斬つた覚えすらないのに、まるで何かの爆発に巻き込まれたかのよう
に、ボロボロだつたし、今彼女が着ているシャツも俺は一太刀しか
浴びせてないのに、目のやり場に困るほどの酷い荒れよつ……誰
だって、この様子を見たら、おかしいって気づくぞ」

なるほど。

私は彼の話に深い共感を覚えた。たしかに山本の言葉が正しいのなら、私の衣服をボロボロにしたのは第三者、つまり暫定的には妖忌という事になる。

でも、もし仮にそうだとしても妖忌はどうやって私達に気付かれずに攻撃をしたのだろう。刀を使って攻撃をするのであれば、いく

ら戦闘に集中してた私や山本だつて気配で絶対に気付く筈なの!。

「しかし少年。 それでは、わしはどうやって妖夢を傷つけたのじゃ?
? いくらお前らが戦に集中していても、わしの気配くらいは察知
できるんじゃない?」

「……………弾幕だよ、弾幕。 誰にも気付かれずに魂魄（・・・）だけを
狙う攻撃手段。

俺の攻撃と上手くタイミングを合わせれば、本人にも気付かれる
事もなくやれる筈だぜ。

…………身体の痛みで魂魄の冷静な思考回路を麻痺させ、俺を攻撃
させるだけのマシーンとして起動させる事もな」

たしかに、私は傷の痛みのせいで、彼の話をまともに聞かなか
つたけれども、マシーンといつのは言いすぎな気がする。

そんな私を一瞥した山本は、今までの穏やかな様子が嘘の様な、
鋭い視線と殺意もつた声を妖忌にぶつける。

「お前は昔、京都の中で随一と言われた剣術の腕を持ち、何とかの
乱で軍師を務めてたらしくな。 そんでもって、頭の良いあんたはこ
う考えたんじやないのか? 時雨蒼巖流の剣士に殺されたフリをし、
自分という存在はその日死んだ（・・・）といつ事にして、今日み
たいな日を待つてたんだろ、やつと自分とやり合える様な実力を持
つ剣士が現れるこの日を……」

「……………なるほどな。 そこまで見抜かれていたか…。 いやはや、君
ならあの流派の継承者というのも頷ける」

妖忌の顔からも一切の笑みが消え、食い入る様に山本を見つめる。

山本も山本で、戦闘準備といわんばかりに、自分の持つ竹刀を真剣に変化させ水色の炎を纏わせる。

「俺だつて、時雨蒼燕流を使う剣士だ。あなたが考える事は解らなくもないぜ、自分と同じ…あるいは自分よりも強い剣士と闘う、それは剣を扱う人間であれば誰だつて思う夢だ、俺も昔そう思つた事もある。

だが、自分の希望を叶える為に、あんたは娘である妖夢の純粹な心を弄んだ。

妖夢がどれ程の覚悟と憎しみを持つて俺を…いや、爺さんの仇を討とうとしたかわかるか！？ 僕は妖夢と剣を交えたから、あいつの気持ちもんが…独りよがりかもしれないが理解できる気がしたんだ

「

そして、山本は力チャリと刀を中段に構える。

「…だから俺は、妖夢を弄んだお前を、絶対に許さねえ！！」

山本が全ての言葉を言い終えた時、不本意ながらわたしは、彼に胸を突き動かされてしまっていた。

標的22 ～黒幕の登場～（後書き）

英検やら、小テストやら、学年末考査やら、校内実力やら、郊外実力やらで投稿が一ヶ月以上先送りになりました。

弁解の余地もありません、こんなしょうもないcoco aを許してやつてください…

標的23 → VS 魂魄妖忌(

「はああっーー！」

俺は時雨金時を上に振りかざし、目の前の老人に向かつて斬りかかる。

「確かに、剣の腕は悪くはなさそうだ……だが、太刀筋が単調だな」「…っ！」

「とても解り易い」

妖夢の爺さんは俺の斬撃を澄ました顔で避け、無駄のない動きで間合いを取る。

辺りの空も、うつすらと明るくなり太陽が覗きだそとする頃。つか、そんな時間まで妖夢と闘っていたのか、俺！？

「…そういうえば少年、貴様の名は何と言うのだ？ 相手の剣士の名を知らぬまま、刃を交えるというのは無礼じやからな。わしはお前の名前を知りたいのだが」

右手を顎にそえ、白い髪をいじる爺さん。

……えっと、自己紹介。まだしてなかつたつけな。

「俺の名前は山本武。親父から教わつた時雨蒼燕流を使い、友達を守る為に力を使う剣士だ。…爺さんの名前は？」

「山本武か……。わしの名は、魂魄妖忌^(こんぱくようき)、半人半靈の庭師であり、己の道を探す剣士」

妖忌と名乗つた爺さんは、そこまで言ひつと腰に差してた獲物を鞘

から抜き放つ。

それは、長さ1・2メートル位の日本刀、いや野太刀で、刀の種類について、全く知らない俺でも、かなりの質の良い太刀であると容易に想像できた。

「山本武、私は相手が誰であれ手加減はせんぞ、全力で行かせてもらう」「上等だ、相手が爺さんだろうが本気であんたを倒すぜ、爺さん！」

俺の言葉が終わると同時に、刀を大きく振り上げ、真っ直ぐにこちらへ駆けてくる妖忌。

「「はあっ！？」」

地面を強く蹴り、妖忌が放った初撃。

俺は時雨金時に大量の雨の炎の炎圧を加え、向かえ撃つた。

＋ ＋ ＋

「…………つー？」

頭の中で突然感じた強い炎圧。俺、沢田綱吉はそのハンパない強さの炎圧に思わず、布団の中から飛び起きてしまった。

「……痛つって！？」

そしてその飛び起きた直後、俺はフランドールとの闘いで負った傷と、筋肉痛の痛さでボロボロになった俺の体が猛抗議し、俺はその場に膝をついて座り込んでしまう。

幸い、リボーンは今の声で田を覚ます事も、違う部屋で寝てる東風谷も駆け付ける事もなかつた。

「…………こしても、今感じた炎圧は何なんだろ？？」

体の痛みに耐え、千鳥足で何とか縁側までたどり着いた俺。空は齶すらと明るく、朝日はまだみえないけれども、幻想的な風景が目の前に広がつていた。

眼前に広がる風景に心を奪われそうになりながらも、俺はせっかく感じた炎圧について考え初めた。

そもそも、何故俺が死ぬ気の炎の炎圧を感じられる様になつたのかは、実のところよくわかつていない。何の為にこんな技を編み出させたのだろう？

いついう時に、なにかと力になつてくれそうなエ世ブローメもフランドール戦以来、夢に出て来る事はなかつた。

「…………だけど、俺が感じたあの炎の出力……ボンゴレリングによく似ていたな」

俺はそこまで呟くと、空の景色に見入つた。

「雨のボンゴレの守護者つていつたら、山本か…………あいつ今、何してんのかな、もう起きて野球の朝練とかしてたりして」

そして俺は、さりげなく田の前の風景に見入る。

「でも、もしかしたらあいつも幻想郷に居たりして…………ってまさかー？」

俺は、そこまで咳くとハツとした。といつより、今まで気がつかなかつた事に腹を立てた。

俺の知る中で雨属性の炎を使う奴はただ一人、山本しかいない。それに、この炎の出力は絶対ボンゴリングのものだ。なんせリングを使つてゐる俺が言つんだ、間違いない。

「リボーン、起きてくれー！ 大変なんだよ、どつかで山本が闘つてる！」

俺はすぐさま部屋に引き返すと、ギブスで固定しない右手でリボーンを揺さぶり、起こさせようとする。

「…………すか……ぴー…………」

「リボーンーー！」

しかし、リボーンは俺の言葉が耳に入つていないのか、全然起きる気配がない。

…………くつそ！ もしこのまま、山本が幻想郷のわけのわからない規格外の奴らと闘うのだとしたら、それだけは絶対に止めさせたい。俺はフランドルと闘つて、幻想郷に奴らの強さというものを痛いほど見せつけられた。それに、何と言つても大切な友達を傷つけさせたくない、それが親友ならなおさらだ！

「リボーンーー！」

「うつせえな、こんな朝っぱらから大声を出すな、馬鹿ツナーー！」

寝袋から飛び出したリボーンは、俺の右頬に強烈なキックを入れ無駄の無い動きで床に着地。

「やつた起きててくれたか、リボーン……」

俺は蹴られた頬をさすりながら、リボーンに話しかける。

「リボーン、大変なんだよ、今山本がさ……」

そして俺は、リボーンに事の顛末を説明する。

リボーンはフムフムと相槌を打ちながら聞いてくれた。

「なつ、わかつただろリボーン？　とにかくやばいんだって。俺はこれからあいつを助けに行く。…………もちろんお前も着いて行くよな？」

山本の居る場所はわからないが、あいつの炎圧を、もう一度感じられれば何とかなるはずだ。早速俺は、そこに向かう為に寝巻きである東風谷から借りた和服から私服に着替えようとする。

「…………おい、何急いでんだツナ。俺は一回もお前に着いて行くとは言つてないぞ」

「はあつ！？」

リボーンの言葉に、服を脱ぐてを止める俺。

「いいな。俺は着いていかねえぞ、といつお前を山本の所には行かせないぞ。山本が危ないと言つても、あいつは仮にもボンゴレの守護者だ、山本も山本なりになんとかすんだろ」

「何悠長な事言つてんだリボーン！！　お前も自分の田で見ただろ、幻想郷の怖さつてのを……」

「なら、尚更ツナは山本の所に向かわない方がいいぞ。ツナ、お前今自分の身体の状態を見てみろ。そんな身体で応援に駆け付けても、邪魔になるだけだ。だから今は、傷の治療に専念しろ」

「……でも

”でも”も、”かも”もねえ。もしお前が俺の話を聞けないなら、力ずくでも止めるぞソナ！”

変身カメレオンのレオンを拳銃に変身させ、銃口を俺に向けるリボーン。俺は、リボーンに「こと」とく言い負かされ、言い返す事も出来ない。

親友のピンチにも駆け付ける事が出来ないだなんて、俺はなんて薄情な奴なんだ！

今の俺は、とても無力でみじめであった。

+

+

+

「くつ…、爺さんあんた中々やるな

「少年」いや、とても良い動きをするではないか！！！」

妖忌との戦い、口ではいつてみた物の現在の戦況はかなり不利であった。

……なんと言つてもこの爺さん、無茶苦茶強い！！！ さすが、京都一の腕の持ち主。冷静な太刀捌きで俺の攻撃を全てかわし、こそと/or>いう場面で連続技を決めてくる。

今まで闘つっていて、やられると思つた場面が何回も合つた。、

「…」いや俺も、出し惜しみしてたらやられると。 来い、次郎！

俺は妖忌から一度距離を取ると、指に嵌めた次郎を呼び出し、俺は次郎から変則4刀の内の小刀2本を受け取る。

「これを使うのも懐かしいな、何年ぶりだ？ できれば、もつ一度と使いたくなかったのに。」

「…………ほつ、刀身がない小刀とは。どんな使い道があるのかね？」

好奇心田を向ける妖忌。

「ひつやつて使うんだよ、爺さん」

そして俺は、小刀の本来刀身がある箒の部分から雨の炎を噴射させ、空へと高く飛翔する。

「地上戦は飽きたから、次は空中戦でとつ事か……面白……」

妖忌は小さく笑うと、まるで背中に翼でも生えてるかの様な勢いで宙に浮かぶ。

やっぱ幻想郷、何でもありだな……

「さあ爺さん、今度こそあなたを倒すぜ。なんせ、人の策に嵌められっぱなしのは、面白くないんでな」

夜が明けそうな空の中、爺さんとの戦いの、第一ラウンドが始まろうとしていた。

標的23 ～VS魂魄妖忌～（後書き）

さて、山本VS妖忌の闘いがはじめました。

今回は空中戦をメインにして書けたらなと思つています。

次回には、山本の新しい技が登場！？…するかも知れません。

最後に、誤字脱字でもありましたら、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911n/>

Una fantasia del vongole ~ボンゴレの幻想~世の軌跡~

2011年4月24日16時58分発行